
夏空

たこねぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏空

【著者名】

たこねぎ

【ノード】

Z0461T

【あらすじ】

ある事故がキッカケで野球をやめた少年は平和で地味な高校生活を送ると誓つが……？

(モットーは楽しく・明るく・すこやかにです)

第1話　こんなのが見つかるから？（前書き）

『お前のモットーは教育方針か！？』的な突っ込みは無しの方向で
お願いします。

第1話　こんなのが見つかるから？

眠い……」これこそ放課後の教室で自分の席に座り欠伸する俺の気持ちを一言で表している。

高校に入学して一週間、授業も始まりそろそろ生活リズムが整つてくる頃だが。

寝不足は否めない、夜遅くまで何をしてたかって？

そんなこと言えるわけねえだろ、R指定の物語になっちゃう。

……とつあえず、自己紹介からじょうか、俺の名前は神谷 功。かみや いの

兵庫の県立開成高校に通う、高校1年生。

これといった特徴は無いし俺は何かを自慢するの好きじゃない。普通に日常生活が過ぎるならそれが一番だと強つほどの平和主義だ。そんな、俺を厄介^{いざけ}_{いざけ}と巻き込むとする奴に一週間前から付きまとわれている。

そう、入学式からだ。これってもうストーカーじゃね？

とか思っているのも事実だ。

家まで尾行してくるとかそんなんじゃないよ？

あいつの言い分は

「一緒に野球やひうや……」

「今日も懲りずに来たよ……」

「だから、何度も言つてるが俺は中学で野球をやめたんだ。勧誘な

「うわ、あれか？」

「なんこと言わずにワイと一緒に野球やるひや、わざと楽しゅうて
しゃあないで！」

「この名前は『山中 淳』俺に付きまとつスニーク、もしか
してあっちの奴か？」

だとしたら、俺の身が危ない。

……まあ、今は置いておこう。

公共の場では襲われる心配は無いはずだ。

「しつこい奴だな。

第一なんで、お前みたいな奴がこんな公立にいるんだ？

強豪校からの勧誘だつてあつたはずだ」

そう、この山中は中学時代、近畿圏内では名の知れ渡ったスーパーエースだった。

あえて、甲子園への困難な道のりを選んだバカなのだろうか？
現実はそう甘くない。

「何いってんねん。

そんな」と言つたら、お前もやうが。

弱小チームを全国大会ベスト4まで導いたエース 神谷 功

あーあ。行き成りやつてくれたよ。
俺、自慢するの好きじゃないって言つたばかりなんですよ？

「野球は中学でやめるつて決めてたんだ。

金のかかる私立より家から通えて金のかからない公立に来るのは当

然だろ？」

「九〇」

なら今日からまた始めよ」

このやり取り。

かれこれ一週間続いてるんだぞ？

卷之三

「お前がどれだけ真剣でも俺の気持ちは変わらない。じゃあな」

「……お前と違つて俺はその場所にそこまで興味を持てねえ」

全く今日もあいつのしつこい勧誘に疲れたぜ。
自室のベッドでとりあえず昼寝でも……

「ん？ おかえり～」

「貴様、人の部屋で何をしている?」

「掃除。

だつて、功の部屋汚いもん

今、俺の部屋否、俺の家に上がり勝手に掃除していたのは、俺の
幼馴染の女の子『さいとう斎藤舞』
地毛の茶髪にセミロングの髪、顔は可愛い部類に入つて相当モテ
る。

俺が聞いた話だけでも中学時代から何回も告白されている。
それなのに一度も彼氏が出来たことないのに不思議だが、こいつ
は中学時代ある伝説も持つている。

中学時代、近所の不良を無双し一掃。

その後、この付近一帯に平和をもたらしたと言づづ都市伝説。
こいつはとにかくモテるが女子とは思えないほどケンカが強い。
これもきっと中学2年までやつてた空手のせいだろう。

「いらっしゃり幼馴染とはいえ最低限のプライバシーは守れ

「あんた、いつからあたしに意見するようになったの？」

「やつやばー！」

指をならすあの動作は戦闘態勢に入ろうとしている……。山中の勧誘に少しつらついていた！

そのままでは俺の命が……！」

「まつ待て！ 僕が言いたいのは思春期の男の部屋に入るなとこつ意味だ！」

「くー、なんで？！」

察してくれそのへりこー！

「なんでもだ。お前だつて部屋に見られたくないものへりこあるだろ？」

「無いよ」

……年頃の女の子ってそんなの？

「とにかくだー、自分の部屋へりこ自分とするから勝手に荒らさないでくれー！」

「こんなのが見つかるから？」

「そつそれは……ベッドのトとこつベタな場所に隠していたあの本！！

何かは男の子なら分かるよな。

「どうあえず返せ」

「まだ18歳でもないのにこんなもの持つてていいと思つてゐるの？」

俺だつて男だ！ 興味持つて何が悪い！！
なんて、恐ろしくて言えない。
ひつなつたり……

「じゃあ、お前を襲えつて意味か？」

「へ？ わよちよつと何言つてたの……？」

よし、動搖したな。
意外と押しに弱い」とは知つてゐるんだぜ。

「だつて、仕方ないだろ。

お前は見知らぬ子を襲えつて言つのか？」

「スッストップ！ なんだ、やつなるの……」一回離れて……

「嫌だつて言つたら？」

「やつそれは……」

まったく、赤くなりやがつて顔が可愛いつつことを自覚しないのままだと俺の理性が危ない。
目的の品は返してもいいんだ。

「あつ……！」

「……」

「あんた……あたしをからかっただわね？」

落り着け俺、ここで選択を誤れば俺はあの世へ一直線だ。
ここで打てる最善策は無言でこの戦闘区域から脱出する」
などと云ふ

「……」

「なー? 待ちなごー!」

第2話　Iの変態！

「本当にすいませんでした」

俺は今、舞に土下座中。

なんでかつて？ 捕まつたからに決まつてんだろ。

「まあ、いいわ。

あの本は捨てとくから。今度似たようなもの見つけたら……分かつ
てるわね？」

俺の命が消えるってことだろ。
バツチリ〇クだぜ

「はい」

「よひしい

じゃあ僕飯にしましょ」

あああ。あの笑顔が怖いよ。

晩御飯に毒をもつてくるとかそんな裏技は無いよな……
残りの物もいますぐどうにかせねば！

Side 斎藤 舞

ホント信じらんない！

あんな本をベッドの下に隠し持つてたなんて！

まだ、出てくるかもしね、今度は詳しく述べなきや。

……それにしても、あたしを襲うつて……

そつそりや、それはそれで悪い気はしないけど、もつといつ……
段取りつてものが……

ダメダメ！ 思い出しただけでも顔が熱くなつてきた。
早く忘れなくちや。

にしてもあの鈍感バカも気づかないかなー？

いくらあいつの両親が仕事でアメリカに居て家で一人だって言つても。

普通にひやつて毎日ご飯づくりに来るわけないでしょ。
ホント鈍いんだから……功のバカ！

「功、ご飯出来たよー」

Side out

「功、ご飯出来たよー」

「へーー」

ケンカ強いくせに料理とか女の手でじこじことは翻つとよべになす
んだよなー

こいつの腕つ節の強さを知らない男子からしたらもうやつや 最高
なんじやない?

「んー、相変わらず。美味しい」

「バカ言つてないで。早く食べなやこ」

満更でもないくせに。

でも、美味しいのは事実だ。

俺も料理は少しくらいなら出来るが舞には全く敵わない。

それにしてもこいつは3食全部俺の世話をしてくれるので俺に何も見返りを求めてこないな。

一体求めているのだろうか……俺にはわづぱりだ。

「功、あんた。

何か運動部に入らないの? 運動神経良いのにもつたいないよ

「やうねえよ。しんどくせえ」

「……そつか。そうだよね、功が野球以外するわけないか

「その野球をやめるんだ。

他のスポーツなんてやる気は無いし、俺にそんな資格は無い

「そんな言い方しなくとも……」

「これは俺なりのケジメだ。

……『じちそうさん。今日も美味かつたよ』

そうだ、俺は野球をやつちゃいけない。

あんなことを……1人の野球人生を奪つた俺が野球をするなんて許されないんだ。

Side 斎藤 舞

あいつは何時になつたら自分を許すのだろう。

あれは事故だつたのにいつまでも引きずつて……

あんなに楽しそうに野球をする功をもう見られないのかな？

自分の感情を押し殺して、他人と距離を置いて過ごしていく日々の中にはあなたは満足なの？

Side out

ん？ 朝か……

昨日はメシ食つたあとそのまま寝たのか。
学校まで時間あるしシャワーくらい浴びるか。

「ふあ～、舞の奴に起しえれずに起きるのは久しぶりだな」

あいつのおかげで遅刻は免れてるし田立つ」となく高校生活がスタート出来た。

たまに口うるることもあるけどしゃべらじ感謝しないとバチが当たるつてもんだ。

あ～、朝のシャワーは気持ちいい。

「あ、パンツしか出してねえ」

なんてこいつた、まだ4田上旬だせ。ぬれた身体には寒すぎる。
早いとこ上を着なこと……あ……
俺の田線の先には田を丸くする舞の姿。

「よつよつ。おはよ」

「…………やああああーー。」

はい、朝から素晴らしい絶叫ありがと。

何これお約束つてやつ？

母さんが舞に渡した家の合鍵返してもらつた方がよかつたかな？
たまに早起きしたらこれだよ。

「なんで朝からパンツ一枚なのよ！？」

「シャワー浴びて出たら、お前がたまたまいたんだろ！？」

ちなみに俺もう服着てるからね

「昨日といふ……！」の変態！？」

「なー？ ちよつと待て。

昨日のことば俺に非があると認めよつ。
だがな、風呂場から出てきてパンツ一枚くらゐ別にいいだろ！？」

「女の子にそんな格好して。

恥ずかしいとか思わないの！？」

「お前と俺の仲なんだからいいだろ！？」

決して幼馴染の裸を見て興奮しないつて意味じゃないからな。

最近女の子らしい体つきになつてきたスタイル抜群の年頃の異性
の裸なんて耐えれるわけねえだろおおお！

……俺は何を言つてるんだ？

にしても、今日も山名の奴来るのかなー？
いい加減諦めて欲しいもんだ。

第3話 勝負やな（前書き）

主人公を野球に誘つやつ = 関西弁をしゃべるやつ
すいません、作者の勝手な偏見とこだわりです。

第3話 勝負やな

ん~、すばらしい晴天だ。

昨日「テルテル坊主を逆さまに吊るした意味を疑ひはじ、すばらしい晴天だ。

「はあ、何が体力テストだ」

疲れるだけじゃん?

正直めんどくさい、俺だけじゃないはずだ、この気持ちを抱いているのは。

適当にやつて過ごすか。

「よひー! 神谷ー! 気は変わったか! ?」

元気のいい声で山中が俺に話しかけてきた。

ふう、朝からめんどくさい野球バカに絡まれた。

こいつ、隣のクラスだからずっと一緒にやん。めんどくせえー

「あのな。

いい加減しつこいんだよ、あきらめや」

「よし、なり」の体力テストでワイヤーついたら歸めるわ

おじおじ、すでに超高校級の身体能力を持つてる。
お前に勝てるわけねえだろ。

「嫌だね。そんな勝負だれが受けた「受けれるわ！」なー？」

舞！？　お前何勝手に答えてくれてんだ！？

「どうせ、功が勝つんだからこりゃでしょ？」

「バカ野郎、こいつに勝つとなると俺も本気でしないと「よひしゃあー、勝負やな神谷ー」はー？」

山中、お前も話を聞け！　俺は一切認めてないぞ！　そして、返答を聞く前にどこかへ行くなー！

「嬉しそうだったわね。彼」

「お前のせこだぞ、どうしてくれんだ？」

「負けなきやーいのよ」

めりやくめりや言こやがつて。
にしてもキレイな太ももしてるなー

「つー、見るな変態ー！」

なつー？　下心がばれたか！？
今度から注意せねば。

「見てない」

一応、呑[の]はするよ。

「よく、囁[ささ]わ。まあ、とにかく頑張ってね」

「おつか

しぃゞゞへせー。

山中のことだからそりゃ凄い記録出すんだろうなあ。
はあ、本気でやらないと負けんじやん……俺田立つのつ嫌いな
んだよね。

疲れたあ。残す種目も後、50m走のみ！ 長かった……」
でホント長かったよ。

とりあえず行けるところまで全力できたが、身体がもたん。
俺も歳だな……

「よつ！ 調子はまだないや？」

またお前か……

「ぼちぼちだ

俺は点数の種目の成績によって記入された紙を見せ付けた。
我ながらなかなかの点だ。

「ふうん。なんやワイと同じか

「マジかよ

つまり、この50m走で決着をわけね。

「ワイと一緒に走るわ

「嫌だ。第一、名前順なんだから無理に決まってんだろ

「ちょっと待つとれ、先生説得してくるわ

ほんとに行つたよ。

あいつキャッチャーだったよな？

足速いのかな？

「よつしや、勝負やで神谷

……ホントに横に来たよ。
どんな手使ったんだ？

「はあ、覚悟決めるか。

お前中学時代のタイムは？」

「6秒フヤ

本気で走れば問題無いか。
俺の身体が鈍ってなればなればだが。

「位置についてよーい……

「俺の勝ちだな」

「ちよちよっと待て！　お前がそんな速いなんて聞いてへんぞ！」

「誰が遅いだなんて言つたよ」

結果は俺が6秒2で山中が6秒5。

周囲からは賞賛の声が上がっている。

「まあ、諦めてくれ」

さてと、点数記入してカードを提出だつたな。

俺の点数は……6秒5以下で10点か。

じゃあ、俺は10点……待てよ。

これって山中も10点つてことじや。

「あつ、ワイヤーの話や」

「氣づくなー、弓を分けなんてまた話がやせ」しづくなー。

「弓を分けやなあ、でも約束は約束や。
ワイヤはお前の勧誘あわらめるわ」

えらくあつわつ手を引いたな。
もつと、絡んでくると思つたんだが。

「やうか、熱心に誘つてくれたのに悪かつたな」

「氣にすんなや。」

ワイヤらだけでもなんとかなると思つわ」

どれだけの面子が集まつてるか知らないけど。
そんな甘いもんじやないだろ。

「本氣で行けると思つてゐのか?」

「それは今からワイヤら次第や」

真つ直ぐな田だな。

お前みたいなバカが一緒に考えることが少なくて樂をつけだな。

……神鳥。

お前は今どうしてゐる?

第4話　じづけ！

山中の勧誘から解放され2週間がたつた。
これは噂だが山中はもうレギュラーで試合に出てるらしい。
まあ、そこら辺の高校生とは格が違うからな。

「俺は宿題でもこなすかな」

「ん？　これは誰の靴だ？」

学校から帰り玄関を開けて俺の目に飛び込んできた見慣れない靴。
どろぼう？　でも、男の物にしては小さいし第一きちんと並べ過ぎだ。

人の家を泥棒しようと言つのにまるで危機感がない。
この家はなめられてるのか？

「つたぐ。誰だ……」

「あつ。」

「うひー……！」

何故、お前がここに居る！？

それに人の家のリビングでくつろぎすぎだーー！

「ひつにい！
会いたかったよおーーー！」

「おこいりーー！」

抱きつくなー 離れろー。」

キレイに並べられていた靴の持ち主は斎藤 愛。
舞の1つ年下の妹。

ショートカットの髪をしていて舞と同様キレイな顔をしているが妹とあって少し幼い顔をしている。
ソフトボールをしていて、最近部活も忙しく顔を見たのは久しぶりだった。

「久しぶりなんだし、いいじゃんー。」

「いいから、離れる」

「愛。功から離れなさい」

なんだ、舞も居たのか。

靴は無かったと言うことはまた、ほぼ舞の部屋に隣接している。
俺の部屋から入って来たのか。

「やだー、まいねえ何時でもこいつの部屋に出入り出来るじやん。
だから、今は愛が甘えるー。」

むちゅくむちゅだ。

誰か助けてー

年下に手を出すつもつはまだ無いよー

「功が困つてゐるでしょ」

お前の勝手な出入りにも困つてんだよ。

玄関から入れ玄関から！

「まいねえ、いつも理由いじつけてこいつに」と2人と一緒に飯食
べてるくせに」

「なー？ あたしが作ったんだからそこで食べるのは当然でしょー。」

何が当然なんだ？

作ってくれるのはありがたいが……

「するい！ 愛もこひてこと一緒にご飯食べるー。」

お前も何を言つているんだ？

「あんたねえ！ ちょっと来なさいー。」

「いじにい！

まいねえがいじめるー」

俺を巻き込むな！

お前らの姉妹喧嘩に巻き込まれたら俺の身がもたん！

「まつまあ、舞、落ち着けって。

愛が怯えてるぜ」

「功……あんたならどうすればいいかわかるわよね？」

指を鳴らすな！

仕方ない何より自分の命が一番大事だからな。

「許せ、愛」

「やだやだ！」

まいねえ、最近容赦ないもん！！

「元気、一緒に飯食べてもいいでしょ……？」

「う、そんな上田遣いで見られると……

「まつまあ、いこじゃんねえか？」

人数多いほうがにぎやかでな」

「やったー！」

「いいが〇×してるからまいねえも文句ないよね？」

「うう。

勝手にしなさい」

「えー

今、舌打ちしてましたよ？

これに動じない妹とは……なかなか愛も頼もしく育つたな。

兄ちゃん嬉しいぞ……！

……ホント俺は何言つてんだろうか。

「元気。

よひしへねー！」

だから、抱きつかな。

第5話 僕、食べ物じゃないぞ？

Side 齋藤 愛

始めてまして齊藤家の次女、愛です。
今、こうにいと2人でゲームします。
まいねえは今、後片付けで忙しいから、2人つきりです。
ああ、この時間がずっと続けばいいのに。

「ねえ、こうにい。

彼女できた？」

「出来てないよ」

よかつたあ、こうにいモテるからなあ。

実際あたしの同級生にも紹介して欲しいといふ子はけつこうつ居た。
全部断つたけど。

「まいねえと進展は？」

「なんのだよ？」

こうゆう時こうにいが鈍くて助かる。

でも、あたしの気持ちにも気づいてくれない……それどころか
つと妹扱いで女としてみてくれない。

こうなつたら、中3には少し早いけど……

「ねえ、こうにい。

今、2人つきりだよね」

「それがどうした？」

「これから、いつの間にかと食べおかずを置いて」

まいねえ「めん！」

妹のわたくし、いつに押し倒します！

「……俺。」

食べ物じゃな「ぞ？」

もうだ、いつにこいつと天然だつたんだ……

「ちがうよ。」

やつゆう意味じゃなくて……」

「じゃあやうゆう意味だ？」

「いこひどこ……」

Side out

「じゃあ、どうゆう意味だ？」

急に意味不明なこと言ひ始める。

急に顔を赤くしてモジモジし始めてどうしたんだ？

「そつそれは、その……」

「その？」

「うわー！」

「うわ！ 行き成り抱きつくなー！」

「えーっと、愛。

どこでくれるかな？」

「やだ」

やだつて、この構図はどう見たつて俺がお前に押し倒されてるだ
るー。

やばいってこんな状況舞にでも見られたら俺の命がーー

「お前、ホントに急いでいたんだ？」

「ねえ、うわざまびしだらあたしの事、一人の女としてみてく
れる？」

「はー？」

思わず声が裏返つちまたた。

て、言つか愛、お前が乗つてるのは俺の息子の……

「うわー、うわー、氣づいてるんでしょ？

あたし……うわーのこと……「おー！ 一人もん向をしてるのかな？」
えー？

やべえ、終わった……

「まつたく！　あんたはあんな本を隠し持つといてあげく！
幼馴染の妹！　しかも中学生に手をだすつもりだったの！？」

俺は今、舞に説教くらつてます。
愛は自^ゼ由へと強制送還。

「ちう違^{ちう}う！　そこまで食えてねえよー
あれは愛が押し倒したって言つてんだろー！」

そして、俺はさつきから、弁解をしているんだが聞く耳を持つてくれない。
このままじや俺の身があぶない。

でも、やつたのあれば結構惜しいシーンだった。

「何考へてんのー。」

「ぐふー。」

相変わらず、素晴らしこパンチだ。

見事に俺のボディを捕らえたぜ。

今は悶絶してるがこのまま引き下がる俺様じゃないぜ

「少しほ反省しなさいー！」

まずは深呼吸だ。

ス～ハ～ス～ハ～、よじこれで話せるか

「まあ、待て。

反省するよりも俺はお前にやつてもうわなあやなら」とある

「なつなによ？」

お前が動搖するパターンなんていつも把握済みなんだぜー

「男としてはやつたの状況はなかなか惜しいものだった。
そこだ……」

「ヤレで?」

許せ、舞！

お前を押し倒すのはあくまで理性ある行動だ！
断じて本能任せた行動ではない！

「うふちゅうど、どうでー！」

「やだよ、お前ひやひやの続きをやつてもいいから」

「じょ冗談よね？」

それいけ！

もう一押し！

「マジだよ。

愛も帰ったし今、この家には俺とお前2人っきりだろ」

「でっでも、あつあたし。

」「うわうの初めてだから……」

そんなに顔を赤くして言わなくともここのに。
もう少しはじめみたが俺の理性も結構やばいんでこの辺で。

「冗談に決まつてんだろ」

「へ？

……そう、うわうの」とね、何か言い残すことはある？

この後、俺は顔を耳まで赤くする舞に木つ端微塵に粉碎された。

第6話 何がオリエンテーション合宿だ

見知らぬ新入生どうしが仲良くなるきっかけは？
もちろん色々あるだろう、いつの何か友達になつてていることなんてザラだ。

ただ、中には人見知りで友達の出来にくい人だつて居る。
そんな人たちのためにあるのが……

「何がオリエンテーション合宿だ」

俺は合宿場へ向かうバスの中ため息混じりにそう呟いた。
そう、うちの新入生、学校恒例行事『オリエンテーション合宿別名』とりあえず、色んな子と仲良くなろうぜの会なんでも、ある場所に2泊3日するんだとか。

「友達つくるチャンスじゃん。

元気だしなって」

窓際の俺の席の隣に座るのは幼馴染の舞。

クラスが一緒とはいえ何故お前が俺の隣なんだ？

「功が席決めのとき寝てたからでしょ」

俺の心を読んだ発言をするな。

お前はまず他の男子に人気があることを自覚しろ。
周りからの視線が痛いんだよー

「とりあえず黙れ。」

それにオリ合宿で友達を作る気なんてない。

ああ、早く帰りてえ」

「あら? もうホームシック?
功は相変わらず子供だね~」

くそ、反論はしたいが……
俺はまだ自分の命が惜しい。
ここは変化球で攻めるべしだ。

「つるわー。

お前こそ自分の家以外で寝れんのか?
中学の時はびびって寝れなかつたくせに」

「あんた……それをあたしが気にしてたこと分かつての発言?」

やつやばい!

地雷を踏んだか!?

隣から、その距離20cm以下の距離からバシバシ殺氣が!

「じょ……冗談です」

「帰つたら覚えときなさい」

怖いよお。

俺は一体何されるの!?
はあ、短い人生だつたなあ。

「ふあ、疲れた」

俺はあぐびをしながら宿舎1階のロビーを歩いていた。泊まる場所は少し小さめのホテルみたいな場所だった。

1階から8階まであるが俺らが使えるのは5階まで。

1階はただのロビー、2階は食堂や風呂やら男女共同で使うものだけ。

3階は男子、4階は女子が泊まる部屋があり階同士での行き来は禁止。

5階は先生たちが使うから、異性と会いたいなら1階か2階しかないと言つのが現状。

そして、各階には巨大な体育館に繋がる通路がある。

合宿中のオリエンテーションはそこでするらしい、開会式もそこで行つた。

そして、現在夜7時。

「よひー！ 神谷、こんな所で何しどんや？」

めんどくさいのが来ましたよ。

「山中が、別にセレの自動販売機で飲み物買ってただけだ」

「ほーう、確かに持つとるけど、ほんまか？
実は彼女と会つてたとかちやうんか？」

「彼女なんていねえよ」

「こつも一緒に来てるあの子、斎藤とか言つたらや。付き合つてゐんのやない？」

いつの間に俺と舞がそんなことになつてるんだ?
あんな奴と付き合つたら身体がもたん。
これは早く誤解を解かねば。

「あいつはただの幼馴染。

彼女とかそういうやめじこ関係じゃない」

「なんや、おもんないわあ。

でも、これは喜びそうな女子がたくさんこそうやな

「じつめいじだ？」

「お前結構女子の間で噂になつとるで。

斎藤と付き合つてゐるから、既ほば諦め状態やけど」

まあ、確かに容姿だけ見たらかなりの美人だしな。
あの暴君のような性格さえなんとかなれば……

「これは神谷争奪戦が勃発しそうやな

「何をこいつは言つてんだか……

「冗談は……ん?」

「どないした?」

ロビーを歩く俺たちの目に飛び込んできたのは
2人の男どうちの女子生徒、軟派かな?

男たちが何やら色々言つているが女の子は断固拒否の意思を見せ
ている。

「ワイが止めて言つてもいいけど、こゝは女子にモテモテの神谷君
の出番やな」

「やつかじ」と巻き込まれるのはごめんだ、先生でも呼んでくれ
ばいいだろ

「まあ、そう言わず、行つて来い!」

「ちょ!

「バカ、やめ……ぶ!」

こつてー、山中に押された勢いで鼻をぶつけた。

……ぶつけた？ 何に？

「おい、ガキ。

ケンカ売つてんのか？」

今なら安売り！

つて関西らしく答えたいけど、何この状況？

男2人がバシバシ睨んでくるんですけど……

「お願いです！ 助けてください！」

ああ、女の子にそんなこと言われたら逃げれない……つて山中お前は何楽しそうに笑つてんだ！

少しば手伝ええええ！！！

「死ねガキ！」

はあ、ホントめんどくさい。

第7話 今日は厄日だ

「これで終わりだな」

そう呟く俺の目の前には腹を押されて倒れる軟派男×2
幼少期から伊達に舞の猛攻に耐えてるわけじゃねえっての。
正直そこら辺の不良なら俺は負ける気はしない。

「どうも、ありがとうございました！」

私、北川 沙希って言います、本当に助かりました

これって何か変なフラグ立ててないか？

「別に気にしなくていいよ。」

俺は神谷 功、北川さん、何組？」

「1組です、神谷君同じクラス……」

「なにい？ こんなかわいい子覚えていないぞ。」

黒髪のロングをしているかわいい子……ダメだ。

俺の検索にはH.I.Tしない。

「そつか……一緒にクラスか。」

「ごめん、全然覚えてないや」

「神谷君、いつも寝てるもんね」

「この子結構、直球勝負だな。」

「なんでも知ってるの？」

「そつそれは……その……」

そんな田線を逸らさなくとも……
もしかして、俺避けられてる…？
初めて話す女子に避けられるって……

「こりゃ！ お前たち何してるんだ！」

やば！ 先生来ちまつた！
山中ああああ！ 笑ってないで助けろおおおおお！

「くわ、今日は厄日だ」

現在夜の10時、約3時間の説教を受けて俺は釈放された。
北川は30分で釈放だったんだが……。

「いめんね、私のせいで」

どうやら、俺が取調室（ところひがしの説教部屋）から出てへるまで
待ってくれてたようだ。

「気にはんなつて、山中が全部悪いんだから」

そう、あいつが全ての原因だ。

今度あつたらびつ飛ばしてやる。

「じゃあ、私はこれで。
おやすみなさい」

「ああ、お休み」

俺もせつねと部屋に帰つて寝るか。

今日は疲れた。

Side 北川 沙希

私が部屋に戻ると同室の齊藤さんが話しかけてきた。
「この子……確か神谷君といつも一緒にいるけど、どうゆう関係なんだろう？」

「北川さん、大丈夫？ 变な男たちに絡まれたんでしょ？」

「大丈夫だよ、神谷君が助けてくれたし」

「へ？ 功が？」

「うん、男2人倒しちゃった。
ねえ、前から聞こいつと思ってたんだけど。
齊藤さんって神谷君と付き合つてるの？」

「あつあたし？」

「ないない、ただの幼馴染つてだけ」

顔を赤くして否定……まさかとは思うけど。

「神谷君のこと好きなんだ？」

「いっ、いきなり何言つてるのー？」

「これは図星つぽい。」

齊藤さん男子から人気あるのは知つてたけど神谷君が意中の相手

だつたとほ。

「なるほどねえ……

ねえ、神谷君につけて色々教えてくれない?」

「いいけど、功のこと知つても面白くないこと思つよっ。」

「いいの、興味があるだけだから」

そう、興味があるの。

だつて、私は彼のこと恨んでいるんだから……

第8話 テートー

「えー、ではこれでオリエントーション合宿の閉会式を終わります」

終わったあ、「」の謎の2泊3日も残すは帰宅のみ…

「ねえ、神谷君」

「ん？ 北川か。

何かよいつ？」

このオリエント合宿中やたらと俺は北川に話しかけられた。

初日にあったことを「気にしなくていい」と言つたはずなんだが

……

「少し聞きたいんだけど。

野球はやらないの？

山中 淳君だけ？ 彼に熱心に誘われてたじやない

「……中学で野球はやめたんだ。
高校では特に何もするつもりはない」

「それだけの才能を持つていながらもつたいない。
舞ちゃんも野球してほしそうだったよ」

「舞ちゃんつて……

いつの間にそんなに仲良くなつたんだ？

「俺の知ったことか。

高校は適当に3年間過ごすや」

そうだ、何もせずに3年間過ごすんだ。
もう忘れるんだ、野球のことなんて。

3日も離れてるとなんだが懐かしいな我が家は。
久しぶりに自分のベッドで寝るか。

ガチャー

ん？ 今のは玄関のドアが開く音。
まつまさか、泥棒か！？

「の家には盗ものなんて何も無い……

「ハハハ……」

「ふはーー。」

愛、入ってきたのはお前だつたのか……
行き成り抱きつくな、勢い余つてこけそうになつただらうが。

「愛……お前なんで俺がいるつて分かつたんだ?」

「女の勘!」

ねえ、こうじい今日ハハちの家で寝ていい?
ハハも明日休みなんでしょう?「

女の勘つて恐ろしいですね……

加えてこの子は何意味のわからないことを言ひてるんだ?

「そんなことは舞が許さないだろ? それに俺も許すわけ「ダメえ
?」「ハハ?」

くそ、女の子の上目遣いに俺は勝てないのか!?

現在俺は携帯で舞と会話中。

内容はもうひろんあの娘さんのことだ。

『愛が泊まるー?』

「ああ、どうあっても帰る気は無いらしい。
着替えも持ち込んで準備万端つてやつだ。
晩飯は2人でどうか食べに行くよ。

お前も今日は疲れてるだろうからゆっくりしてくれば。

『ちよ……はあ、あの子つたら。

何かあつたらウチに追い返していくからね』

「了解」

ふう、舞にも話をつけたし、後は晩飯だけだな。

何を食べに行こうか……

「いひひ。」

まいねえ、怒つてた?」

「ん? あー、別に怒つては無かつたぞ。

なんかあつたらお前を家に送り返していくとは言われたけどな

「じゃあ、大丈夫だ。」

「うひーはやんないとしないもんね」

「お前がいい子にしてたらな。

支度は出来たか？ やつをとメシ食い行くぞ」

「うそー。」

外に出て行き成り抱きつかな。
誰かに見られたらどうする気だ。

「愛、頼むから離れてくれ

「少しふりこないじやん。

」れぐりこしなきや 霧囲氣出ないし」

「何の霧囲氣？」

「トートー。」

中学生どトートーってねえ。
みんなで、どう思います？

第9話 お腹空いてないか？

「ハハハ、ハジマリ様でした」

「どういたしまして」

はあ、俺の残り少ない今月の小遣いがファミレスの料理となつて消えたよ。

来月からは使い方を改めよう。

「さて、帰るか」

「ええー、少し遠回りしてかえろ」

「却下だな。

一応俺はお前を預かつてる立場なんでな、何かあつたら責任は取れないしな

「ハハニハナのけちー

その代わり夜は知らないからねー」

これは危険な予感……

ここは一つ……

「愛、小腹空いてないか？

あの店のクレープ買ってやるよ」

「ホント！？
やつたー！」

フツ、ちょろいな所詮は子供か。

舞も甘いもの好きだからな、この姉妹は似ていて助かる。

「でも、愛の機嫌はなおらないからね」

……俺の心が読める所までそっくりだな。

ブーブー

愛が風呂に入っている間、漫画を読んで寝転んでいた俺の耳に響く携帯の振動音。

こんな時間に誰だ？

メール1件

『北川です。明日空いてる？

もし、空いてるなら10時に駅前に来てくれない?
少し用事があるて』

やつにえは北川にアドを教えたな、俺はオリ合宿に携帯忘れたから登録はまだけど。

しかし、これはもしゃ、あれな展開ですか?

「大丈夫、じゃあ、10時に駅前ね。了解つと」

送信完了。

用事ねえ……ややこしい用事じやなきやいいんだけど。

「うひにい、今だれとメールしてたの?」

愛か、お前の寝室は両親が使っていた隣の部屋だと囁いたはずなんだが……

「クラスの女子だよ。

あ、俺明日、10時前に出かけるからそれまでに家に帰れよ

「まつまさか!?

その人とデート!?

「ちげえよ、ただ、呼び出されただけだ」

S.i.d.e 斎藤 愛

「ちげえよ、ただ、呼び出されただけだ」

「ちげえよ、ただ、呼び出されただけだ」

でも、休日に女の子と会うなんてデート以外考えられない。
それにこうにいが休日にもいねえ以外の女の子と会うなんて初めてのはず。

中学時代は野球で忙しくて休みの日もずっと野球してたし。

じゃじゃあ、こうにいの初デートが愛の見知らぬ女！？
わーん、何気にショック……

「那人、なんて名前？」

「は？　お前が知ったところで仕方ないだろ」

「教えて！」

「そんな、身を乗り出すなよ……
知つてどうする気だ？」

「だつて、気になるもん！」

でも、こうにいはきっとやんとした理由がないと教えてくれないし。

かとこいつは愛の理由はこうにいには言えない理由だし。

「お願い教えて！」

「何わけの分からないこと言つてんだ？」

それにもう寝る、もうすぐ日付が変わるぞ」

むへ、どうしても教えてくれないな。

「愛、今日はこうにいと一緒に寝るー。」

「は？　お前何言つて……つて、俺のベッドに入つてくるなー。」

「これでいつこなは逃げれない。

普段甘えれなにしつこで今甘えておいつとー。

「電気消すよー」

Side out

「電気消すよー」

はやー！

人のベッドに潜りこんでからの一連の動作。
その無駄の無い動きはもはや芸術の域と言つていいくだらう。

「愛、頼むから、隣の部屋で寝てくれ

「なんであえ？」

そんな物をねだる様な目で俺を見るなー！

何より俺の理性が危ないし、こんなこと舞に知られたら俺の命がー！

「なんでもだ、それに愛が出ないなら俺が隣で寝る

「それはダメー！」

脱出間際に愛に抱きつかれそのままベッドへ再ダーティブ。
愛と向き合つような形になってしまった。

「この状況はこうこうまあくありませんか？」

「…………」

不覚にも名前を呼ばれて一瞬ドキッとしてしまった。
だって、息が少しかかる距離だよ？

これもう俺の理性と本能の戦いじゃん。

「愛のこと嫌い？」

「嫌いなわけないだろ。

愛は俺にとって妹みたいなもんだ」

「うわーのバカ！」

「ぐー！

こぞ言わると結構ショックだな。

そんな怒ることか？

「愛、なんで怒ってるか知らないけど機嫌直せって

「スー……スー……」

「おい、無視しないでって寝てるのか

そりやもう、可愛い寝顔で寝てるよこの爆弾娘さんは。
はあ、こきなり怒るし気づいたら寝てるし一体俺が何したってん
だ。

誰か教えてくれ……

第10話 僕のお気に入りだよ（前書き）

そろそろ野球タグを発動させます。

第10話 僕のお気に入りだよ

「えーでは、これより試合を始めます」

「お願いしますーー！」

……今の状況を説明しよう。

俺は草野球に参加中、つーか今試合が始まった。

ここに至るまでを今日の朝から順を追って説明しよう。

10時に北川との約束通り駅前に行つた。

何故か山中が居て、「ついて来い」と言われ、連行された。

気づけばボロい野球場に着いた。

強制とつ名の草野球参戦。

……俺の意思是？

「おい、山中。

なんで俺が参加しなきゃいけないんだ？」

「さつきも言ったやん。

一人、遅れてくるまでやつて

「だから、神谷君ようじくね」

なんでも北川は野球部のマネージャーらしい。
それで山中と繋がりがあつたのか。

「神谷おまえが投げたら試合にならんからな。

外野で勘弁してや」

「……ヒラーしても怒るなよ」

「楽しい草野球しようぜ」

はあ、ピッチャーハーしないならギリギリOKか。
今すぐ逃げ出したいが北川に笑顔で「頑張つて」とか言われたら
なあ。

適当に頑張りますか。

ノーアウト ランナー一一・二三點。

打席には9番を希望したのに『若いから』を理由に3番になつた俺。

ネクストには4番の山中。

相手ピッチャーは30代ぐらいの人でボールの速さは100km
ぐらい。

速さも問題ないし、右投げのピッチャーのボールは左打ちの俺には見えやすい。

その初球、甘く入つた外寄りのストレートにバットを振り切った。痛烈金属音と手にボールの重さを残して打球は左中間へ抜けて行つた。

先制タイムリーツーベース、我ながらなかなかの当たりだった。

神戸にあるとあるスポーツ雑誌を出版する事務所。休日のオフィスに2つの影。

パソコンに向かう男が画面に向かつて口を開いた。

「ふあ～、だりい～」

「藤井さん！」

早く仕事してください！

雑誌の締め切りもう過ぎてるんですよー…」

「まあ、そう急かすなよ、飯村。

それより、昨日の『阪神対広島』見たか？

阪神惜しかったなあ」

飯村と呼ばれた女性。

長い腰まである髪に眼鏡の奥にある少し釣り眼の瞳は相手に気が強い印象を与えていた。

「はいはい、分かりましたから。
早く仕事してください！」

まだ新人の彼女にとつて雑誌の締め切りを遅れるなんて考えられないこと。

仕事がはかどっていないにも関わらず、のんきに手を動かす自分の上司に気も立っていた。

そして、その上司藤井と呼ばれた男は無精ひげを生やし。体からは煙草の匂いが立ち込めていた。

「にしてもよ。

「こうやって、今年の高校野球の記事作つても今年の1年で田玉になりそうな選手はいねえよ」

「それは前も聞きました。

そう言えば『神童』と呼ばれた子はどうに進学したんですか?」

「さあな、去年の硬式の全中に出場した全選手中、進学校が分からぬのは2人。

『神童』はその内の1人だ」

「もう1人は?」

「10年に1人の逸材と言われた『神童』と唯一互角の勝負を演じた、無名選手だ。

よし! 残業終わり!

じゃあ、飯村後は頼んだ、俺は草野球行つてくるから

「え! ? まだその無名選手の話終わつてしませんよー」

「俺のお気に入りだよ」

藤井は不敵な笑顔を残しオフィスを出て行つた。

第10話 僕のお気に入りだよ（後書き）

作者は関西に住んでいるため阪神ファンです。
野次を飛ばすような過激派ではないでの、了承ください。

第1-1話 懐かしき場所

試合は進んで5回裏相手の攻撃中でスコアは7対5。

草野球らしい、エラーも多発した割には思ったより点は入らなかつた。

ちなみに今はツーアウト、二・三塁で我がチーム（うら）のピンチ。

打席には相手チームの4番打者。

カキーン！

痛烈な当たりが一・二塁間を瞬く間に破りライトを守る俺の元へ。

「ライト！ バックホーム！」

キャッチャーを守る山中の声が聞こえた時には俺はすでに捕球体制に入っていた。

腰を落とし、グローブをつけた左手でボールつかみ、素早く右に持ち替え送球の体勢へ。

二塁ランナーはすでにホームを踏んでいたが一塁ランナーはホームから3mくらいの所を走っていた。

その先で山中が大声でボールを呼んでいた。

——れなら間に合ひ——

山中の待つホームへ思いつきり腕を振った。

ほぼ1年ぶりに全力でボールを投げた。

俺の投げたボールはノーバウンドでホームで待つ山中の「ナッシュト」に収まつた。

「アウト……」

審判の声を聞いて「ふー」と息を吐いて送球がうまくいったことに安心しながらベンチに帰ると。

山中に「さすがやな」と嬉しそうに話かけてきた。

その他の人たちも「すげえな」とか口々に俺をほめてくれた。

……久しぶりだなこの感じ。

中学時代は結構いいチームメートに恵まれてた。

支えあい・競い合って日々を過ごした。

野球を忘れないと思うと一方でそいつらのことでも忘れないと思つていたのかもしれない。

あいつら、元気にしてるかな。

「おい……おい！

神谷！ 聞いとんか！？」

「ああ？

わりい、聞いてなかつた

少し昔に漫つていた俺の脳は山中の声で引き戻された。

「つたく。

次の回、投げてくれ。

ピッチャーの人が肘が痛いそうや。
2回ぐらいうらいけるやろ？」

ピッチャーカ…

試合前だつたら絶対断つていたけど、今は何故かそんな気はしない。

中学時代を思い出したからかな?

「ああ、分かった。

ちゃんと捕ってくれよ」

「まかしとけ…

ほな、いくで…」

嬉しそうにはしゃぎやがつて。

いや、嬉しいのは俺も同じか。

マウンドに立てば心臓の鼓動が大きくなる。

全身の血が沸騰したかのように熱くなつていぐ。

『俺は根っこから投手なんだ』そのことを直観してしまつ。

こんなどうしようもない俺なのに…

「よっしゃー、来いー！」

そう言つながら、ミットを力強く山中は構えた。
その顔はどこか嬉しそうで充実感が溢れていた。

思わず自分の口元が緩んだことに俺は気づかなかつた。

だつて、俺の頭の中にはもう山中の構えるミットへ最高のボールを投げる」としか頭に無かつたから。

わあ……こつてみよつか。

「へそー、この時間じゃ試合終了間際じゃねえか！」

藤井はそう吐き捨てる車を降りた。

ただでさえ、残業で試合開始には遅れたと言ひの上加えて道に迷つた。

月に一回程度の草野球、楽しみにしてるがゆえの焦り。

しかし、それは試合を見て、正確にはマウンテンに居る投手を見て消えた。

Side 藤井 高志

あの荒々しいフォームに威力のあるストレート。
まさか……あの投手か！？

忘れもしない、去年の夏。

毎年見に行つてゐる全日本中学野球選手権大会。

この中から後に甲子園で怪物と呼ばれる選手が生まれることも少くない。

しかし、今年は1人の選手に俺も含めスタンンドに居る監督・野球関係者も視線が釘付けだった。

『神童』と呼ばれる天才打者。

後に日本の高校野球界を牽引すると誰もが信じて疑わなかつた。

しかし、その天才打者を圧倒する謎の無名投手。

大会前は評判の低いチームが勝ちあがつてきたのも一応は納得のいく投手だつた。

スタンドで見ていた俺以外の奴らは「打者のほうの調子が悪いだけだ」と口をそろえて言つている。

しかし、俺は荒々しいフォームでばらつきはあるが抜群の球威をもつたボールを投げるその投手の未完成で荒削りな才能に惚れてしまつた。

あの事故もきっと乗り越えてくれると信じて疑わなかつた。

後にその投手が全ての高校からの推薦を蹴り行方をくらました時はもう見れないと思つたが……

まさか、ここで再び見れるとは。

一バシイイイ！

最後もストレートで試合を終わらしてしまつたか。

おつと、こんなチャンスは滅多にない。

今のうち色々聞いておかないとな。

Side out

第1-2話 ピッチャーを……だら?

「ナイスピッチング!」

試合後、そう書いて山中は俺に声をかけてきた。

気がつくと俺は試合終了まで投げていた。

相手のバットにボールはかすらず、6者連続三振で試合は終わつた。

「そりゃ、ビツカ

「なあ、やつぱもつたいねえよ。

ワイりと野球しなつやあ

「それは終わった話だ」

この試合で湧き上がってきた『野球をしたい』という感情を俺は自分の心の奥へとしまった。

ううむ、俺はもう野球はしないんだ。

「よつー! ナイスピッチングだつたな。

神谷 功くん、それに山中君も久しぶり

俺の名前を言つて近づいてきた、剃り残しの無精ひげを生やした、タバコ臭いおっさん。

山中とは知り合いみたいだけど。

何者だろう?

「まあ、もう警戒しないでくれ。

君の代わつて今日出る予定だつた野村

お前のせいか！

と思わずつっこんでしまつたが心にしまつてしまふ。

「俺は野球雑誌の記者なんだが、去年君のピッチングを全国で見て
ファンになつたんだ」

「やうつスか」

「素つ気ないな……山中君と面のついたことは県立の開成高校つてこ
とか。打倒・報明高校つてといひかい？」

「俺、野球は中学でやめたんです

「これマジなの山中君？」

「マジですわ。

僕の熱烈の歓迎も木端微塵ですわ

「いい加減あきらめろ。

俺はもう野球はしないと決めたんだ」

「ピッチャーを……だろ？..

なんだよおっさん、その自信ありげな顔は？

「どうゆうひ意味ですか？」

「実はな俺、君のあの試合を会場で見てたんだ。

君があの事故を気にしているのは分かるさ。

自分のせいでの1人の野球人生を奪つたんだからな」

「……」

「俺は別に君を責めてるわけじゃない。

ただ、あの時、君の見せた底知れない才能に惚れたんだ。

甲子園という大舞台で投げる君を見たい、1人の野球ファンとしての期待だよ」

「それは期待を裏切つてすいませんね」

「まあ、いいさ。

するかしないかは君の自由だしな。

俺の名前は藤井ふじいたかし高志。

縁があればまた会おう

あれを見てなお、俺に期待するのかよ。

あのオッサンは。

『物好きな人だ』それが藤井 高志と名乗る男の第一印象だった。

Side 口中 淳

「なあ、神谷あ。
あの試合つてなんや?」

「お前には関係ないよ」

んな」と聞かれてもなあ。

「イとヒーまで断固野球をしないこと聞こ続ける」この原因には興味ある。

「口田君、誰にだって聞かれたくないとあるよ

「北川、お前のヒーとは理解できるけど、ワイだつてやがんとした理由を聞きたい」

「勘弁してくれ」

「こいつは断固聞かん気か。

野球をやめるせじの原因になつた試合つてどんな試合なんや?」

Side out

「いめんね、神谷君、家まで送つてもうひちゃつて」

「家の方向が一緒だつただけだよ。

山中は駅から逆方向だし」

私は今、神谷君と家までの道を歩いている。

彼が「家まで送ると」言いだして付いて来てくれた。

正直、私は自分の気持ちに戸惑っていた。

私は神谷君を恨んでいた、少なくとも始めて話す日まで。

彼は思つていた人と違つて、優しくてどこか少し抜けた所のある人だった。

今、私は彼との会話を純粋に楽しんでいる。

彼のせいで私の家族はバラバラになったと言つの……

「北川？ おーい、どうした？」

「え？ あ、うん。
ちょっと、考え方」

私の顔を覗き込んだ彼は「そつか」と優しく微笑む。

どうして、君はそんなに優しい人だつたの？

君がもつとひどい人なら……思つた通りの人だつたなら……

「ねえ、神谷君」

「ん？」

「神鳥 哲也って、知ってる?」

「え?」

きつといんなに苦しまずにするんだの?」。

Side out

第1-3話 知つて欲しいだけ（前書き）

少しばかりシリーズです。

第1-3話 知つて欲しいだけ

『神鳥 哲也』「どうして、北川はその名前を？俺にとつて忘れたくても忘れる」とのできない名前。

「なんで……お前がその名前を……？」

近くで鳴り響くドラムのよつこ心臓の鼓動が耳に響いていた。体が、本能が北川の言葉を聞くことを拒絶している。

「神鳥 哲也は……」

やめろ、聞くな。

「彼は……」

やめろー。

「私の兄なの」

舞から逃げるかのように俺は2階の自分の部屋へと入った。

「ああ

「やつ……じゃあ、また明日」

「わりい、俺、今日はもう寝るわ。少し疲れたみたいだ」

知りたくない、事実を知っちゃうただけだ。

「そんないいもんじやねえよ」

あの爆弾娘め、余計なことを。

「なんの話だ？」

「デートは楽しかった？」

毎度のことながら家に入る時は一言頂きたい。

「なんだ、舞おまえか」

「あ、おかれり」

「んあ？」

俺はどうすればいい？

まさか……まさか、北川が。

あいつの双子の妹だったなんて……

今更、謝つてすむ問題とかそんなレベルの話じゃない。

俺は……俺はどこまで行つてもあの試合の呪縛から逃げ出せないのか？

忘れることも出来ない昨年の夏。

俺は全国大会のマウンドに立つていた。

相手は優勝候補筆頭の強豪チームで相手の4番打者は今大会?1の強打者。

その打者の名前は『神鳥 哲也』2つ名が『神童』と呼ばれるほどの天才打者。

しかし、試合は俺たちのチームのリードで終盤を迎えた。

そして、俺と神鳥との3回戦の勝負でその悲劇は起についた。

ツーストライクと追い込んでからの3球目、俺が投げたのは渾身のストレート。

もちろん三振を取るつもりで思いつきり投げた。

試合の興奮で自分の体が思っている以上に限界だと叫びことも気がつかず。

俺のストレートは神鳥の頭部に直撃した。

鈍い音を立てたヘルメットが吹き飛び、神鳥は地面へと倒れそのまま病院へと運ばれた。

数日後、俺は神鳥が俺の当てたデッドボールが原因で下半身が不自由になり、もう野球が出来ないことを知った。

周りの人は事故だから気にするなと言つてくれたけど俺の中ではそう簡単には整理は付けられなかつた。

1人の将来を奪つたことは必然的に俺を野球をやめる方向へと導いた。

「私の兄なの」

昨年の夏の出来事がフラッシュバックしていた俺は次に北川の言葉の信憑せいを疑つた。

北川は何を言つてるんだ？

神鳥と北川が兄妹？

あり得ない、だいいち名字が違つじゃないか。

「あの試合の後、パパはお兄ちゃんを治せる医者を見つけたと言い残し、彼を連れて家を出て行つた。

ママと私は帰りも待つたけど、パパがママを捨てたことが数ヵ月後、送ってきた手紙でハッキリした。

両親はそのまま離婚した、北川の名前はママの名前。
去年までの私の名前は、神鳥 沙希

うううそだろ……こんなことつてあり得るのかよ。

Side 北川 沙希

神谷君は動搖して声も出ないみたい。
そうだよね、まさか私が『神鳥 哲也』の妹だなんて誰も分から
ないよ。

「私は神谷君のこと憎んでる」

あれ?
私、何言ってるの?

「あなたがお兄ちゃん」「あんな」としなかつたら……」

遙々 そんな」と正念頭にいたし「わざやない、

私の家族は……

お願いもう止めて！ 私は神谷君に事実を知つてもらいたいだけ！
彼を責める気なんてもうないの！

「バラバラにならなくて済んだのに！」

嫌……違う！

それは神谷君に会うまでの私の気持ち。

今は……そんなこと思ってない！

「あ……う……」

どうして、なんで急に上手くしゃべれないの！？

早く言葉を出さないと！

私は彼を傷つけたままになってしまつ！

「北川……俺……」

お願いそんな悲しい顔しないで。

私は君のそんな悲しい顔見たくない。

「……」「めんなさい！」

気がつくと私は神谷君を置いて一人家へと走り出していた。
頬を伝う熱いものに気付かずに。

第14話 名門校のスーパールーキー

高校に入学してから3カ月がたつた。

制服も夏服へと移つてとうとう本格的な夏つて感じの雰囲気だ。照りつける初夏の日差しよりも俺には気になることがある。

この学校にクーラーは無いのか？

暑すぎてやつてられん！

「ああ、暑すぎる」

「だらしない、男なんだからもうひとつとしゃつきとすれば？」

くそ、なんで席替えで舞の隣になっちゃったんだ？
席替えが始まらずつとだぞ、もう誰か仕組んでいとしか思えない。

ちなみに北川とはこの3か月の間、口を聞いていない。
向こうが俺のことを探しているようにも思えた。

一方で山中は夏の予選も近いせいかたまに見かけると緊張感ある顔つきをしていた。

この3カ月は俺に話しかけてきても野球部への勧誘はしてこなかつた。

「もうすぐ夏休みかあ

「7月中は補習があるから学校だけどね」

「ちーちー、落ち込むよつなこと言こやがつて。

あ、そうですよ、俺は期末の点悪かつたから毎より補習の数多いですよー。

「つーか、お前は期末どうだつたんだよ?」

「ん? はい」

舞が出したのは期末テストの点や順位が書かれた紙。

……学年4位だと?

「お前! いつの間に勉強してたんだ! ?」

「少し勉強したらこの程度のテストなんて簡単よ」

ぐう……なぜこいつはこんなチートキャラなんだ?
これで性格さえ大人しい性格だつたら……

「よからぬ」と考えてたらひつぱたくわよ

心を読むのも殴るのも勘弁して下さい。

Side 藤井 高志

「飯村あ、俺、取材行つてくるから」

「はー? まだ、仕事残つてるじゃないですか!」

「んー……じゃあ、お前も来い」

・・・・・・・・・・・・・・

「なんで私まで……」

「編集長こは俺から言つとくからよ」

そんな落ち込むなつて。

こいつはもう少し融通が利くようになる必要があるな。

「で、どこの取材行くんですか？」

「報明学園のスーパールーキーの所だ」

「前、記事にしてたじゃないですか」

「直接見たいんだよ」

春・夏合戦して甲子園で3度の優勝を誇る兵庫の名門・報明学園で1年生ながらギュラーを勝ち取ったその実力をな。

「そら、着いたぞ」

「うわー、相変わらず部員が多いですね」

新人のこいつが圧倒されるのも無理はない。

100人近い部員が2面あるグラウンドで縦横無尽に動き回っていふ。

一切の無駄を省いた機械的な動きで部員たちは練習を行つてゐる。

相変わらず血の通つてない練習だな。

結果が全ての勝負の世界、しかし、俺は近年の高校野球は何か大事なものを失つてゐるような気がしてならなかつた。

「監督、御無沙汰しています」

「ああ、君か。

また取材か？」

「まあ、そんな所です」

〔報明の監督は相変わらず威圧感半端ねえな。〕

「新井君はどうです？」

「あそ」」だ

監督の指先には体中泥だらけになり三塁手^{サンリュウザ}でノックを受けるスープールーキーの姿。

ただひたすらにがむしゃらに練習する姿は一年生らしい初々しさを感じずにはいられなかつた。

「今年の夏は（甲子園に）いけそうですか？」

「勝負はやつてみないと分からん、しかし、新井の加入によつて、戦力的には報明^{うち}が一番だ」

確かに……いや、新井君が加入する以前から報明学園は参加校数160校を超える兵庫の絶対王者。

ここ数年はほとんど夏の甲子園は報明が出場している。

そこに近畿屈指のスラッガーの加入はまさに鬼に金棒だな。

「新井君に対抗出来る1年生は居ると思いますか？」

「そうだな……どこかの公立に進学した山中 淳ぐらいではないか？
彼にも報明に来て欲しかったのだが……」

「神谷 功はどう思いますか？」

「あの子か……ダメだな。

まだ、荒すぎる。

才能が開花することは3年は短すぎる」

「しかし、もし、この3年で開花すれば……」

「他の追随を許さないほどの圧倒的な選手になるだらうな

やはり……あれほどのが歴史の闇へ消えていくのは、よくないのではないか？」

何か……きっかけさえあれば。

彼は再び野球を始めるはずだ。

第15話 やつは魔だ

「うひー

「ん? なんだ?」

ただいま夕食後、部屋で愛とゲーム中。
野球ゲームなんだが0対0のなかなかの接戦だった。

「明日、愛の試合があるんだけど見に来てくれない?」

「いいよ、どうせ暇だし

愛が試合を見に来てくれなんて珍しいお願いだな。
何回かは見に行つたことはあるけどほとんど舞に誘われて見に行つた。

「ホント! ? わーい
ありがと、こうこう!」

まさか、そんな喜んでくれるとは……ハッ!
いつの間にか0対1になつている! !

「愛、お前いつの間にスクイズをした?」

「んー? しーらない

こいつの間に人の隙をつくなんて邪道なこと覚えたんだ?

純粋な子に育つてほしかった……

「これで愛の勝ちだから、約束通りなんでも聞いてくれるよね！？」

実は試合開始前に俺が負けたら愛の頼みを一つ聞くと約束したんだが……

そんな興奮して聞くなよ。

つーか、

「そのお願ねがいが明日の試合見に行くことじゃないのか？」

「それは別、それに、愛が誘わなくともまいねえが誘うって

そりゃ言えてるな。

「で、何してほしんだ？」

「キス、して欲しいな」

……ワンモアープリーズ。

「2回も重つのはまずかしいよお

「……ひとつ、風呂にでも入るかな

「あらー、逃げるのこひこひー？」

あつたりめええだ！！

俺は別に愛のことが嫌いなわけじゃない。

だが、中学生に欲情するほど落ちぶれちゃいない！

「逃げるも何も無茶な頼みをするからだ。

だいいちお前なあ、最近意味の分からない」と言つて過ぎだ

「……バカ、こうにいのバカあ！」

「な？ 行き成りバカは失礼だろ…… つて殴るな！
痛い！ 痛いから！！」

マジで誰か愛がこんなに怒る理由教えて。
だつて理不気すぎるしじょ……

「愛、そこいらへんにしどかなさ」

「まいねえ……」

おお！ 舞、ナイスタイミングだ！
まさに救いの天使！

「あとはあたしが功をボロ雑巾にしつべから

訂正、やっぱ悪魔だ。

・・・・・

「で、なんで俺は愛に殴られたんだ?..」

「ああ? また、あなたが勝手に愛を怒りしたんでしょ」

愛は明日試合と言ひこともあって家へ帰宅。舞は……なんていふんだうつな? タ食の片づけは全て終わっていふはずなんだが。

「はあ、最近の女の子の考えはわからん」

S-side 斎藤 舞

それはあんたが鈍^{ぬま}いからでしょー

ホント功の鈍^{ぬま}さ……ここまで来たらただのアホね

「一生懸命に殴^うれなさい」

「えー、理由もわからず殴^うられるのがよ」

「やつちつ」と

……正直、たまに愛が少しだけ羨ましい時がある。
あたしだって功に甘えてみたい。

でも、功とはずっとこんな関係だから中々機会がない。

「Jの前みたいに向こうから来てくれたらチャンスなのかな?
でも……ああゆう時あたし舞い上がって何も考えられなくなるし
……

「おーい、生きてるかー？」

「え? もやあー!」

「うむー。」

この間にかJの前にあつた功の顔にビックリしてあたしが功の上に乗る形で2人して倒れた。

功の心臓の鼓動が聞こえる。

あたしと違つて全然速くないのが少し残念だけだ。

「いつて……舞、とりあえずどうしてくれないか?」

「いやだって言つたら?..」

Side out

「おいおい、Jいつも一体何言つてんだ!?
それに少し上田遣いに俺を見てくるその瞳は危険すぎるー。
理性が外れる前に脱出せねば……!..

「とにかく離れる、それとも何か?」

「Jのまおお前を襲えってことか？」

「やつそれは……その……」

「ヤバい……なんだJの空氣?」

舞が俺を突き放して脱出壳Jのはずだったのに、顔を赤くしゃがつて。

すべて行動が裏目に出てるJ、やばい……マジドやばい、助けて誰かー！

「まいねえ！ 母さんが帰つて……J……こつて……」

「おいおい、その誰かが愛じじゃなくともいいだろ。ホント勘弁してくれ……」

第16話 一応だな

「で、なんで愛の試合よつゝ3時間も前に家を出なきゃいけないんだ？」

俺の目の前には手を組んで少し不満そうな顔する鬼の姿。まい

「いいから、黙つてつきなさい」

眠い……せっかくの休みに9時起きって……
え？ そんなに早くないって？ いつもなら昼まで寝てるんだよ。
嫌だ／＼帰りたい／＼、なんて怖くて口が裂けても言えない。

ちなみに昨夜あつたことを邊に見られた件は何やら姉妹で取引して解決したようだ。

……どんな取引があつたかなんて怖くて考えたくもない。

Side 斎藤 舞

はあ、昨日あたしは一体何してたんだる……
あれは、あれで惜しかったけど……もう忘れよ。

それにもしても、このバカ（こう）はホント鈍くて頭が痛くなるわ。
たまには2人で出かけたいってことぐらい察してくれてもいいのに……

「なあ、エリコさんだよ~」

あなたが居れば」いつわざと」でもここ。

「うひー、買い物付き合つて」

理由なんて適当でいい、少しでも舞へ一緒に踊ることが出来るな
ら。

Side out

「へー、お前が服を買こにねえ」

舞に連れてこられたのは駅前のショッピングモール。

「あのねえ、あたしだって一応女の子なんだからね」

「一応……だな」

小声で「バカ」と聞こえた気がしたがスルーしよう。
変な突っ込みは「」の命を投げ出す結果につながりかねん。

「ねえ、功はどんな服が好み?」

「服……なんて着なくていいんじゃね?」

「土にかえれ!」

「ぐはー。」

ちょっと[冗談言つただけなのに右ストレートですか。
お前のパンチ痛いんだよ！

「へへへ。」

ちよつと、ふざけただけだろー。

第一、俺が服のことなんてわかるかよ

「わうね、功に聞いたあたしが悪かったわー。」

なんで、キレてんだよ……

「お皿、じ馳走様　」

「じひこじしまして……」

なぜ昼は俺の全額持ちだつたんだ？

おかげで舞の機嫌は直つたが俺の懐が寂しい」と云。

「あ、わりー。

忘れ物したみたいだ、ちょっと待つてくれ」

我としたことが席に携帯を忘れるだと?

あー、恥ずかし。

Side 斎藤 舞

まったく、どこか抜けてるとこりは相変わらずね。
早くしないと愛の試合始まっちゃう。

「ねえねえ、彼女一人?」

「俺たちと遊ばない?」

何このキャラそいつな男たちは?
あたしは功を待ってるのに。

「人を待っているので結構です」

「そんなこと言わずにさあ!」

自分たちの言いなりにならないと分かつたら力づく?
情けない男たちね。

Side out

急がないと舞の機嫌が悪くなる!

急げ俺!

「ぐわあ！」

入り口から男の悲鳴？
まさか舞の奴！

「あら、もひ帰つて來たの？」

「お前こそ俺のいない間に男殴り倒してんだ？」

「だつてしつこいんだもん」

あーあ、『愁傷様だな。

「女だからってなめやがつて……ふざけんなあ！」

男が本氣で女（一応）を殴んなよ、情けない。

俺は舞と男の間に入り男の拳を受け止めた。
いつも簡単に止まり、思つたいたより軽いパンチだつた。

Side 斎藤 舞

功が出てきちゃつたか。

あの男も終わりね。

正直、あたしは功に殴り合いで勝てる気はしない。
ケンカの腕以前に身体能力が違いすぎる。

男と女、そんな問題じゃなく、功の身体能力はハツキリ言つて異

常。

本人は自覚してないけど功は日本時離れしたバネを持っている。

それを生かしたピッキングが功の武器だつたんだけど……今更関係無いか。

「功、もう行きましょ。

愛の試合が始まっちゃう」

「ん？ そうだな、じゃあな。

今度からは人を選んで軟派しろよ」

……遠まわしにあたしを選んだから殺されると黙ってるのかしら？

あのバカ（二つ）は。

Side out

第17話 見てくれた？

Side 山中 淳

「すみません、僕のせいで負けてしまつて」
そう言つてワイスは先輩たちに頭を下げた、チャンスで打てず本当に申し訳ないことをしてしまつた。

高校生になつて始めての公式戦、すなわち甲子園への一回目の挑戦は3回戦で終わつてしまつた。

「やつぱ、投手か……」

ワイスはボソッと呟いた。

長い険しい甲子園への道を進むには開成高校の投手力じゃ足りない。
やつぱり神谷あいじを……いや、無理やな。

「山中君、先輩たち行つちやつたよ」

「ああ、すぐ行くわあ」

以前、北川からワイスは神谷と北川の兄との間にあつたことを全て聞いてしまつた。

それを聞いてしまつた以上、ワイスは神谷を誘つことをあきらめた。

「でも、山中君つひやつぱり凄いんだね。
三回戦までこられたのも山中君のおかげだね」

「北川、慰めは勘弁してくれや。

ワイがもつと打てば勝てた試合やつたしな

「最後の打席以外は敬遠されたんだから仕方ないよ。
それに3試合で2本ホームラン打った、山中君を誰も責めないよ」

「そりゃありがたい

でも、ワイヤー他の1年で投手を出来る奴はおらん。

本気で甲子園を目指すならどのみち全国区の投手が必要だな。

Side out

「一いつこ、愛の活躍見てくれた?」

「もちろん、相変わらずお前は凄いな。
さすが暴君の妹だ」

「功……誰が暴君ですか?」

落ちつけ俺、後ろからの殺氣はスルーするんだ。

しかし、愛はホントすげえな。

ホームで4番、打つては4打数4安打、投げては2安打完封、もはや怪物だな。

「えへへ、伊達こいつと一緒に遊んでたわけじゃないよ

確かに少し前までは一緒に野球をして遊んでいたが、もう俺より上手いんじゃね？

どうやらば4安打も打てるのか是非とも俺が聞きたい。

「でも、これで愛は推薦で高校に行けそうだな

「愛は推薦来ても行かないよ

「は？ 高校でもソフトやるんだ？」

「ううんことまごんの高校にもソフト部あるんでしょ？
だったら、愛は開成に行くよ」

「お嬢さんは一体何を考えてんだ？

それだけの才能を持ちながらなんと勿体無い、いや……俺も似た
ようなもんか。

「あんたはまだ言つているの？

母さんは別に私立でもいいって言つてるのよ

「絶対嫌！」

だって、ううんこまごんと一緒に高校行きたいもん！」

「まったく我が妹ながら頑固ね

舞よ、お前も十分頑固だからな。
さて、愛とも合流したことだし帰るか……ん?

「あ、神谷と斎藤やんけ」

「山中君に沙希ちゃん……2人で遊びましたの?..」

「今日、試合でな。

その帰りや」

人ごみの向こうから現れたのは試合帰りの山中と北川。
山中は別にいいが正直、北川は気まずすぎる。

「舞、悪いけど俺、先に家に帰つとくから、愛のことよろしく」

「え? ちょっと功!」

「わりい、北川。

ワイも先、帰るから後はよろしく」

「山中君まで何言つて……行つちやつた」

「いひに……

2人の男が去った場所には3人の少女のため息が聞こえるだけだ
つた。

第1-8話 交差する想い

「で、なんで山中^{おまえ}がついて来たんだ？」

「まあ、気^{おまえ}にすんな。ぜ」

少し話がしたいと思つただけや」

……いつはあんまし、そんな気分じやないんだが。

「なんだよ、話つて？」

勧誘なら断つたはずだ」

「お前に謝る^うと思つてな。

ワイ、北川から話を聞いてる」

「……そつか

「だから、すまんかつたな。

お前の傷も知らず、しつこく勧誘してもつて

本当にそれを言つためだけこつてきたのか？

結構律儀なやつなんだな。

「気にすんな、言わなかつた俺が悪いんだよ

「でも、神谷^{おまえ}と野球したかつたなあ

「俺としても面白くないぞ」

「何言ひてんねん、お前とワイがバッテリー組んだら日本一も夢やないと思ひで」

「現実見ろよ、良じバッテリーが居て勝てる野球は甘くないだろ」

「ワイとお前やから勝てるんやろ?」

「はは、お前はホント面白いやつだよ」

……お前とならこじバッテリーになれたかもな。

S-ide 斎藤 舞

「ぐー、沙希ひやんつて野球部のマネやつてたんだ」

「うそ、まあね」

なんか元気ないなあ

それに『云のせいが愛が沙希ひやんの』ことを敵意を持つて睨つめている気が……

「北川わざわざ『云の』ハジキの関係なんですか?」

「Jの子は行き成り何言つて……

「……別に何も無いよ。

ただのクラスメートそれだけだよ、齊藤 愛さん」

「嘘言わないでください、Jの子が北川さんの顔を見たとき明らかに表情を変えました。

中学のある時を境に人と関わらなくなつた、Jの子が何も無い人を見てあんな表情をするなんてありません」

確かに功の表情は明らかに曇つたけど、功が言わないんだからほつとけばいいのに。

でも、功は昔から嫌なことため込むタイプだからなあ。

「そんな目で私を見ないで、少なくとも私はもう彼のことを敵だとは思つていないわ。
彼はどうだか知らないけどね」

それってどうゆうこと?

以前の沙希ちゃんは功を敵視していたってこと?

あのバカ、まさか沙希ちゃんに手でも出したんじや。

「Jの子に因縁でもあるんですか?」

愛は熱くなりすぎね、功が絡むと周りが見えなくなるんだから。
そろそろ潮時ね。

「愛、もうやめなさい。」

功や沙希ちゃんが言わないならそつとしどこであげなさい」

「でも、まいねえ！」

「それ以上、言いつと力ずくで黙らせるわよ」

「……分かつよお」

そんなんふてくされない。

あたしだつて凄く氣になるけど。

本人たちに言つ氣が無いなら仕方ない……でも、今度功に力ずくではかせてみようかな？

Side out

つー！

なんだこの寒氣は！？

あああ、怖いよお、俺が何したつてんだ？

「どないしたんや神谷？」

「なんでもない、少し寒氣がしただけだ」

「ハツハーン、さては斎藤のことやな？」

「半分当たりで半分外れだ」

お前らは知らないからな暴君のようなあいつの性格を。

「ええなあ、お前にはあんな可愛い幼馴染があつて。あ、心配すんな、別にワイは斎藤を狙つてへんから。

他の奴は割とおもつて尊やけどな

それは「」聰明な判断だな。

そしてその他の者どもよ、「」愁傷様だな。

「じゃあな、ワイヤーちちやから」

山中はそう言い残し去つて行つた。

1人になつた俺が空を見上げるとそこには夏の夕暮れが広がつて
いた。

キレイなグラデーションを施した空は高く、そしてどこまでも続
いて、自分がいかに小さいか教えてくれる。

自分は一体何をしているんだろう?

ふと、そんな感情が湧き上がつた。

あの夏を……あの試合を……あの一球をやり直したいとどれだけ
思つただろう。

記憶だけでも無くなればいいとどれだけ思つただろう。

でも、俺のしたことは頭の中に事実として残つてゐる。
きっと、俺の夏はもう一度、神鳥と会わなきや……始まらないん
だ。

夏が過ぎるのは早く、俺の気付いた時には夏の甲子園。

『全国高等学校野球選手権大会』が開幕した。

第19話 神鳥 哲也

甲子園

高校球児の憧れであり最終的な目標。中学校時代は俺も高校になれば田舎だと決めていた。でも、今となつてはもうどうだつていい場所だ。

「あんたいつまで寝てんの！？」

俺の朝（現在の時刻は12時）を邪魔する暴君。^{まくにん}その声は頭にも響いて俺の脳内をかき回す。

「うるせえなあ、今日の宿題からの補習はやめる。じゃ、おやすみ！」

昨日は愛がゲームをしようとひたして寝るのが遅かったのさ。

「何言つての、早く起きなさいー！」

バッバカ！ 掛け布団を取り上げるな！

「な……あんたって奴は……
ちゃんと下を履いて寝なさいーー！」

パンツは履いてます！

「仕方ないだろー！」

「寝起きなんだからーー！」

この後、俺の横っ面にはキレイな紅葉。
理不尽すぎるつしょ……

「報明の5番打つてる人、私たちと同じ1年だつて」

「あー、新井だっけ?
中学から有名じやん」

現在、朝食と言つ名の昼食を食べながら、甲子園をTVで観戦中。
地元の兵庫代表『報明学園』が2回戦を戦つていた。
ちなみに1回戦は6-1で圧勝だつたらしい。

「山崎君とどっちが凄いの?」

「同じぐらいじゃない?
山中も高1の中じゃ飛びぬけてると思つよ」

まあ、一人で甲子園に行けるほど甘くはないと思つがな。

実際、山中を有して3回戦で負けたわけだし。

さて、飯も食ったし補習でも行きますか。

「ウッス、神谷あ」

「三中……そりゃあお前も1学期は成績不振だったな

「やかましいわ、どうも英語がワイのことを嫌つてゐみたいや

「フツ、英語だけだからいいじゃねえか

「うひあー、数学もアカンかつたんか」

それじゃほつとけ。

ちくしょー、数学って数の学問だろ?
なのに、なんで×とか×が出てくるのがどうせ理解できません。

・・・・・

「山中、お前何してんだ?」

「ん? 甲子園の経験や」

補題の授業中に携帯で試合の途中経過見つけて。
お前はどんなだけ野球好きなんだ。

おにおい、先生いつも睨んでるもつて、前の席の奴らほととぎ寝
てるじやん。

「いや、先生怒るわ。

「山中、先生怒りそりだから携帯閉じる」

「……」

「おい、聞こえてんのか？」

「あ？ ああ、すまんな」

「つ？ どうかしたか？」

「いや……神奈川代表の高校に気になる女前見つけたな」

「は？ なんて名前？」

「神鳥 哲也」

「マジかよ……なんである子が神奈川の高校にいるんだ？」

Side 藤井 高志

「藤井さん？ 神奈川の『聖王高校』がどうかしたんですか？」

夏の甲子園が開催されている間は出来るだけ会場に足を運ぶが、これほど衝撃を受けたのは初めてだ。

聖王高校の1年生4番がまさかあの子だとは。そんな情報どこにも無かつたぞ。

「飯村、あの4番をよく見とけよ」

「は？ 1年生のあの子ですか？」

「ああ、彼こそ10年の……いや、並ぶ者無しと言われた『神童』神鳥哲也」

食い入るように試合を見守る俺達の耳に金属音が響いた。夏の空を切り裂いた彼の打った白球は甲子園の熱に煽られ熱狂する観客席へと消えていった。

今年の夏は彼から目を離すことが無くなりそうだ。

第20話 私は君のこと

『神鳥 哲也』の名前は甲子園での活躍で一気に全国へと広がっていった。

当然、俺は連日甲子園の舞台で打席に立つ神鳥の姿を見ながら夏休みを過ごしていた。

「これでベスト8か」

3回戦、神鳥のいる神奈川代表・聖王高校が報明学園に勝利しベスト8入りを決めた。

神鳥は4打数3安打3打点の活躍、1年生4番ながらすでに実力は3年生に匹敵する。

「でも……なんで復活したんだ？」

そうさ、あいつは俺のせいでもう野球が出来ないと黙っていたのに。

この手の情報に詳しそうな人物は一人しか思いつかない。

「やあ、よく来たね。

神谷君」

「どうもです、藤井さん」

藤井さんが勤める事務所、近くの喫茶店で2人で会った。高校野球の雑誌を取り扱う藤井さんなら裏情報に詳しいはずだ。

頼んでいたコーヒーを一口飲むと藤井さんはゆっくりと口を開いた。

「君の言いたいことは大体察しあつていてる。
残念だが神鳥君の詳しいことは分からない。
ただ、ハツキリしてるのは彼にとって君が起こした事故はもはや過去でしかないと言つことだ」

「神鳥にとつて、終わつたことでも俺の中ではまだ……」

「やつやつて、自分を責めるのはもつやめこしないか?
自分の気持ちに正直になつたらどうだ?」

黙りこみうつむく俺に藤井さんは言葉を続けた。

「野球をやるんだ。

山中君に誘われているんだろう?

それに君はプロになれるだけの資質がある。

今までは宝の持ち腐れだ」

そんな簡単に割り切れるかよ。

人の幸せをぶち壊しにしといて自分のやりたいことをやるだと？

俺にとつてはナンセンスな話だ。

「俺はもうないと決めたんです。

今になつて変える事は……」

あれ？ なんで後の言葉が出てこないんだ？

言え…… 言うんだ！！

「そこ」で詰まるつてことはそれが君の答えだよ」

「……」

「おつと、もう時間か。

お勘定は済ませておくよ、今日は君と話せてよかつた。

これは個人の希望だが、君と神鳥君が勝負する所を見てみたいよ」

そういう残し藤井さんは夏の口差しが見え始めている、街へと姿を消した。

1人になつた俺は、自分の顔が移るコーヒーの水面を眺めることしか出来なかつた。

頭の中が何かで一杯のときは時が過ぎるのが早く感じる。
夏の甲子園はすでに終了していた。

神鳥のいる聖王高校は結局ベスト8止まりだった。

「今日で補習も終わりやなあ」

横にいた山中が腕を天に突き上げ身体を伸ばしながら呟いた。

「そーだな。
これから夏休みを謳歌するだけだ」

「ワイも県大会へ向けて頑張らんとアカンわ」

開成の野球部は夏休みに行われた地区大会で3位に入り、秋季県
大会への出場を決めていた。

上手くいけば春の甲子園が狙える大会だ。

「勝てそうか?」

「お前がいれば楽になるかもの」

「はいはい、分かったって

「真剣に考えてくれへんか?」

山中の口調が急に真剣なものへと変わった。

「ワイはなんとしても甲子園へ行きたい。

今回の大会を含めて、チャンスは残り4回しかない。
その中で出るにはお前の力がどうしても必要なんやー。」

「……それはお前の都合だろ。

俺に押し付けんな」

・・・・・

「はあ、俺は一体何やつてんだろ

山中から逃げるように去つた俺は学校の屋上で寝転びながら空を見ていた。

神鳥のことを知つてから頭にかかった霧が晴れない。
光の差し込まない霧の中に俺はずつと立つている。

「俺こ……俺こどひじりてんだ

そう呟く俺に声をかける人がいた。

「神谷君？」

起き上がった俺の目線の先には北川が立っていた。

「北川……」

それが俺の口から出た精一杯の言葉だった。
きっと今、俺の顔は最高に冴えないだろう。

でも、それは彼女も同じだった。

「何、考えたの？」

「色々だよ

「私のこと気にして野球をやりたいけどやらないとか？」

「北川は関係ないよ、俺が決めたことだ」

「関係ないこと無いよー。」

Side 北川 沙希

私は神谷君に謝らなきゃいけない。
彼が前に進むために。

「私ね……嘘つこひがやつたの」

「は？」

「ホントはね、神谷君のことよりもずっと恨んでたりはしてないの。そりや、初めて話すまではそうだったかも知れないけど、今もういいの」

君は優しくて、私なんかよりもずっと弱い人だから。
きっとこの先も自分で十字架を背負つて行くのだろうけど、そんなことは誰も望んでいないよ。

「だつて、神谷君はホントは野球したいんでしょ？
だから……」

「北川、変な同情は要らない。

お前が俺のことを恨んでいようが恨んでいなくても、俺は……」

「同情なんかじゃないよ」

そう、これは同情なんかじゃない。

私の中に芽生えた気持ちが私を動かすの、彼を助けてあげたいって。

「そうだよ……私は君のこと……」

「私、神谷君」と好きなの

「え……？」

驚いた顔してる、それもそうだよね。

私だつてまさか告白する「」となるとほんとうに困つていなかつたナビ、なんかスッキリしちやつた。

「いや……北川……こきなりそんなこと言われても……」

「神谷君の返事はーしかなこよ」

「はい?」

「野球、やるいよ。」

返事は野球部入つてから聞こえてあがむー。」

Side out

めちやくちやだ……告白の次は野球部に入れだと?
つーが、北川の顔、赤すぎだろ。

「北川、それ本氣で言つてね?」

「もちろん!」

それでも、N女の告白を「冗談として流すつもつ。」

そんなんつもりは毛頭も「」せん。

「でも、俺は「これは野球部いい、決定やの」はー?」

「山中ー? いつか「」ー?」

「ちゅー! 山中君なんでいるのー?」

北川も知らなかつたのか。

「……」

「安心せー、ワイは何も聞ことひさ

そんなニヤニヤした顔で言わると確信犯にしか思えねえよ。

「山中君……ひどい……」

「まあ、ええやないかい。
で、神谷、返事を聞こか

「……1週間、待ってくれ。
少し時間が欲しい」

でも、今回は前向きに考えてだけどな。

第21話 目指す場所はハツキリしてゐる

山中との約束から3日がたつた。

俺の気持ちは8割以上決まつていたが、残りの2割弱が決断を鈍らせていた。

本当に野球をしてもいいのだろうか？

そして

俺の力は役に立つのだろうか？

それが、2割弱を占める、少しばかりの不安。

「愛、久しぶりにキャッチボールしないか？」

「え？　いいよ。

硬球？」

「ああ、久しぶりに……な」

隣でテレビを見てた、愛を連れて近くの公園へと向かった。

・・・・・

「ひにこが誘うなんて珍しいね

「気が向いただけだよ」

「でも、中学生とは思えない、良いボール投げるなあ。
愛は相変わらず。

「野球、ある気でもなつたの？」

そして、相変わらずのひにこ。

「まだ、分からなによ」

「でもや、最近ひにこ、顔つきが戻ってきたよ

「は？　俺はこいつでも一緒にだよ」

「ひにこ、去年の秋頃から、ずっと浮かない顔してたもん」

あの事故があつて、こうにいは別人みたいになつてしまつた。

笑ついても、それは心からの笑顔ではなく。

優しい、けれどそこに、こうにいの心は無くて。

見ることしか出来ない自分が歯がゆかつた、きっと、それはま

いねえも同じ。

でもね、今は

「こうにいは愛の知つてる顔をしているよ。
おかえり、こうにい」

Side out

そんな心配をかけてたとは……
舞もそうだったのかなあ、そつだとしたら俺はホント情けないや
つだ。

もし…… そなうなら俺のすることは決まつてゐる。

「ありがとうな、愛

前へ進もう、少しずつ、ゆっくりと……

「舞、少し話があるんだ」

「功からなんて珍しい、どうしたの？」

珍しい……珍しいのか？
まったく心当たりがないぞ。

「俺、野球部入るよ」

「へ？ 突然ビックリしたの！？」

「んにあ、山中にずっと誘われてたる？
それに、神鳥も復活したし、もう一回やるくなつて」

「ホントに……ホントにいいの？」

もし、また野球を嫌いになるようなことになつたら……」

愛の言つた通り、かなり心配されてたんだな。
俺、どんだけ頼りないんだ……なんか泣けてきた。

「大丈夫、今度はあんなことにはならない。
それに……いや、なんでもねえ」

「なになに？ 言いたいことあるならこいつなさいよ」

そんな詰め寄るな！

くそ！ いらんことを口走ってしまった！

「何でもないって言つてんだろー

とつあえず、離れるー！」

「へー、そんなこと言つていいの？

フツ！」

「ぐふー。」

ゼロ距離、ボディブローだと……色んな意味で悶絶もんだ。

「これで、今回は許してあげる。
次の機会にでも……ね」

次の機会に俺は何をされるんですか……？
死にたくないよ。

でも、あんなに嬉しそうな顔する舞を見たのも久しぶりな気がする。

頑張るつ……周りの人の期待に応えるように。

「さて、返事を聞かせておきあ

「三中の約束の日、俺は山中を約束の取り付けた屋上へ呼び出した。

甲的はもういん一つしかない。

「……やるよ、もつ一度野球を。

中学の頃はやる理由なんて漠然としていた、でも、今度は違う。甲指す場所はハッキリしてゐる

「……甲子園……やな」

「それは、最終地点の通過点だよ」

「は？ どうひひひ？」

「やるからには頂点。

全国制覇だ、どのみち神鳥と甲子園で会うならそれくらい本気でやらなきゃ会えない

「ハハハハ！！ 行き成り大きく出たなあ！

ええでえ、その無茶のうじてもうおひやないか！」

「まあ、やつをいつとでもうこへな

「ああ、田嶋さうやないか。

全国？一バッテリー！」

神鳥……少し待つてみよ。

すぐにお前に追いついてやるからな。

—第一部— 完

第21話　目指す場所はハッキリしてゐる（後書き）

最後にもあつたよつに第1部終了です。

第2部なんですが作者の都合で少し間をおかして頂きます。

出来るだけ早く始めるんで勘弁して下さい！

次は功が野球部に入るところからスタートします。

第2部は野球が中心になるかと……（※分）

第22話 まともな奴はいないのか？（前書き）

長く間をあけたことをお詫び申し上げます。
それでは、第一部開幕です。

第22話 まともな奴はいないのか？

緊張……今の俺の気持ちを表すと間違いくるこの一言だ。
だって、このタイミング（2学期開始）に入部届け出すバカ野郎
がいるか？

きっと、俺だけだ、うん、間違いない。

緊張を抑えつつ職員室のドアをノックした。

ドアを開けると冷房の利いた、冷たくて心地いい風が顔をなでる。
たしか……顧問の先生の名前は。

「加持先生いますか？」

「ん？ 僕が加持だが？」

何かようか？ 1年の授業には行つてないはずだが？」

語尾が全部疑問形つて……

つーか、マジでこの人が監督か？

整った顔つきに、そり残しの無精ひげ……いかにも適当そうな人
だ。

そして、長い髪は後ろで束ねてある、そして、纏うオーラは緩い

……

なんか、こう、もつといかついのを想像してたのに。

「野球部に入りたいんです。
これ、入部届けです」

「ほー、『神谷 功』ね。

山中が言つてた子か。

中学のころなんでも、全国ベスト4だつたらしいな

あいつ、どこで一体何を話してんだ?

「まあ、そんなとこです」

「丁度うちは投手が不足していくな。

お前がいいのなら、すぐにでも試合で投げてほしいくらいだ」

いやいや、同期はともかく、先輩たちの目が怖いっス。

「まあ、キヤ普テンの奴も、山中の話聞いて入つて欲しそうだつたから、大丈夫だろ」

ホント、あいつはどれだけの人じゃべつてんだ?

今度からは注意しておこう。

入部は済んだ。

よっしゃ、部室にでも行きますか。
横にいる奴と一緒にな。

「まあ、そう緊張せんでも、ワイが話してるから大丈夫やって
ある程度は感謝するが、いい加減しゃべりすぎだ。」

「はいはい、そりやどうも。」

それより、1年つて何人いるの？」

「お前、合して5人や」

「おいおい、来年の新入生の数次第では試合できなーいぞ。
マジ、大丈夫か？」

「おう！ 野郎ども！ 嘩のピッチャー連れて来たで！」

部室へ勢いよく当中に便乗して入ったのはいいが。

なんだ、この空氣？

誰かしゃべらうぜ。

「どないしたんや？ 誰かなんかしゃべれや」

野球のユニフォームを着た、3人の男たちは完全に俺を見て固まっている。

……俺、なんかしたつけ？

「どいつも……神谷です。

よひじく

右手を挙げて、あこせつしてみたけど……誰かほんとマジ、どいつもかしてこの空氣！

「へー、君が神谷か。

思つていたよりも普通の体型をしてるんだね」

一番に右にいた、眼鏡をかけた男が言葉を発した。
俺の体を見つめ、何やらぶつぶつ呴いている。

「あいつの名前は関本 ショート せきもと ようご。
ポジションは遊撃手や」

隣に居た、山中が解説してくれた。

眼鏡＝関本、この方程式で間違で決まりだな。

「先に名前言わなくて、スイマセンー！」

そう言つて、猛烈な勢いで頭を下げている真ん中の男。
気の弱そうな奴だ……

「あいつは桜井 さくらい 大樹 だいき。
ポジションは一塁手や」

山中に紹介された桜井はいまだに「スイマセンー」と言つて、頭
を下げる。

桜井＝スイマセン、こいつはこの方程式で〇×だと。
さて、残る1人は俺を物凄い睨んでくるんだが……俺なんかしま
した？

「てめえが、神谷か」

ちょ……顔近い。
しかも、超怖い。

「そりだけど、なんだよ？」

「俺様の名前 まるかわ 丸川 りんた 林太。
ポジションは外野だ」

お前は俺様キャラか。

なんか、まともな奴居なくね？

「で、帰りになんて、ラーメンなんだ？」

「おまえ神谷の入部歓迎会やないか」

「そうそう、せっかく一年生増えたんだしさ」

部活帰り、1年（北川も含め）全員でラーメン屋へ。
なんでも、桜井がかなりのラーメン好きらしく、この店はかなり
美味しいとか。

そして、とうの本人は……

「スマセン！ 僕のせいだ、スマセン！」

そんなに謝らなくてもいいんだが……

「桜井！ てめえ、つるせえんだよ！

俺様の食事の邪魔をするな！」

そして、丸川よ。

ラーメンにコショウを入れ過ぎだ。

「このスープの味！」

具材はおそらく……」

関本よ、眼鏡を曇らせながらスープの解析はやめてくれ。
マジで食欲が無くなる。

くそ！ まともな奴はいないのか！？

「どないしたんや？ 食わんのか？」

山中、この状況で冷静に食べれるお前の神経を尊敬するよ。

「こつも、こんなに賑やかなのか？」

「まあな、悪くないやろ？」

そう言われ、周囲に田舎をやつた。

騒がしい、だけど、その空間に広がつてこる空虚せどいか心地いい。

こんなのも悪くないかもしねない。

「今、神谷君笑ったでしょ？」

「別にー」

「……野球部、入って正解だったでしょ？」

「かもな……それより、北川。

麺延びてるぞ」

「嘘！ ホントだ……スープが無い……」

ハハハ、麺が倍くらくなつてやがる。

「おい、神谷あ。

てめえ、えらく沙希ちゃんと仲がいいようだな？」

丸川は俺のこと嫌いなのか？

「気のせいだろ。

変な誤解はやめてくれ」

「フン、まあいい。

俺様の狙う女子は一人しか居ない

「誰だよ？」

「斎藤 舞ちゃんだ」

……むづ、言葉がみつかねえよ。

「丸川にあんな可愛い子が落とせるわけないだろ？
自分の顔と相談したらどうだ？」

「関本！ てめえ！」

冷静な分析ですね。

関本博士。

「関本さん、そんなこと言つたら。
ダメですよ！」

「いいんだよ、早めに言つたほうが本人のためになる。
桜井だつてそう思つてるから。
否定しないんだろ？」

「そつそれは……」

「桜井……貴様……」

「ヒイ！　すいません！」

また、謝るんだな。
桜井よ。

第23話 僕の分析によるとだな……

Side 藤井 高志

思わず、口元が緩んでしまう。

なんせ、俺の一番待ち遠しかった、あの投手が復活したんだからな。

現在、行われている、県大会での活躍で評判も右肩上がりだ。

「見ろよ、飯村。

俺の予想通りだろ？」

「開成が秋季県大会、ベスト8に入ったことですか？」

「そうだよ、この秋からエースになった、神谷君は逸材だぞ。140km越えのストレートに高速スライダーを武器に全試合で一桁奪三振だ」

「でも、四球も多いじゃないですか。
守備^{バック}の助けが無かつたら、もつと失点してるはずですよ

こいつは分かってねえなあ。

その、不安定さが魅力的だつてのに。

「それに、藤井さんお気に入りの開成も次で終わりですかね」

「その手元にあるトーナメント表、見て下さいよ

「なんだ？」

「……こいつは確かにきついな」

そこに書かれていた開成高校の次の相手は夏の甲子園ベスト16、報明学園だった。

Side out

「ラスト！」

「んつー！」

放課後の投球練習。

俺の投げたボールは山中の構えるミットに乾いた音を響かせながら収まった。

「OK！」

疲れは大丈夫そうやな

「まあ、夏の予選と違つて、土日^{ヒマ}しか試合がないからな

「それはいいとしても、少し四球^{フォアボール}が多すぎとちやうか？」

「もともと、コントロールが良い方じやないんだよ」

「それはわざやけど、次の相手は甘いところ入ったボールは打たれるで」

「分かつてゐる」

なんせ、次の相手はあの新井が4番を打つ、報明だからな。
ここまで全試合「ORLD勝ちの強豪校。
俺たちのような県立校がビームでやれるか……

「加持先生、はい、どうぞ」

「「」苦労さん」

「ひして報明の各打者のデータを見ると凄いな。
さすが、全国クラスって感じだ。

つちの神谷がどこまでやれるか。

「先生、次の試合勝てますよね?」

「さあな、ただ、神谷あいづが打たれれば、つむ終わりつことだけは
ハツキリしてゐる」

「大丈夫かなあ……」

俺が監督を始めてあれだけの投手が入ってきたのは初めてだが……
まだ、甲子園では通用しないだろうな。

しかし、山中や他の1年の力があればなんとかなるかもしれんな。

…………、あいつらを見ると、どうも茜を思い出してしまう。
甲子園なんて、あの最後の夏以来、再び行けるとは思つても無かつたのにな。

「北川、俺は職員会議があるから、もつ練習終わるよつとこ
てくれ。」

後、明日は試合だから、早めに帰るよつて。
特にお前ら1年は寄り道せずに帰れよ」

まつたく、1年全員でなんで今ビール一郎ーメン屋なんだ。

「はーい、今日は大人しく帰ります」

Side 山中 淳

「……山中、もう一度言つてくれ

「だから、北川と二人で一緒に帰れや」

「なんでだ？ 全員で帰ればいいだろ？」

神谷は少し頭が弱いんとやうか？

今のセリフを北川が聞いたら泣くぞ。

「おいおい、山中ちよい待ちな。
そのじづき名、俺様が受けれるぜー。」

「丸川……残念やけど、お前じや話ならんねん

「なんだと！？俺様が神谷に劣つているものなど何も「少し、黙つてろ」ぐは！」

ナイス関本！

ボディブローで悶絶してゐる丸川とそれ見て謝つてゐる、桜井はおいておこう。

「いいかい、神谷、俺の分析によるどだな……」

また、なんか変な分析が始まつたで……

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「……つと、言つわけだ。

とにかく、お前は北川と帰るんだ」

「30分黙つて聞いてたけど、結局何が言いたかったんだ！？」

神谷が驚く気持ちも分かるわ。

30分かかって、意味不明な理論を展開しておいて、進展なし。

「いいから、帰れってことだよ！」

「関本！ お前も黙つとけえええ！」

Side out

まったく……こいつらは何を考えてんだ？
いつも通り、皆で帰ればいいのに……

「みんな、まだあ？」

「お！ 北川、神谷が一緒に帰りたいそりやで」

「待て！ 山中、誰もそんなこと」「関本、黙らせえ」「ふがー」

「くそ！ 関本離せ！ そして、口元から手をどけろー」

「なんか、神谷君凄い暴れてるけど、大丈夫なの？」

「少し、テレてるだけや。
全然大丈夫や」

勝手に決め付けんなあああ！

「神谷……あきらめな

関本、耳元で囁かないでくれ、寒氣がする。

後は北川が断るのを期待するしか……

「いいの？ ジャあ、一緒に帰ろっか」

俺の期待は北川の笑顔の前に儚く散った。

第24話 なにがや？

「で、それ一困つちやうわけ」

「へー、北川って、ゴキブリとか大丈夫なんだな」

「まあね」

今の話の内容は『家に出てぐる黒虫』について。
どうで、こんな話に発展したのかまったく分からぬ。

あれこれ、くだらない話をしている間に北川の家に着いてしまつた。

「じゃあ、また明日」

「うそ……」

早くこの場所を去りたい。
出ででてほしくない話題が出なこいつだ。

「ねえ、少し待つて」

立ち止まるな、聞こえないふりをして足を動かせ。

「振り返る気がないならそれでいいよ。

そのまま、聞いて」

……無視するわけにはいかない……か。

「なに?」

「告白の返事だけぞ」

やつぱ、それか。

触れてほしくない話題だつたんだけどな。

「それのことだけぞ」「まだ、いいよ」はい?」

Side 北川 沙希

彼は驚いた表情で私を見てる。

そんなに驚かなくてもいいのに。

「私、少し勢い余つて告白した感じだったでしょ?
だから、返事はまだいいかなつて。
それに……」

今の君の答えは分かり切つてしまつていいのか?

「神谷君が私を好きになつてくれまるまで私、頑張る。
だから、返事はまだしなくていいよ」

わつと、これが今の私に出来るベストなんだ。

Side out

「いいのか?」

本当にそれで?」

「うん、だから、大会終わつたら2人で何処か行こうよ」

「分かつた、考えておくよ」

「ホント!/? 約束だよ」

そう言つて、彼女は小指をピッと立てた。

「約束の指きり」そう言つて、彼女は俺に手招きをした。
俺は何も警戒せずに招かれるがまま彼女に近づいた。

それは一瞬だった。

「ありがと……」

そう呟いて、彼女は自分の唇を俺の唇に重ねた。
あまりに突然過ぎて、彼女の顔が離れた後も俺は声が出なかつた。
そんな俺の瞳に映つたのは

「明日の試合、頑張ろうね!」

そう言つて、忙しく家へと入る北川の姿だった。

「調子はずまわせやな」

試合前のブルペンでの投球練習を終えた俺に山中が話しかけてきた。

いつも、明るい表情には緊張の色。

まあ、相手が相手だしな。
視線を相手のベンチにやつた。

ベンチの前で新井が凄まじい、スイングスピードで素振りしていた。

「新井を一試合抑えるのは、しんどやつだなあ

さう呟く俺の背後から声がした。

「フン、俺様の所に打たせれば全部詰めやが

そう言って、5番、中堅手の丸川はすでに鼻息が荒い。

「神谷君、エラーしたらすいません」

2番、一 [セカンド] 墓手の桜井はそう言つて、頭を下げるが、桜井がエラーしたところは見たことがない。

「俺の分析にはすでに終わっている、安心して投げろ」

眼鏡をかけなおして、1番、遊撃手の関本は微笑した。

「無駄口、たたく暇があつたら、バットでも振つとけ」

自分のミットの形を入念に確かめながら、4番、捕手の山中は言った。

実際に頼もしい奴らだ。

こいつらがバックにいるから俺は安心して投げられる。

やがて、主審の人の合図で両チームが整列した。

俺たちにとって、春のセンバツをかけた、大一番の試合が始まつた。

Side 藤井 高志

「飯村あ、まだ、着かないのか?
試合はとっくに始まつてんだぞ」

「そんなこと言つなら、先輩が運転してへだせよー。」

「悪い悪い、できるだけ急げよお」

開成対報明を楽しみにしてたんだからな。
神谷君が初めて対戦する、全国クラスの高校だ。
報明打線にどれだけのピッチングが出来るか、力の差は歴然だが、
ビビしても期待してしまう。

「着きましたよ」

「よし、見に行くか」

車を降りて、球場のほうへ向かった。
報明の攻撃、開成のマウンドにはエースの神谷君か。
点差は? イーニングは?

「8回表……0対1か」

投手戦か……開成の打線では報明からそういう向点も取るのは難しい

からな。

しかし、神谷君が報明打線を1点で抑えているとこ

Side out

「ナイスピッチ」

8回表の報明の攻撃を抑えた俺に山中が嬉しそうに話しかけてきた。

「じつも、でも、無得点のままじゃ勝てないぞ?」

「わかつとるよ、ほりほち、反撃せなアカンな

「お前、やつぱすげえな

「なにがや？」

山中はそう言つて、とほけた顔をした。

一番点の欲しい時に逆転ツーランつて……話が出来すぎだろ。

8回の裏、ヒットで出墨した桜井を2墨に置いて、山中はバックスクリーンにボールを叩き込んでしまった。

打った瞬間にホームランとわかる完璧な当たりだった。

改めて、山中が敵でなくてよかつたとつぶづく思う。

「それより、神谷。

最後の1イニング頼むでえ

「任しこんな

山中と言葉を交わした俺は9回……最終回のマウンドへと向かつた。

第25話 調べてみつか?

Side 藤井 高志

「藤井さん、開成惜しかったですね」

帰りの車で飯村がそう言つて口を開いた。

「まあ、現実はそう甘くないってことだな」

開成対報明の試合は、新井君のサヨナラ逆転ツーランで幕を閉じた。最終回、マウンドの神谷君はツーアウトまでは簡単に取つたが、

3番打者にフォアボール。

そして、続く4番新井君に粘られた末に力尽きた。

「よく、やつた方さ。

他は「ORLDで負けているんだからな」

ただ俺は、何ともいえない疑問を頭に抱えていた。

中学時代見た、神谷君のボールは、今日見たモノよりも凄かつた気がする。

自分の印象でしかないが、力が落ちている気がしてならなかつた。

「……思い過ごしだな」

自分の勘をそう信じたいと思った。

たとえ、もし、そうとしても彼なら大丈夫だと信じている。
神谷君がいざれ甲子園で旋風を巻き起こしてくれる……と。

「あ～！ ちくしょー！」

「最後の一球だけ甘く入つてもうつたな」

試合の帰り、俺と山中は近くのファミレスで反省会。と、言つよりも、敗戦後のあの空氣に耐えきれなくて、俺が強引に誘つたに等しいが。

「神谷はよう投げた。
援護できんかった野手^{わいら}が敗戦の原因や」

「変な慰めはやめてくれ、最後の最後に打たれて負けた。
事実はそれだけだ」

負けるのは初めてじゃないし、次があると言つても負け方が負け方だけに、結構精神的にキツイ。

「でも、今回でハッキリしたな

「何が？」

「神谷のピッチングは全国クラス相手でも十分通用する。今日はそれ証明出来たと前向きに」とうそよつや

確かに、ある程度自信にはなったが……負けたら意味ないからなあ。

「このカリは夏かえそうや

「当たり前だ、次は勝つ」

今日の敗戦でセンバツは無くなつた。
甲子園へのチャンスは後3回。
しかも、次の夏は先輩たちにとって最後の夏だ、せめて悔いの無
いように引退してもらわないと。

「まあ、それは終わった話として……」

山中は俺の田をまつすぐ見つめ、俺の様子を窺うような視線を浴
びせてくる。

キャッチャーらしい、相手を観察するような田で。

「昨日は北川と何かあつたみたいやな

「……何を根拠に言つてる?」

「アホ、ワイの洞察力なめんな。

今日のお前りの態度見てたら、何があつたじぐらこすぐて分かるわ。

試合になつたら、頭の中から消えてたみたいやけどな

なんだとう！？ 確かに試合前は何となく気まぐれで距離を置いていたが、違和感のない程度のはずだ。

「……まさか、思つたゞ、お前朝帰つちやうやうな？」

バツバカ野郎！ それじゃ指定の物語になつちまうだ！

「お前が考へてるよつな、やましことは何も無かつた」

「ほー、嘘は身を滅ぼすだ？」

「神に誓つて本当だ」

そんな、疑いの目で俺を見ないで……

「じゃあ、ホントのこと聞かせえ

……俺、なんか悪いことした？

・ · · · · · · ·

「……………」
「と、言つわけだ」

ちくしょー、なんで俺は全部吐かされているんだ?
何も悪いことしていないだろ。

「はあ!…? ジャあ、なんや、北川への返事は保留かいな!…?」

「まあ、わづゅう」とだな

「いのヘタレめ」

やかましい、向こうがそれで良いつて言つんだから仕方ねえだろ
お。

「まあ、早めに答へばだすつもつでこるよ

「んな」と言つて、グダグダ引つ張る氣ちやうやうな?」

「安心しろ、善人でないと自負しているが、そこまで悪人ではない

「なら、ええけどなあ

にしても、こいつは一体何を考えてんだ?
そこまで、俺と北川を近づけたいのか?

「お前は、なんでそこまで、俺と北川の仲を気にするんだ？」

「「」ひちは、何かと相談持ちかけられとんやぞ？
結果を気にするのは当然やわ」

北川と山中はグルだったのか……つー?
まつまさか！？

「まさか、昨日ことも貴様の陰謀か？」

「今更なにいつとんや？
当然やろ」

そこまで、堂々と言わるとなんか清々しいな……

「その話は終わりにしよ」。
それよりも、うちの監督についてだけど……」

「加持先生か？ やめとけ、あの人の素性は誰も知らんのや

「は？ 本人に聞けばわかるだろ？」

「自分」とは一切、話さない人やからな」

マジかよ、経歴不明の監督って……ある意味公立らしげけど……

「山中、お前、今まで加持先生の采配に疑問を感じたことは？」

「あまりに的確過ぎて驚いたことはあるで。

それに、驚くような采配でも結果的には良いほうになつてたとかな

そうだ、あの人は公立校の監督だつて言うのに監督としての腕は悪くない、それどころか間違いなく上位クラスだ。

それに、勝つことにどん欲だ、でなきや入部して一ヶ月の奴に工一スを任したりはしない。

そんなことしたら普通はチームの和は乱れるものだけど、あの人

が監督のせいがやうことは一切起らなかつた。

「調べてみつか?」

山中がいたずらを思いついた子供のような顔で提案した。

「どうやってだよ?」「

高校生の俺らが個人の経歴など調べる手は口コロリ以外見当たらぬい。

俺らが映画とかに出でくるスパイとかなら話は別だけどな。

「藤井さんがあるやないか。

以前、学校に来た時も加持先生と仲良さそうやつたし、何かと知つてるんぢやうか?」

「なら、決まりだな」

結局、藤井さんに話を聞くと言ひついで意見はまとまつた。

「さて…… そろそろ、帰るか

「せやな

山中と席を立ちあがり、勘定をすませ、店を出た時だった。

「あ……」

「あ……」

「ん?」「…

俺たち2人と鉢合わせになつた、今日の試合を決めた本人、新井と。

今日、戦つた奴、少なくとも負けた相手とは話す気分にはなれなくて、無言で立ち去つとした。

「ちょっと、待てよ

勝者が敗者に声をかけるのはタブーだろ、普通は……

「なんだよ?」

「神谷^{おまえ}なんぞ、夏は居なかつたんだ?」

「色々あつたんだよ

「……まあ、いい。

戻ってきたのはありがたい話だからな

「じつめいひうじだ?」

「俺は中学時代、お前に負けたんだよ

記憶にないな。

今となつてはそつちの方が格上だろ、」

「それに、今日のお前のピッティングはあれで本気なのか？
中学時代のほうが凄かつたぜ」

新井つて、結構性格悪くないか？

「大きなお世話だ、それともケンカ売つてんのか？」

「まさか、ただ、気になつただけだ。

それに、あの程度がお前の力だつて認めたく無かつたしな」

「じつゆうじ」とだ？」

「俺は神谷おまえに勝つために報明に入つたことだ。

夏は怪我とかつまらないことで、欠場すんなよ。

一番楽しみにしてるんだからな」

新井はそう言い残し、背中を向け、右手を擧げて去つて行つた。

「手ぇ、抜いてたんか？」

俺と新井のやり取りを黙つて見ていた、山中が口を開いた。

「まさか、全力に決まつてんだろう

「今のつて、ことやう？」

「力が落ちていたと言つのなら、この冬で取り返してみせるぞ」

神鳥との再戦よりも、まずは新井の度肝を抜くのが先決だな。

第25話 調べてみつか? (後書き)

じまいくは中々田で更新しないといふこあります。

第26話 駄はダメだよ

さて、ややこしいことになつた。

加持先生のことを聞くために藤井さんに連絡を取り、約束を取り付けた所まではよかつたんだが……

「はー? 北川も連れ来いだつて?」

『ああ、それが藤井さんが出した条件や』

「はあ、分かつたよ。

じゃあ、当口は俺とお前と北川と3人で『何いつてんねん?』へ?

『わいは行かんぞ、関係無いしな。

北川にはお前が連絡いれとけ。

まあ、頑張れや、じや』

「おー! こら、待て!」

と、まあ、こんな感じで昨夜の電話は切れたんだが、メインの問題はそこじゃない。

「いんや、今来たと!」

「いんやん! 待った?」

「そつか、それで、今日はビートに連れて行ってくれるのかな?』

そういうメインの問題とは、北川がこれを約束していたアートと勘違いしていることだ。

なんで勘違いしてるんだって？

電話の向こうの北川の勢いに押されて言いだせなかつたのや……

念のために言つが、俺はヘタレでは無い……と血食してこる。

「ねえ、聞いてる？」

「ん？ ああ、聞いてるよ」

「嘘はダメだよ」

「！ 地味に痛いです、手の皮をひねられるのは。
なんか、すでに機嫌悪くない？
やべえよ、もし、ホントのこと言つたら機嫌悪くするんだらうな
あ。」

「はい、『めんなさい』
で、なんだつけ？」

「言い訳は後で聞いてあげるから。
今日の本題を話して」

「……なんで、ばれてるんだ？」

「電話の前で神谷君、拳銃不審だつたじやない。
あれだと、誰でもわかつちゃうよ」

「「めん……じゃあ、ちゅうとつこて来てくれ

「　て、なわけで、加持先生の素性を教えてもらつていいですかね？」

「なるほどな……加持のことを知りたかったのか」

藤井さんの要件は、個人的な話だった。

俺とは本当にそれだけだった、ただ、北川を呼び出した理由は分からぬ。

彼女にはまったく、話題を振らず、藤井さんの要件は終了。

本当に無駄に連れて、来ただけだったんじゃないかな？

「まあ、加持は自分のことを話さないからな

あいつ

「ですから、藤井さんなら何か知つてると思って、親しみですしあ」

「そりだなあ、なんて言えばいいのか……」

藤井さんは頬んだコーヒーに一口つけないと遠くを見るような眼で口を開いた。

「俺とあいつは高校時代、同じチームで3年間過ごした。愛知県にある、館鳳高校かんほうこうこう、そう言えば大体分かるだろ。まだ、知りたいなら加持に聞くといい」

Side 北川 沙希

私なんで、呼ばれたんだる……ただ、座つて話聞いてるだけなんて、暇すぎる。

神谷君は私を置いて、トイレに行っちゃうし、私にこの無精ひげを生やした人と何を話せつて言うの。

「君が、神鳥君の妹か？」

「え？」

驚いて思わず顔をあげた。

私を見る彼の瞳は確信を得ていた、それだけは間違いない。

「この仕事がら、色々な話を聞くんだ。」

神奈川の友人から、神鳥君が妹のことを心配してると聞いてね。名前は間接的に知つてたから、君だとすぐに分かった

「それで、仮にそつだとしてなんですか？」

「伝言があつてね、『すまなかつた』それと、『また、必ず会おう』だそうだ」

お兄ちゃん……もしかして、ずっと心配して……

「俺が今日、君を呼び出したのはそれを伝えるためだ、じゃあな」

藤井と名乗る人は、そう言って、爽やかな笑顔で去つて行つた。

「あれ？ 藤井さんは帰つたのか？」

「え？ うん、さつき帰つたよ」

お兄ちゃん……また、会えるよいしな。

『館鳳高校？ 確かにそう言つたんか？』

「ああ、知つてゐるか？」

『当たり前や、15年前、甲子園に旋風を起こした伝説の高校や。なるほど……加持つて、あの加持 幸一か』

電話の向こうで山中は一人で納得した様子。

「詳しく話せ」

『また、今度な、ほな』

切りやがつた……つたく、話せつてんだよな。

「うへへ、誰と電話してたの？」

「ん？ 部活の奴だよ」

「北川さん？」

「その隣に居た奴だ」

「山中君か……ホント？」

『疑うことか？』

つーか、俺の顔を覗き込む愛の顔が近づくもんですか？……

「愛、ちょっと近い」

「最近こいつは、部活ばかりで全然かまつてくれないから。甘えていい？」

その、上田遣いの顔で俺を覗き込むな！

誰だよ、愛に男を誘惑するよつなことを教えた奴は！？

危険な中3だ、まだ、身体が発展途上でホントよかつたと切に思う。

舞はスタイルいいからなあ、愛もあんな感じになるのだろうか？
だと、したら俺の理性は将来本当に危ない。

「1階に舞も居るのにダメに決まつてんだろ。
舞が洗いもの終わつたら、お前も帰れよ」

しかし、舞に家事をほとんじしてもらつていて、俺は相当情けない男だな……

Side 斎藤 愛

む～、こいつにい 最近冷たいよお。

部活始めて、毎日充実してるのは分かつてゐるけど……

「もう少し、かまつて欲しいな

「十分かまつてるだろ？」

そう言つて、じゅにいは愛の頭に手を置いて、髪をくしゃくしゃにする。

昔からじゅにいが愛にしてくる、ちょっととしたクセみたいなもの。

その手から伝わってくる暖かさは、優しくてどこか、切ない。
大事には思われているけど、特別には思われていない。
何も語らない、大好きな人の手はいつも、そう言つてゐる。

「ねえ、じゅにいは好きな人とか居る？」

「……居ないよ」

「愛はね、居るよ」

ずっと……ずっと、大好きな人が。

じゅにいを独占したい。
自分だけものにしたい。
きっと、じゅにいが他の女ひとと仲良くしてゐると、きっと
自分が自分じゃ無くなるほどに、愛はじゅにいのこと……

「ふーん、愛にもどつとづ、好きな男が出来たか」

えー？ じの流れつて普通、誰か聞く流れじゃない！？
じゅにいって愛にそこまで興味無いの！？
もー、泣きそつ……

「泣きそつな顔してビリしたんだ？」

じゅにいのせいだよ……

急にそんな、泣きそうな顔してお前、一体どうした？

「なつなんでもないよ。

それより、早くゲームしよ

「ああ、分か……」

愛の提案に乗ろうとテレビの前に座った時だつた。

聞こえたのは何かガラス類が割れる音、そして、誰かが倒れる音。

「なんだ！？」

慌てて部屋を飛び出した、俺と愛の両方に飛び込んできたのは、割れた皿の残骸と床に倒れる舞の姿だった。

第27話 リンゴ食べたい

「38度9分か、ただの風邪っぽいな」

「まいねえ、大丈夫?」

「大丈夫よ……すぐに良くなるから……」

「明らか、大丈夫そには見えんがな。

「とりあえず、家まで運ぶか、すぐだしな

「でも、家には誰も居ないよ」

「……それは、ホントか愛?」

「うん、仕事で3日ほど、戻らないって」

困った、看病する人が居ないってことか。
それに運よく明日熱が下がつたとしても、下がらなかつたら面倒な
ことになるし、仕方ないか。

「愛、今日は俺の家に泊れ、舞も今日はこっちで寝させよう。
で、明日一日、俺が看病するから、お前はちゃんと学校行けよ」

「それなら、愛も看病する!」

「ダメだ、お前は中3で部活のほうも最後の大会へ向けた大事な時

期だ。

投打の中心のお前が居なきや、練習にならん

「わかったよ

「まあ

やうすねんなつて……

ふあー、眠いぜ。

朝練以外の目的でこんなに早く起きたの久しぶりじゃね?

朝食は適当にすませた、学校にも連絡入れた。

よし、後は舞の体調が良くなるのを待つだけっと。

「よく、寝てるな

薄明りで眠る、美少女はなかなか、絵になる。

……俺は何考えてんだ?

「でも、改めて見るとキレイ顔してるよなあ

眠っている、舞の顔を覗き込みしみじみ一人呟く。

これで、性格がもう少し大人しかつたら……いかん、相手は今寝ているんだぞ、煩惱滅却つと。
状況を間違えば俺は確実に変態だ。

「ん……？」

やべえ、起きちゃいましたよ。
しかも、完全に田が合つた。

「あ……よつよう。
氣分どひつへ。」

「……変態」

起きて一言田がそれかい！
しかも、布団で顔隠して背中を向けられました……

おかしいな、俺つていいことしてるはずだよな？

「なんか、食べるか？」

「いりない……」

「でも、なんか食わないと言らなこいぞ」

「……」

舞は依然として背中を向けたまま。

……出て行けってことですか？

「分かつた、分かつた。

出て行くよ、ゆっくり寝とけ。

何かあつたら呼べよ

「え？ まつ待つてつ」

力の無い、細い腕で服を掴まれた。

「なんだ？」

「リンゴ食べたい……」

昼のスーパーは思っていたよりも人が少なかつた。

つーか、リンゴってなあ。

あいつ、リンゴ好きだつたつけ？

「これでいいか」

果物売り場のコンゴを一つ適当に選んで、家へと帰った。

「皮をむくつて小学校の家庭科の授業以来だな」

よし、どれくらいに長く出来るか試し……10?で終了だよ。
……くだらない」としてないで、早く舞に届けてやれ!。

「ほれ、『希望のコンゴだ』

「ありがと……」

舞は出されたリングコをつまようじで口へと運ぶ。

「上手いか?」

「……身が少ない

「わがまま言つな

「だつて、ホントのことだもん」

まだ、遅く弱い声だけど、体調が少しは回復したみたいだ。
額から染み出た汗が舞の毛先を濡らし、女としての色っぽさを増
幅させていた。

いかん、いかん。

よからぬことを考へている場合ぢやない、相手は一応病人だぞ。

「どうかしたの……?」

舞の言葉に引き戻された俺は慌てて首を横に振った。

「また変なこと考へてたの……？」

「または余計だ」

「ねえ……ちよつといつち来て」

「？ なんだ急に

「うわー。」

舞に手を取りられ、引きずられる形でベッドに舞とダイブ。腕には舞の体のラインがハツキリと分かるぐらい密着している。

そう、ハツキリとだ。

「えーっと、離してくれるかな？」

恥ずかしそうで、皿を見れねえ。

「功はもしも、功が考える」と向をしてもいこよつて、重つたらびつあるの？

おこおこ、「こつは何言つてんだ！
自分がやばい発言してるとこがちつこてないのが…？」

「頼むから、離れてくれ」

「あたしを見て」

アホなこと言ひなあああ！
すでに、理性は臨界寸前だぞ！
直視すれば間違いなく理性が壊れ……

「お願い……」

……普段強気な女の子にそんな弱々しくお願いされたら、断れません。

持つてくれよ、俺の理性の防波堤。

「なんなんだ、突然？」

「功の顔、見たかつただけ」

それだけの理由に俺の理性を攻撃するな。

「毎日、見てる顔だろ？」

「……だって、寂しかったんだもん」

……こいつ、熱にうなされて自分が何言つてるか分かつてないんじやね？

それに、俺の理性、限界突破だよ……

「舞、俺ホントにもう「スースー……」は！？」

物凄い可愛い寝顔で寝てるよ……離れてくれそうにもないし。
うん、あれだ、こいつの発言は無かったことになつたんだな。

OK、それでこいつ。

にしても、今日は早起きだつたから眠いな。
少し、俺も寝るか。
脱出不可だからここのままで。

S.i.d.e 斎藤 舞

「ん？」

なんか、功に抱きついてた夢を見……！？
どうしよ、ホントに功に抱きついて寝てる…
なんで、なんで！？

「」の状況に至るまでの過程が全然思い出せない。
どうしよ、変なこと言つてたら……こしても。

「無防備な女の子の横で平然と寝るとはどうひもひもつ？」

眠つてこぬ功の横顔を指さつて咳く。

せりや、寝込みを襲うのはいけないけど、堂々と寝られると異性として見てもらえて無いみたいで結構ショック。
あたしは、今こんなにも心臓が高鳴つているの。」

「……君のことが大好きです。
他のものは田に入らないくらい」

こいつが、君はあたしの想いに気づいてくれるかな？

もしかしたら、今ままかも知れない、だから……

今だけ、この時だけはあたしだけの君で……

Side out

次の日、風邪の治つた舞の代わりに功が風邪をひき2日続け学校を欠席した。

第28話 クリスマスの予定は?

「くそ、このメニュー絶対俺を殺す氣だろ」

肌寒さが増し始めた12月、年内の練習試合もすべて消化し練習はオフシーズン独特の地味で苦しい基礎トレ中心。ただし、俺だけ加地先生特製の特別メニュー、ただし、このメニュー半端なくきつい。

「どうした？ もうギブアップか？」

しかも、走りこみ以外の時は加地先生が監視役で練習を管理する。そんな、日を光らせなくとも逃げませんって……

「まだまだ、行けますよ」

「やつこなくてはな。

お前には夏頑張つてもらわないといけないしな

自覚しております。

「夏は絶対負けません」

やつれ、俺には足踏みしている暇は無いんだ。
過去は消えない、それでも前へ進むと決めたのだから。

「神谷、貴様クリスマスの予定は？」

部活の帰りに一年全員で寄つたファミレスで隣に座る丸川が話しかけてきた。

「ん？ 今のところは何もないけど」

「ホントか？」

「嘘をつく理由が無いだろ」

「よし、じゃあ、クリスマスはお前の家でパーティだな

……なんですか？」

「俺の分析では神谷は一人暮らしだろ?
だから、騒いで家の人に迷惑のかからないお前の家だ」

解説と分析ありがとう。

そして、俺への迷惑は考慮しないのか？

「すいません！　お酒とかは持ち込みませんから！」

そこには関係ないだろ、桜井よ。

「まあ、あきらめのや」

「神谷君の家、行ってみたい」

貴様らにじめ、遠慮と重つものが無いのか？

「ふやけんなああああ…！」

なんで、いちいち俺の家なんだ！？
あと、理由が意味わからねえだろ…。」

「何か困る理由でもあるのかな？」

やべえ……北川が今以上黒いと思つたことねえ。
何か言い逃れ出来る理由を考える。

このままでは俺の家がパーティ会場になっちゃう…。

「何も無いね、じゃあ決定」

「「「イヒーイー…」「」」

そんな盛り上がる」とかお前ら？

結局断れなかつた……嫌じやないんだけど、問題がつと言つより
高い壁があるんだよなあ。

「功、今年のクリスマスはどうするの？」

「今年もいつにいつの家でパーティでしょ？」

お前ら姉妹が俺の家に居ることに違和感が無くなつてきたな。
そう、今俺の直面している問題とはこの何故か恒例となつた俺の
家でのプチクリパ。

「いつその事、一緒にするか？」

「おお、そうすれば一気に問題は……解決しないな。
丸川に俺と舞が幼馴染だと言つことは言つてない。」

「言つたらアドを教えるだのしつらわうだからな。
つまり、その場に舞が居ると俺が丸川にやられること……」

「それなんだが、今年は無しだ」

「えー？ なんでいつこいつ……」

「愛ももう中3でもうすぐ受験だろ？」

それに俺と舞はもう高校生だ。

クリスマスぐらいいお互い静かにだな「言い分はそれだけ?」「はい!」

?

んな!? 何故、舞の奴は指を鳴らして戦闘態勢に入っているんだ!?

もしかして、ここが俺の命の終点?
認めん、俺は断じて認めんぞ!

「待て! 落ち着くんだ!」

早まつたことするんじゃない!」

「何、言ってるの?」

あたしは極めて冷静ですけど?」

顔は笑っているが、霸気がみなぎっている。
危険だ、俺の命は極めて危険な状況だ。

……開き直るか。

「実は……」

・
「……と、眞うわけだ」

舞の霸氣に負けて、すべて話してしまった……悪いことはしてないはずなんだが、なんか尋問に負けた気分だ。

「一緒にすればいいじゃない?」

「えー! やだやだ!
断つてよ……」「うひー」

くつ、相変わらず愛の上目づかいは強力だな。
しかし、約束してしまった手前断ると言うのは俺の信用に関わる
気が。

「功、沙希ちゃんも来るんでしょう?」

「北川? ああ、その予定だな」

氣のせいだらうか、愛が北川の名前に反応したのは。

「だつて、どうするの愛?」

「…………、愛の眞うことなんでも聞いてくれる?
聞いてくれたら、合同クリパで我慢する」

「なんでもだと?」

この上なく危険な香りがするんだが……なんとなく、ムフフな展
開があるような気も……

「何、考えてんの…」

「ぐふー。」

何故、俺の思考は舞に筒抜けなんだ？

読心術でも、使つてんじやないかと最近疑いたくな。

「あんたは全部顔に出てんのよ。

愛を変なことに巻き込まないで」

「勝手な言いがかりはやめ」「でも、愛ははじめてが初めての人だつたらいいな」「は…?」

おこおこ！

この中3何言つてんだ！？

「愛、あんた意味分かつて言つてる?」

さすがの舞も顔が引きつっている。

「うん、学校でそれくらい出でつけよ

ああ、純粹なままで育つて欲しかった……

「功！ あんたが変な物持つてるばかりに愛に悪影響出でるじゃな
い！」

「ふざけんなー。お前の教育不届きだろー。
俺に責任押しつけんな！」

「あんた、これ以上言つなら、また捨てるわよ」

隠した場所に無いと思つていたらお前か！

「人の部屋に勝手に入るなと言つただろー。」

「だつたら、変な物置いとかないで！
見てるこつちが恥ずかしいでしょ！」

「見なきやつだらー。」

「まじねえはきつと、こつにいがどんな属性持つてゐるか気になるんだよ」

はー？

「の爆弾娘は何言つてんだ？

一応言つておくや、俺は年上属性だ。

「愛、あんたこれ以上何か言つたら力ずくで黙らせるわよ」

「だつて、本当のことじやん。

まいねえもこつこと気になつて仕方ないもんね」

意味は深く考えないでおいつ。

「……ちよつと、こつち来なさい」

おお、舞の顔が耳まで真つ赤だ。
愛のやつ、地雷踏んだんじやね？

「え！…？ やだ、まだ死にたくない！
助けて…！」

許せ愛、俺の力ではどうにも出来んのだ。

「まいねえ、ごめんなさい！
謝るから許して、お願ひ！」

愛は最後にそつ懇願しながら、舞に引きずられていった。

第28話 クリスマスの予定は？（後書き）

テストのため少し投稿は控えさせていただきます。
いつでも、感想・意見は募集中です。

特に感想は作者のモチベーションに直結しますのでよろしくお願いします。

第29話 クモみつけ（前書き）

現実逃避と言う名の小説投稿。
季節外れのクリスマス編です。

第29話 クモみつけ

S.i.d.e 山中 淳

「さるや、いざ」

約束のクリパの日、北川を除く一年野球部部員で会場となる神谷家へ。

北川は少し遅れてくるとか。

「おい、山中。

神谷が舞ちゃんと幼馴染つてマジか?」

そういうや、そのこと知つてから丸川はつるさかつたな。

「おお、ホンマやで」

「見たら分かるだろバカめ」

「ああ!?

関本てめえ、俺様にケンカ売つてんのか!?

「つるやこ、近所迷惑だ」

「さよ今日は仲良くなきましょつよ、ね?」

テンパリ過ぎやで桜井。

「さて、入るか」

一応、インターほん押すのが礼儀つてもんやね。
……………応答なじゅと？

「おこ、山中、時間合つてるのか？」

「合ひてないまぢで、間違になへ」の疊語の『ビハリヤルヘ』が、
出たか

神谷の声が若干、いつもと違つのは気のせいだらうか？

「わいらや、家入れてくれ

『』……分かつた。

玄関あいてるから勝手に入つてくれ

「じゅ、お邪魔しまーす」

「おこ、靴サイズが小さいな……藤のつか。

「おこ、神谷あー！」

「な、なんだー？」

神谷の奴、驚き過ぎやん。

「舞ちゃんはもう来てるのか？」

「んあ……あー、もっすぐ来るこじやね？」

はあ？ じゃあ、あの靴は一体……

「山中、**アラビア語**でいいのか？」

丸川の言葉に頷く、神谷をよそに関本が耳元でそつと聞いて来た。

「なんや、関本？」

「玄関にあつた靴、あれはおおぞらく斎藤のだ。
ど、なるとこの家に居ることになるが、神谷の発言にあの少し拳動
不審な言動。
怪じくないか？」

「やうやな……少し、探るか。

神谷あ、お前の部屋つて2階か？」

「え……？」

「おお、そ、そうだけじ？」

「関本、決まりみたいや」

「このアホは家で一体何やつてたんだか……

「そのようだな、神谷、お前の部屋を見せう」

「や、それより、準備しようぜ」

「アカン、お前の部屋が先や」

「今は汚いからダメだ」

「関本、桜井。」

「ちよつち、抑えとけ」

「なー? 離せ、お前らあー!」

さて、見に行くかの。

「いくで、丸川」

「おうー!」

「やめりおー 開けるなあああー!」

そんな、言われ方したら好奇心そそられるわ。
神谷の部屋のベッドで斎藤が寝てたら、面白い話のネタに……

ガチャ

「え……?」

「な……?」

「あ……」

そこに広がっていたのは、予想外の光景だった。

「ス、スマン!ー!」

ああ、やせーじい話に……

別にやまじこことはしないの。」。

「神谷あー！」

お前、家で何やつてたんや！？

「殺すー！」

落ち着け2人とも！

特に丸川！

「殺す」は言い過ぎだ！

「待て、待て、待て！

俺の話を「死ねええ！」ぐはー！

やるやく…………本気で殴りがやがったな。

「さーて、神谷。

事情を説明を説明してもらおか

「山中、お前ら何を見たんだ」

「…………」シャツ一枚姿の斎藤や

「か、神谷君、不謹慎です」

「ま、待て……俺の話を聞け

「遺言は短めにしどけ

俺はなんでいじめられてるんだ?

「いいか、よく聞けよ」

話は、山中たちが来る数分前にさかのぼる。

「愛は結局どっちなんだ?」

クリパのために、俺と舞は飯の準備をしていた。
来る人数が多いので、俺が舞を手伝っていた。

「ん? その辺でいいよ

「なあ、舞。

これ、どこに置いとけばいい?」

「来るついで、あのトト毎年楽しみにしてるから」

「愛もまだまだ、ガキだな」

「それは、あんたもでしょ。」

それより、早くしないと間に合わないわよ」

ホントだ、時間がもう無い……あ、クモだ。

「クモみつけ」

「うわー、どうーーー?」

そーいや、舞はクモが苦手だったな。

「お前の呪元ここだね」

「いやあー。」

少し、からかってみたら、激しく転倒。

拍子に近くに置いていた牛乳を頭からかぶつた。

「お前、何やつてんだよー。」

「だつてえ、クモだめなんだもん」

そんな、半泣き状態で言わなくていいだろ。

「いいから、シャワーでも浴びて来いー。」

・

舞に俺のジャージを貸してみたが、当然サイズが大きいみたいだ。

「大きすぎない？」

「文句言つな」

「……功つて、部屋に服あつたよね？
ちよつと、着替えてくるから、できたらよろしくね」

「お、おう」

この直後インターホンが鳴り、今に至る。
思い返せば、「着替えてるから」と一言、言えば万事解決したん
じゃないか？

「あれ？ 沙希ちゃんは？」

俺たちの前に現れたのは、ジヤージ姿の舞。
結局着替えなかつたのか……俺殴られた意味なくね？」

「遅れてくるやつや。

それより、斎藤、さつきはその……すまんかったな」

山中はさう言つて、顔の前で手を合わせた。
丸川は……口を閉じ天の仰ぎ、何やら妄想中。
何を考えてるかなんて言つのは、大体想像つくが。

「え？ 別に気にしなくていいよ。
その功^{バカ}が悪いんだし」

なんですか？

「おい、じり、ちょっと待て。
俺が悪いってどうゆうの？」とだ？」

「だつて、そうでしょう？

女の子が着替えてる部屋に男を入れるなんて、情けないやつだわ」

「女の子？ それは誰のことだ？」

「つー、そう、土に帰りたいみたいね」

「せば、山中たちが居る前では何もしてこなこと思っていたのにー。」

「ま、待て！」

「おちつ、「ふつー」「うわああああー！」

「背負い投げだと？」

「いつの間にそんな……投げ技を……
しかも、おまけに肘を腹に落としていきやがった……」

「えへ、皆、中に入つて。

そこに倒れてるバカはほつといて」

「皆、俺をそんな哀れな目で見ないでくれ。

「神谷、舞ちゃんつていつもああなのか？」

「学校とのギャップに驚いてんだり?」

まあ、あんなもんだ、だから、舞を狙うのは、やめとけ丸川」

「いや、気の強い女の子の方が俺は好みだぜーーー！」

「丸川Mだったのか。」

第29話 クモみつけ（後書き）

感想お待ちしています！

第30話 聖なる夜に（前書き）

現実逃避投稿第2弾！

祝30話です、読者の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。
これからもよろしくお願いします。

第30話 聖なる夜に

ああ、もう駄目だ眠い。
もう、11時だぜ、なんで皆そんなハイテンションを保つてられ
るんだ？

卷之三

話聞てる！？

愛は途中参加だから、体力が残ってるか知らんが俺はもう限界なんだよ。

そう言えば、今回で関本が年下好みと語ることが判明した。
愛が来た瞬間の関本の固まり具合と言つたら……思わず笑つてしまつた。

なんだあ？

眠いから短めにしろよ」

「北川さんつていい人だね」

「今さら、何言つてんだ？」

どうやら、今回のことでの北川に対する愛の敵意は消えたようだ。
どんな話をしたかは知らんが。

「ううん、なんでもない
それより、愛の作ったクッキー食べてくれた?」

「え？ あー、食べた、食べた」

「美味しかった？」

「……ああ」

「うひにい、ホントは食べてないよね？」

クツ、あんな、危険物を俺に食えと言つのか！？
これは余談だが舞に比べ愛の料理はひどい。
それを本人が認識してないだけに余計に質たいが悪い。

ちなみに、愛にすすめられて食べた、関本・桜井は体調を崩し今は再起不能となつて寝ている。

「今回の自信作なんだ、食べてよ！」

「腹いっぱいなんだ、だから、今度な」

「神谷君、食べてあげなよ。

愛ちゃんが一生懸命つくったんだよ？」

「北川さんもそう言つてるし、だから……ねー」

こんな、危険物を処理しろと言つのか！？

何が楽しくて危険物処理班の気持ちを体験しないといけないんだ！？

「食えや、神谷。

意外とうまいで」

なぜ、山中は平氣な顔で食べているんだ？

「淳さん、意外は余計だよ～」

そして、愛はいつの間に山中のこととアの名前で……しかも、淳さんって。

ほんと、今田、愛に向があつたんだわい……

俺が意識を取り戻し時には、山中たちは居なくなっていた。
どうやつたら、愛はあんな味を出せるのだろう……
味の大虐殺とはあることだな。

「調子はどう？」

まだ、家に残っていた舞が聞いてきた。

「頭が少し、クラクラする」

はい、と言つて彼女は水を一杯くれた。

それで喉を潤すと、俺はあることを思い出した。

「そういうや、お前さ、なんで俺の制服のシャツ着てたんだ？
おかげで、山中たちに殺されかけただろ」

着替えたんならまだしも、結局そのままのジャージで降つてくる
し。

「えつと……その……」

頬を紅潮させて、言葉につまる、その姿は俺の加虐心をくすぐつ
た。

「お前のせいで、俺は変な疑いをかけられて山中たちの信頼がガタ
落ちだ。あ

……じりや、責任とつてもひりしきないよな？」

「責任……？」

「聖夜に男女が誰もいない家に2人きりだぞ？
状況を把握してるのか？」

俺の言葉の意味を理解したのか、じりじりと壁際に後退する舞を
追い込み、顔の両横に手をついて逃げ道を塞いだ。

我ながらなかなかの悪役っぷりだ、はたから見たら完全に俺が舞
を襲つている。

「ま、待つて！」

田をせりしながら彼女が声を上げる。

「やだよ、舞が理由を説明してくれたら考えるけど~。」

「……たから」

「聞こえない」

「功の服……着てみたかったから」

……はい？

「意味がわからないんだけビ~。」

「つむさ~なあ！

功の匂いがどんなのか知りたくて、いつも着てる制服なり……その
……」

どんどん、弱くなる語勢。

はあ、ホントにいつは何考えてんだか。
でも、せつかくだからもうちょっと、いじめてみよ。

「だったら、いへりでも教えてやるつか?」「

「え?」

頬を少し紅潮させ、じつちを見たきれいな瞳に整った顔立ち。
キッとしたのは俺と君だけの秘密だ。
やべえ、超かわいい……

「功、それってどうゆうこと?」

俺は自分の出した言葉を少し後悔していた。
なぜなら俺の中では、2つの派閥に分かれ脳内会議が行われていた。

その2つは、もちろん『理性』と『本能』だ。

『もう、襲つてしまえよ。

今日は聖夜、明日も休み、条件はそろつてゐるぞ

しかし、いつのまにかお互いの気持ちが……

『ダメダメ、彼女でもないのにヤッてしまつて責任とれるの?』

そ、そりだよな。

『ちよつと、だけじやねえか。

ワンナイト・ラブつてやつだ。

それに、お前は自分のその衝動をいつまで抑えられるんだ?

性欲は人間のもつとも強い欲の一つだぞ?』

そうか、一夜限りか、その考えがあつたな。

『言い訳して逃げるのかい?

彼女には日頃の事と云い、昔の事といい、色々恩があるんじやないのかい?』

それもそうだな。

お楽しみは、置いとくか。

「なんでもない」

舞の脱出路を塞いでいた、手を上げて、背を向けた。
これ以上はマジで危ない。

「待つて」

服の袖をつかまれた。

「なんだ？」

まさか、襲つてほしいとか言つんじゃないだろ？

「そこまでマジじゃない！」

えつとね……クリスマスプレゼント欲しいな

「はあ？」

じやあ、明日でも買いたいに」「今、欲しい」は？

舞は「動かないでね」と言つて、距離を詰めてきた。

「功の味も知りたいと思つて……」

「おい、何言つて、んつ！」

「おい、ちよ、舌が！」

「はあ、『じつひつとも』

「何、考えてんだ？」

「ん？ 攻略する」はむづかしいと、積極的になれりと黙つて

「はあ、恥ずかしいなら、しなきゃここのは」

実際、言葉は冷静だが顔の様子は言葉とは真反対だ。
それに、舞が女の子らしことを囁つと、どいつも調子が狂つ。

「うわわわー。」

お、いつも調子に戻つたか。

「なに、こやこやしてんのー。」

「いや、舞は今みたいに怒つてゐるせつがりしこと思つてな

「けんか売つてゐるの？」

「アリヤッて、氣の強こといふのは昔からかわらねえな

「あなたは生意氣になつただけやない」

「根は変わつてないよ」

「やつか……じゃあ、前みたいにならないでね」

「たぶんな」

今年も、もうすぐ終わりか。

一年つて早いよな。

高校生活もこの一年のよつて、あつとこゝへ間に終わつてしまひの
だらうか？

……今はそんなことよりも、一瞬一瞬を頑張り。
これまでどうしようもない俺を支えてくれる、幼馴染のためにも。

第30話 聖なる夜に（後書き）

功の過去についてはいずれ本編で扱う予定です。
にしても、そろそろキャラ紹介でも作った方が良いですかね？

第31話 ウォークマン貸しても（前書き）

冬が明け、春の甲子園が終わった。

2年生に進級した、功たちの2度目の中夏が始まひつとしていた。

少しずつ変わりゆく、彼らを取り巻く環境と心。

高2編突入です。

第31話 ウォークマン貸しても

5月病とはよく言つたものだ。
去年の今頃に比べると、体がだるい。

「ふあ、ねみ」

「『めんこうに』！」

待つた？」

「いんや、來たばっかだ。

それより、早く行くぞ。

愛^{おまえ}が朝練に遅刻して、飛鳥^{あすか}の奴にぐちぐち言われるの俺なんだから
な

「福島先輩は良い人だよ？」

「はいはい、分かつた、分かつた」

高校生活2年目に突入。

愛は結局俺や舞と同じ、開成に入学した。

宣言通り、ソフト部に入り毎日練習に励んでいる。

「でもさあ、『めんこうに』って登校できるなんて夢みたいつ

「中学の時もしてたわ」

「2人きりつてのは、無かつたよ

今、俺は愛と部活の朝練に向かっている途中。

野球部は基本的に朝は自主練なので、参加自由だ。グラウンドの大部分をソフト部が使いつてのも、理由の一つ。公立校だから放課後なんかは、サッカーとかと共同だから、いつどこが使うかはキャプテン同士で決めているらしい。

「おっはよー！」

神谷は今日も愛と仲良く登校か？

「あ、おはよー」わいいます、福島先輩」

学校に着いた俺と舞に元気よくあいさつした女こそ、ソフト部2年生エース、福島 飛鳥、ポーテールに髪に運動部らしい、引きしまった身体。

顔は相当可愛いと思う、黙つていればの話だが。

「おいおい、神谷あ。

せつかくウチが話しかけてんのに、愛想無さ過ぎひんか？

それとも、ウチが美人やから照れてるんか？」

相変わらず、朝かよくしゃべるやつだ。

あつの口には、休みが無いのか？

「照れもないし、愛想が悪いのは昔からだ」

「ウチの」と、下の名前で読んだことによつた

「お前が呼べと言つたんだわ」

飛鳥と知り合つたのは、一ヶ月前。
愛の入部した後だつた。

- 「お前が神谷か？」
- クラスの隅にある、自分の席でいつも通りウォークマンを聞いてる時だつた。
- 声の主は、声が聞こえてない俺の机を叩き叫んでいた。
- 「おい、ウチの話を聞け！」
- 「なに？ 何か用？」
- 「！ イヤホン」と引っこ抜きやがつた。

「せつから呼んでんですけど？」

舞以上に氣の強そうな視線は俺にある気持ちを抱かせた。
めんどくさいやつに絡まれた

「ウチの名前は福島 飛鳥。

呼ぶ時は飛鳥でいいから

「はあ、で、何？」

「最近ソフト部に入った、愛が神谷と幼馴染つてホンマ?」

「ああ、ホントだけ?」
それがどうかした?「

「じゃあ、神谷!」

「愛のことばせるで!

「は? ロイッナーイッテンド?」

「え? ど、どう? 意味?」

「いいか、あの愛つてのはかなりの逸材や。
だから、お前が責任もって管理しいや。
じゃ、頼むでー」

「福島待て! なんで俺がそんなこと」「飛鳥でいいって、書ひてる
や」文句言ひのやうへ。」

「ええい、いちこむづかさいなあ！」

お前は黙つて愛をしつかり管理しとけ！
分かつた！？」

「はい、「了解です……」

やつべ、超ひねり……氣が強いくらいでとにかく……

「おーい、生きてるかー？」

「んあ？ ああ、バツチリだ」

「何、考えてたん？」

「ちよつとした回想だ」

変な妄想すんなつと、飛鳥は俺の頭を殴ってきた。
どうして、俺も周りの奴は変わった奴が多いんだらうが？

2年に進級した際、俺は丸川と同じクラスになった。舞・関本・桜井は理系だから同じクラス。んで、北川と山中が同じになった。

ちなみに俺のクラスには、オマケにこの女も。

「神谷あ、ウチにウォークマン貸してや

HR中に暇そうにする、飛鳥に話しかけられた。

「嫌だね、俺の昔から『愛用品だ』

厄介な女と知り合ってしまった、しかも、隣と言つダメ押し。悪夢だ、席替えが1年無いと言つから余計に絶望する。

「功、これ脇」はんね

「おひ、サンキュー」

昼休み、いつも通り舞が弁当を持ってきた。

「神谷あー、舞の愛妻弁当か?」

そして、飛鳥は相変わらざつた。

「飛鳥！　変なこと言わないでっ」

「ほー？　ウチにそんなこと言つていいんか？」

神谷あ、舞が話ある「黙つて！」　ふが…」

舞はもの凄い速度で飛鳥の口をふさいでしまった。
何やら弱みを握られているらしい。

「飛鳥、ちょっと話があるの」

「ウチい～？　堪忍してえな」

「ダメー！」

2人は廊下へと消えていった。

俺には関係ないし、ほつとくか。

2人を見送り、舞から渡された弁当のふたを開けた。

おお、相変わらずつまそくな弁当だ。

俺は箸でタコの形をしたワインナーを口に運んだ。

S.i.d.e 福島 飛鳥

「で、話って？」

「えっと、その……功の前であんまり変なこと言わないで」

「例えば、神谷のこと好きとか？」

「~~~~~！」

おお、面白いくらいに顔が赤くなつていぐ。
ホント面白いなあ、舞は。

積極的に行けとウチが指示して、クリスマスにキスまで行つたなら最後まで行けばよかつたのに……まあ、そのらが舞の可愛いところもあるんやけど。

「でも、神谷との距離はつまつてるん？」

「全然……とか、ここまでして氣づかないと男つているー？」

確かにいくら幼馴染でも、身の回りの世話をここまでするのは舞くらいやうな。

神谷も鈍すぎるわ。

「舞はスタイルもいいんやし、体で迫つてみたら？」

「でも…………やうやうのうへ……」

恥ずかしそうに声が地小さくなつていくあたり、舞はこの手の会話は苦手のよひやな。

「功からがにいつていうか……」

「はあ、何言つてんのや」

呆れて物も言えへんわ。

「いいか舞、欲しいものを奪うのに手段は選ぶな。
それに神谷の競争率は半端や無いで。
氣をつけてないと誰かにネコばばされる恐れだつてある」

「分かつてるよ、分かつてるナビやー」

普段一緒にいるから、キッカケがいまいちつかめないつて言つた
…それに、クラスも別になつちやたし

「うーん、何か言い手は無いもんか。

Side out

第32話 落ち込むな少年！

放課後、昨日が練習試合だった、野球部は今日はオフだった。朝練で身体をある程度動かしたから問題無しと想い、帰る準備をしている時だつた。

「神谷あ、もう帰るん？」

飛鳥が悪そうな笑みを浮かべ話しかけてきた。

「ああ、そうだけど、なんか用か？」

「一人で帰るん？」

「そーだよ、なんか文句あつか？」

「ウチと帰るつや」

……なんか、ややこしく話になつてきただぞ。

「神谷は好きな相手とかおらんの？」

「……いねえ」

「ほー、よつ取り見取りやからか？」

飛鳥に脅迫と詐う名の誘いを受けて、一緒に帰っているが、飛鳥はずつとしゃべっている。

「あのなあ、お前のロマシンガンか？
少しは静かにしろ」

「いいやん、せっかくやし神谷に色々聞くといい思つて」

それが、面倒なんだ。

そーいや、ここつ今田の練習はどうだったんだ？

「お前、今日の練習は？」

「ウチ、今日は病院行くから休み」

「へー、色々大変だな」

「肩は、今年の大会までつて言われた

飛鳥の声のトーンが暗くなつた。

「どうゆうじだ？」

「今の3年が引退するまでつてこと、新チームなつたら愛に投げてもらわないと。ウチはもう投げれないし……でも、ファーストぐらになら問題ないかな」

それで、俺に愛の管理を任せたのか。
こいつはこいつで色々覚えてるんだな。

「まあ、頑張れや」

「今のは、愛には内緒やからな」

そんなこと、俺に話してよかつたのか？

「あ、あれ」

飛鳥はそう呟くと突然足を止めて、車道を挟んで向いの歩道を指差した。

その、指先の向いには開成の制服を着た男と歩く舞の姿だった。

「舞ー？」

「あの男は確か……」

「知ってるのか？」

「うん、確か舞と同じクラスの村上やったかな？
バスケ部のイケメン。

でも、なんで舞とおるんやね？」

……なんでなんだろ？

その日の夜、舞から帰りが遅くなるからとメールがあった。
夕食は自分で何とかしろと言つ、意味だろ？
理由は尋ねなかつた、了解と一言だけ返した。

「うへに、この飯久しぶりに食べるね」

「味は知らないぞ」

「言つてくれれば愛が作つたのに」

絶対にやめてくれ。

しかし、村上だつけか、なんで舞と居たんだろ？
ついに、舞に彼氏か？

まあ、あいつも高2だもんな、外見は可愛いと思つし今まで彼氏

がいない方が不思議だつたしなあ。

「 じつに ？」

どうかしたの？」

「 ん？ なんでもないよ」

「 まいねえのこと？」

相変わらず鋭い。

だが、じこでボロをじぼすわけには……

「 まいねえ、最近クラスの男の子とよくメールしてゐみたい。」
この前は電話してたみたいだし

「 ジや、決定的か。

「 功、これ今日のお昼ね」

「おひ、サンキュー」

次の日の休み、いつも通り舞が弁当を持って来てくれた。
昨日のこと、村上とのことを聞くべきか俺は迷っていた。

「どうかした？」

「いや、なんでもない」

俺が首を突っ込むことでも無いな。
舞が言つ氣が無いなら聞く必要もない。

・・・・・
「わいと、部活でも行きますか」

放課後、HRが終わり背伸びをして、身体を伸ばしている俺の横
で飛鳥が不思議そうな顔をしていた。

「お前、ホンマに行く気なん？」

不思議な顔をしていた飛鳥はそう聞いて来た。

「なんかあつたつけ?」

「今日から文化祭の準備や」

あー、やうこや昨日そんなことじ、練習開始時間が遅れるとか山中が言つてたような氣もするな。

「じゃ、俺はサボリッヒ」と

全体練習が始まるとてもやれることはあるしな。

「ほー、ウチにたひつへ『か?』

なぜそつなる?

「落ち着け、俺は別にお前の敵になるつもりはない」

「なら、残れ」

誰か俺に自由をくれ。

「ちくしょー、なんで俺はパシられてんだ?」

何が職員室に必要な物があるから取つてこいだ。
飛鳥のやうひつ……俺をこき使いやがつて。

「それホント村上君?」

「うん、そうだよ。

それでさあ……」

職員室へと向かう俺の耳に入つてきた声は、聞きなれた声と始めて聞く男の声。

名前は知つているんだがな。

2人の楽しそうに会話する声を聞いた俺は、反射的に2人から見えない位置に身を隠した。

気づかれないようにやり過ごし、2人が去つたのを確認してから、身を出した。

俺の一連の行動を見られていることも気がつかず。

「神谷君……なにやつてんの?」

「北川!…違ひ、これには深い意味は無いー。」

「はい? そんなにてんぱる」と私した?「

確かに……俺は一人で何焦つてんだろ。

「神谷君も職員室？」

とつあえず頷く、俺。

「じゃあ、一緒に行こ！」

「おひ

・・・・・・・・・・・・・・・

「失礼しましたー」

「神谷君、はじめんね。

私の分まで持つても、もうちがやつて

「別にいいよ。

ついでだし」

と、言つてみたものの段ボール2つは前が見えん。しかも、結構重いし……一体何入つてんだ？

「…………ねえ、わざわざ廊下でなんで隠れてたの？」

「別になんでもないよ」

「ふーん、舞ちゃんのこと？」

「俺は顔に思つていることが書いてあるのか？」

「もし、やうだつて言つたら？」

「ちよつと、妬こちやうかな」

なんか、嫌な予感が。

「舞ちゃんが嫌いなわけじゃないよ。

でも、神谷君が他の娘のこと考えてるってのは、ちよつと嫌だな」

彼女は、廊下のガラス張りになつた窓の外を見て行つた。
外の景色は、茜色の夕空だった。

「北川……」

「私の個人的なわがままつて、ことは分かつてゐよ。
でもさ、『神鳥 哲也の妹』じゃなくて、私自身を見て欲しいなつて、どうしても思つちゃうんだよね」

何も言い返すことが出来なかつた。

北川の言ったことは、俺の心の核心をついた言葉だったからだ。

「舞ちゃんと神谷君のやり取りを見ると、羨ましいなって思つ。

神谷君は私に気を使って、いつも優しいもんね」

Side 北川 沙希

君は優しすぎるよ。

君の心の内側を覗いてみたい。

私には見せてくれない表情だって、きっとあるんだね。

「じめん……」

そんな、暗い顔しないで、君のそんな顔は見たくない。
でもね、見たくないと思う一方で、色々な表情を見たいと思つ、
私も居る。

「落ち込むな少年！」

「つー

いきなり背中叩くなつて」

そんな、驚いた表情も好きだよ。

……絶対振り向かせて見せるからね。

Side out

第33話 打ち返すぜ

S·i·d·e 加持 幸一

「いじか」

やつと、見つけた。

藤井の奴が行き成り来いと言つから来たのに、約束の居酒屋がこんな分かりにくい場所にあるとは。

「加持！ いっちだ、いっぢー！」

店内に入ると藤井が元気よく手を振つてきた。
元気なのは相変わらずだ。

「で、行き成り呼び出してなんだ？」

「少し、話がしたくなつてな」

「個人か？ それとも……」

「個人の方だよ。

実は俺の所に、神谷君たちが加持の正体を聞いて來た。
おまえ
去年の秋が終わつたころだ」

「なんで今更そんな」と言つんだ？」

「そんな話をあつたことを俺が忘れていたんだ」

本当にこいつは、昔から適當だ。

こんな奴が自分のチームの4番を打つていたと言つから笑えてしまつ。

「別に隠してゐつもりはないんだがな」

「お前の正体知つたら、驚く奴もいるじゃないか？
春の優勝投手そして、夏の準優勝投手つてな」

今となつては過去の栄光だな。

当時は、自分たちが最強だと思つていた。

4番の藤井に俺と久木のバッテリーは、甲子園でも圧倒的だった
しな。

俺の肘さえ、満足なものなら……最高の結果で終わることが出来
たのに。

「そう言えども、久木は元氣にしているか？」

俺の問ひに藤井は、胸から取り出した煙草を吹かしながら答えた。

「ああ、なんせあの神鳥君を獲得したんだから、今年の夏は頂点を
狙いに来るぞ。

センバツは準優勝だつたしな」

いつの間にか、神奈川の聖王高校になつちまつてるしな。
高校野球の監督をしていくことすら知らなかつたところだ。

「それで、今や近畿最強の公立校の呼び声高い、開成高校はどうな
んだ？」

今年の3月に行われた、春季近畿大会。

夏の予選のシード決めも兼ねた大会だった。

兵庫大会の優勝校として乗り込んだうちは、ベスト4と言つ成績を収めた。

主力を温存した私立相手にだが。

「報明も新井は出してこなかつたし、春のシード決めの大会は、強豪にとつてはただの遊びだ」

「それでも……だろ？」

実際、神谷君と山中君のバツテリーは、全国でも屈指だ。
後は層の厚さをえどうにかすれば、甲子園だつて夢じやない

「そんな、簡単じゃないことは俺たちが一番知つてるだろ？」

現役時代、俺たち館鳳高校のメンバーがそれほど苦労して、
舞台園にたどり着いたか……

あの頃の苦労を今の教え子たちに、押し付けるのは正直気が進ま
ない。

「俺は個人的に神谷君は、加持を超える逸材だと思っているが？」

「残念だが、同意見だ」

ほらな、と言つて藤井は笑みを浮かべた。
そして

「まあ、今日は野球のことなんか忘れて飲もうぜ」

そう言って、ビールを頼むのだった。

この男は、ただ飲みたかつただけつと、言つこと気付いた時は、俺はすでに酒豪のテリトリーに足を踏み入れていたらしい。

今日は、どうやら朝帰りになりそうだ。

Side out

「ストレート」

「はいよ」

投げたボールが高めに外れた。

山中が立ち上がってなんとかキャッチ。

「わりい、ちょっと抜けた」

「氣い抜けとるのちやうか?」

山中はさう言つて、ボールを返してきた。

「何やら考え事してるか知らんけど、夏まで時間がないんやぞ」

「分かつてゐるよ」

春の県大会で優勝した開成は当然ちょっとした注目校になつている。

春の甲子園ベスト4の報明を倒しての優勝だつたから尚更だつた。新井や主力は甲子園の疲労を考慮して、出場してなかつたがな。

「ほれ、開発中の変化球投げてみ。

ストレートとスライダーだけじゃ、夏は勝てんぞ」

「へいへい。

じゃ、行きまーす

山中がミットを構えるのを確認し、大きく振りかぶつた。

Side 関本 陽一

フリー・バッティングの待ち時間、俺はずつとブルペンで投球練習をしている神谷を見ていた。

バッティングケージでは、先輩が2か所で2人同時に練習している。

「関本さん?

ずっと、ブルペンの方を見てどうしたんですか?」

同じように順番を待っている、桜井が不思議そうな顔で尋ねてきた。

その横では、丸川が素振りを繰り返していた。

「いや、改めて神谷の奴は化け物だと思つてな

「そりや、今やプロ注目の2年生投手ですかね」

「それでも、神谷は異常だ。

他の投手とは違う何かを持つてる。

それくらい、桜井だつて感じんだろう?」

「僕がいつも後ろで守つていて思うのは恐怖と歡喜だけですよ。もし、敵だつたら絶対に勝てないと言つ恐怖と頼もしい味方だと言う歡喜です」

俺も桜井に同意見だ。

しかし、1つ疑問がある。

今のチームには神谷と同格と呼べる、山中と言つ選手がいる。

もし、そのような同格の選手が居なかつたら?
神谷は間違いなくチームから孤立する。
あいつの力と才能はそれほどのものだ。

「俺様なら敵になつたとしても、打ち返すぜ」

「丸川……盗む聞きとは、見損なつたぞ

「丸川さんは打てるんですか?」

「今の、神谷だつたらな」

丸川だって、中学時代は山中ぼじとは言わなくともそこそこ有名

な打者だし、高校に入つてからも数段進歩しているが……神谷はそれを上回る速度で成長している。

「癪だが、^{あこひ}神谷はどうも底がしれん。

それに、たまにだが中学の時にまともな指導を受けてたのどうか疑うプレーもするしな」

「いい意味で、めちゃくちゃに未完成だな」

「でも……神谷君つていつから野球を始めたんでしょうか？ 中3の最後だけ、居たような印象をうけますよね」

確かに、神谷の名前を知ったのは中3の最後の大会。もう少し早めに知つてもおかしくないと思つだが……

「神谷の過去か、面白そつだな」

丸川がそう呟いて悪そうな顔をしている。
この顔時は口クなことを思いつかない。

「舞ちゃんに聞くか？」

「俺は興味ないからバス」

「僕も神谷君が話さない以上、知るつもりもないんで」

丸川は1人だけ意見が食い違い、驚いた表情をしている。
貴様は斎藤と話がしたいだけだろうに。

お、ようやく俺たちの打つ番か。

1人佇む丸川を置いて、俺と桜井は打席に入つた。

第34話 ただの幼馴染だよ

「神谷あ～、早く終わらせー。

ウチが暑さで溶けるだ～～」

無視だ、自縛靈がいると思え、そこに人はいない。

「早くう～

無視だ……無視……

「舞の奴が村上に食べられるだ～～」

「ひみせえ！ 飛鳥おとねは俺の邪魔をしたいのか！」

「最後のが一番声小さいのに反応したな」

ちくしょ～、なんか負けた気分だ。

俺と飛鳥は現在2人で教室に放置プレイ。

うちの学校の文化祭は、2・3年は演劇すると決まっている。

俺と飛鳥は、くじでどの役も当たらなかつたため、裏方に回りクラスの皆が体育館で練習をしている間に劇で使う小道具でも作つて いると言つ訳なんだが……

「お前も少し働け」

「ジャンケンで負けた神谷が悪いんやろ」

ちくしょう、ジャンケンで負けると逆らえる気がしない。
ジャンケンの持つ不思議な魔力つてやつだな。

「そういえば、理系の方はヒロインが舞で主人公は村上でやる『じ
いで』

「あつそつ、興味無いね」

「あの2人付き合つてのかなあ？」

「どう思います？ 神谷君」

「舞が誰と付き合おうと俺には関係ないだろ」

「それ、本氣で言つてんの？」

飛鳥の口調が変わつた。

少し怒りを含んだ口調になつた。

「じつゆつ意味だ？」

「いい加減舞の気持ち、気づいたりいや

「なんの話だ？」

「舞は神谷の」と「福島せんぱーい」つち、なにい？」

廊下側の窓を開け、飛鳥を呼んだ声の主、愛が姿を現した。
何やら今日の練習についての話しみたいだった。

愛は最後に、差し入れと言つて、自販機に売られている紅茶を置

いていった。

「で、なんだっけ？」

「もうええわ。

ただなあ、神谷あ、今ままやつたらこのひが全てを無べすで」

本当に飛鳥は何句言つてんだ？

「何を意味のわからないこと言つてんだ？」

「もういい

そっぽ向く飛鳥をよそに、愛が持つてきた紅茶で喉を潤した。
なんで、俺は飛鳥に怒られるんだろうなあ……
機嫌悪くなるようなことしたかな？

「功、居るー？」

尊のヒロインが現れた。
廊下側のドアを開けて、愛と同じような形で入ってきた。
……やっぱ、姉妹だな。

「居るけど何？」

「今日や、文化祭の練習で遅くなるから、愛と一緒に先に帰つて

「へへへ」

「愛の」とみんなへじへね

「わかつて「神谷へ、ウチちよつと席は外すから」いきなり、どうした?」「

「大丈夫、すぐ帰つてくるから。
舞もちよつと待つといで」

じゃ、と言つて飛鳥は教室を出て行つた。

誰も居ない教室と廊下に教室の窓を挟み、俺と舞だけになつた。

身体の距離は数メートル。

でも、高2になつて俺と舞の距離は、もっと遠いよつな気がした。

舞に甘え過ぎたのかもしれない
最近そういうことが多くなつた。

周りに馴染めなくて、いつも一人で居た頃に舞に会わなければ今
の俺は居ないとと思うし、野球もしていなかつた。

今になつて、自分」とは自分でするべきだと思い始めていた。

「ねえ、何かしゃべつてよ」

彼女は、窓際に身を乗り出してそつ言つた。

「……最近さあ、功とあんまり話してないよね?」

「ん? ああ、文化祭とか色々忙しいしな」

「そうだね」

また、会話が途切れた。

間に沈黙と言ひ名の音のない時間が流れる。

その空氣を破つたのは、あの男だった。

「さことー、練習再開したいんだけど?」

そう言つて、舞の後ろから村上が現れた。

「いめん、すぐ行くね」

舞は忙しく教室へと戻つて言った。

ただ、村上は俺の方を見て廊下に立つている。

その目の色は明らかに好意を抱いているではない。

「君が神谷か?」

「そうだけど?」

「斎藤とは、付き合つてるの?」

「ただの幼馴染だよ」

「そうか」

口数は少なかつた。

ただ、その表情からは喜びが見て取れる。

「君はあんない子が近くに居て何とも思わないのか?」

「そーだな」

「……俺は、彼女のことが好きだよ。
人当たりも良くて、芯の強い彼女が」

なぜだろう、その時鈍器で殴られたような衝撃が頭を走った。
ドクンと心臓の鼓動が強く打ち付ける。

「あつそう、俺には関係ないね」

「どんな手を使ってでも彼女は手に入れて見せる。
たとえ、君と彼女の仲を引き裂くこともね」

村上は、そう言い残して去つて行つた。
誰も居なくなつたはずの廊下からは、聞き覚えのある男女の声だけが響いていた。

功と愛はもう帰ったかな？

すっかり周りは、暗いし早く帰ろう。

「齊藤、聞いてる？」

「え？ 『めん聞いてなかつた』

軽いため息を1つした後、村上君は再び口を開いた。

「送つて行こうか？」

「1人で大丈夫だよ。

それに、村上君家が反対「送つてくよ」「え……？」

彼の雰囲気に威圧された、有無を言わさないつと言つぱかりのオーラが出ている。

「えーっと……じゃあ、お願ひしようかな」

結局、あたしは雰囲気負けした。

誰も居ない夜道を村上君と並んで歩く。
歩き出しから黙るあたしを彼は不思議そつな顔で見ている。

「ビーしたの？」

「なんでもないよ」

「俺と話すの面白くない？」

「そんなことないよ」

村上君の問いにあたしがひたすらに答えた。
そんなことを繰り返していくうちに家に着いた。
功の部屋からは、愛と功の声が聞こえる。

「じゃあね、今日は送ってくれてありがとう」

「……待ってくれ」

呼び止められたことに疑問を抱きながら、再び村上君の方を向いた。

「斎藤は、神谷の」と好きなのか？」

「え？ こきなつどうしたの？」

「……まあ、いいや。」

ねえ、俺と付き合わない？」

「え……？」

「めんなさい、あたし村上君の『いつも通りの風に見れない

「わしちょっと、真剣に考えてよ。

齊藤に興味が無い神谷よつは、マジだとゆづる

言い返せなかつた。

功は、本当にあたしに興味なんて無いよつて思つてしまつたから。出合つた時は、功のことをこんなに好きなるなんて思わなかつた。臆病なあたしは、功に気持ちを伝えることも聞くことも出来ない。ならいつそ、今ままで……

「じゃあ、真剣に考えとこつてね。

返事はいつでもいいから」

さういちなく頷くことしか出来なかつた。
彼が去つたあと、夜空を見上げて咳いた。

「ねえ、功はあたしのことびつけてる……？」

第35話 そんな「」と言わないで

「んあ……あ、気持ちここよ、」「うひうひ……」

「……」

「ダメダメ、そこはダメえ……」

誤解されてるかもしれないが、断じてやましことはしていない。

「紛らわしい声出すな」

「だつて、耳弱い、ん！」

何故か俺は、現在愛の耳かきをしている。高1にでもなつたら、自分でしてほしい。つーか、俺には結構刺激が強いわけで……

「ほり、終わつたぞ」

「ふあーー」

……いつまで膝枕をさせる気だ？

「早くどけ」

「余韻で動けない」

「……」

「いたつ、急にどかないでよつ」

愛は、どこで道を踏み間違えたんだろうか……
高1にもなつて、最近妙に危ない発言が多い。
悪影響を及ぼしている友達でもいるのか？

「そう言えば、まいねえ遅いね。

まいねえのことだから夜道も大丈夫だろうけど」

「そりや、言えてるな。

あいつの強さは超越したものがあるからな」

その後も愛と他愛もない会話をしている時だった。
愛が外に舞と村上がいることに気がついた。

「あの人、最近まいねえと仲いい人だよね？
2人で何してるのかな？」

「さあな」

しばらく愛と2人で舞たちを見ていた。
表情は、見てとれるが会話は聞こえない。
何回か言葉を交わした後、舞がぎこちなく頷いた。

……まさか。

「まいねえ、告白OKしたんじやない？」

だよな、ついに舞に春が来たのか。

「うひー、びびるのー?」

まいねえが変な男とさき合つたよーーー!」

慌て過ぎだ。

あと、暴れないでくれ、振り回してくる拳がマジで危ない。

「どうも向む、舞の勝手だろ?..

俺たちが首を突っ込むことでもなーーー!」

「でもでも、せき合つたつひーとせ……その……色々しゃべり合つて
しょ……?」

愛の頭の中はどなつてこるんだらう。
話がぶつ飛び過ぎだ。

誰も居なくなつた部屋の天井を見つめていた。

暗い部屋は、不気味だけど心は落ち着いた。

1人の時の方が落ち着いているように思えるあたり、心を閉ざしていた頃の名残があるようだ。

「ン」

窓をノックする音が聞こえた。

この部屋の窓をノックできる人物は一人しかいない。

「こんな時間になんだ？」

鍵を外し窓を開けた。

そこには、見慣れた幼馴染の顔があった。

「そつち、行つてもいい？
話がしたくて」

「このままじやダメなの？」

「もういい、そつち行く」

相変わらず俺の意見は無視かい。

俺のテリトリーに侵入してきた幼馴染は何故か俺の隣、すなわちベッドに座った。

「何やつてんだ？」

「客人を地べたに座らせる気？」

「お前は客人じゃないだろ」

「うるさいな。」

「うー、相変わらずのボケイブローだな……」

Side 斎藤 舞

あたしの大好きな人は、腹を押されて深呼吸を繰り返している。
強く殴りすぎたかな？

「大丈夫？」

「まあな。

つーか、彼氏いるのに他の男の部屋入って大丈夫なのか？」

はい？ 何言つてるの？

「なんの話？」

「そつとき、玄関で村上に告られてOKしたんだろ？」

見られてたのか……しかも誤解してるし。

「保留したの、でも多分断るかな」

「なんで？」

付き合えば？」

功にそう言われて突然悲しくなった。

遠まわしにあたしのことをなんとも思っていないと言われたようだ。

いつの間にこんなに好きになってしまったんだろう?

功を独占したい、自分だけを見て欲しい。

年月を重ねるほどにその想いは強くなつていぐ。

嫌な女だとつづく、づく思つ。

功が他人と関わることが苦手なことをどこかで喜んでいた。

誰も知らない、功を知つてゐるのは自分だけと少しだけ喜んでいた。

でも、高校生になつて、君はあたしの知らないことじりでどんどん成長していく。

いつか君の隣にはあたしじゃない誰かが立つてゐるのかな?
近くて遠く、そして脆い『幼馴染と言ひ距離感』

「あと…… もう、俺のこと気にかけてくれなくていいよ」

「え……」

下をうつむき彼は言つた。

「俺さ、舞に頼り過ぎだなつて思つんだ。

それに「……ないで」舞?」

「そんなこと言わないで!」

立ちあがつて、功を見下ろしながら言つた。

彼は、依然として下を向いている。

「でも、これ以上舞に負担をかけさせるわけにはいかない。

俺自身がもつとしつかりしないと

聞きたくない、お願いだからそれ以上言わないで……

「あたしが居なくなつたら功が困るよ?
朝だつて遅刻するかもしないし、ご飯だつて1人だつたら大変で
しょ?」

部活で疲れて帰つて来た後に全部してたら……」

いつか壊れちゃうよ。

「大丈夫だ。

舞がいなくとも俺はもうやつていける。
昔とは違う、野球部の奴らだつている」

功の新しい場所にあたしの場所は無いんだね。

「そつか……そうだよね!」

精一杯明るく、虚勢を張つて言つた。

「功だつて、もう高2だもんね。

あたしなんかが居なくたつて……大丈夫だよね……」

お願い、必要だと言つて、傍に居てもいいと言つて。

「ああ、大丈夫だ」

あたしの中で何かが壊れた。
この場に居たくない。

「そっか……あたしもひ寝るね、おやすみ……」

功に別れを告げてあたしは部屋に帰つた。
何かが壊れたまま……

Side out

第36話 ダメです！

文化祭が終わり、梅雨が明けた。

高校生活一度目の夏、それは俺にとって野球部として迎える初めての夏。

長い甲子園への道のりの始まりだ。

「ちょっと、神谷君動かないで」

俺の右腕のアイシングをしている北川は、そう言って俺を注意した。

「すいません」

「初戦」「ホールド勝ちだからって、ちゃんとケアしないとダメでしょう？」
神谷君の右腕に開成の甲子園かかってるんだから

「以後気をつけます」

「……ちゃんと聞きなさい」

やべえ、北川の後ろに般若のようなものが見える……体中汗でびっしょりだ、

「はい、終わり！」

明日の投球練習は控えること、分かった？

「軽くならいいだろ？」

「ダメです！」

ぐう……田を盗んでしてやる。

「どうせ練習は私が付きっきりなんだから無理だよ」

大会の1週間前くらいに北川は、加持先生に俺の日付役を頼まれた。

なんでも、肝心のエースが無理のし過ぎで故障したらこまるとか。おかげで何の不安も無く大会には望めたが……

「もつと、投げこまないとの先不安だつて」

投げ込み不足は否めない。

勝ち進む連投になれば、肩を酷使するから練習からの無駄の消耗を避けるってのは理解できるんだけどな。

「男だつたらつべべ言わない。

ほら、行くよ。

皆バスで待ってるし

「へーい」

北川は、荷物を持って元気よく立ちあがつた。

この夏、俺はどうしても北川を神鳥と再会させてやりたかった。

甲子園に出場できればそれが叶うと思つていた。

神鳥の居る聖王高校は、春のセンバツで準優勝したし、激戦区の神奈川とは言え春夏の連続出場は揺るがないだろう。

問題あるとしたら開成の方だな。

・・・・・
「で、今日の反省は？」

「あー、初回、先頭に四球ファボールだしたとか？」

「正解や」

バスの中で隣に座る、山中と今日の試合の反省会。
歩きで帰る時は、近くの店、バスを使っての遠征の時帰りのバス
の中。

その日のうちに振り替えるつてのは、どちらでも変わらない。

「初戦やから緊張したんは分かるが、力み過ぎや。
結果は文句なしやけどな」

今日の試合結果は、12対0で開成の5回ノールド勝ち。

俺は、5回を投げて被安打1の無失点。

四球は3つほどだしたがな。

「まあ、これからだつて」

「足元すくわれるのだけは勘弁やで」

「分かつてゐつて」

反省会を終えて俺は、帽子を深くかぶり直した。
耳に愛用のウォークマンにつないだイヤホンをつけて、重い目蓋
を閉じた。

Side 山中 淳

「山中君、これ昨日のスコアブックと頼まれてた次の対戦相手のデータ

「すまんな」

北川からスコアブックと一緒にノートを受け取った。
データ集と書かれたノートには対戦校の特徴や選手のことまで細かく書いてある。

「油断は禁物だけど、今のウチの力なら問題ないと思つよ」

「せやな」

このノートのデータをもとにワイヤーは、いつも配球の組み立てを考える。

神谷は、感覚で野球するタイプやからなあ……このノートを見せても覚えへんしな。

ワイヤーがデータを頭に叩き込むしかないんやけど……

「もうちゅうい、キャッチャーの苦労を理解してほしいわ」

「頑張れ少年!」

「ん? どこ行くんや?」

「エースの栄養管理」

「はいはい、行ってらっしゃい」

そういうや、もつ飯か。
ワイヤーも何か食べるかな。

「丸川は、今日何食べんの?」

「俺様は、うどんだな」

昼休み、俺は丸川と2人で食堂に来ていた。

「ふーん、じゃあ俺はかつ丼でも食べるか」

「北川に野菜食えって、言われたんじゃなかつたのか?」

「大丈夫だろ、ばれなきや 「何が大丈夫だつて?」 ……」

後ろを振り向かな、今振り向いたら取り返しのつかないことになるぞ。

「その右手に持つた、カツ丼との引換券を渡しなさい」

「はい……」

俺のカツ丼が……

・ · · · · · · ·

「バランス良く食べないとダメって言つてるでしょ？」

俺は、昼飯を食べならが北川に説教をくらつてゐる。
隣には美味しそうにうどんを食べる丸川、そして、美味しそうに
食べているのはもう一人。

「神谷あ、カツ丼御馳走さん。

今度なんかおこつたるわ」

俺の買つたカツ丼をたいらげた飛鳥。

北川は弁当持参につき、俺のカツ丼は飛鳥の胃袋へ。
食べたかつたカツ丼……

「飛鳥の口約束は期待しないでおくよ」

「つっさいわ。

人の善意は黙つて受け取れ」

「はいはい」

「で、私の話は聞いてた？」

「も、もちろん、これからは気をつけます」

舞に弁当を用意してもらわなくなつて、俺の食事バランスは偏つ
た……らしい。

せめて、学校でとる昼飯くらいはバランスよく食べるとの加持先

生のお言葉。

「舞ちゃんが弁当作ってくれてた方が楽だったのに」

北川がため息交じりに言った。

「まあ、舞の奴も自分のことでも忙しいからな」

自分から舞の援助を断つたことは誰にも言つていない。

「……神谷あ、次の数学当たるけビウチのノート[『セカンド』]の？」

「マジか！？」

丸川、わりいけど俺先教室行くわ

「そのノート後で俺様にも見せろよ」

「分かつてゐる」

「ほー、ノート」

「サンキュー」

ホンマ、神谷のノートを[写]す速度は天下一品やな。
右手つかれへんのかな？

「神谷、最近舞と話してる？」

「ん？ 最近はあんましだな。

野球中心に今は特に生活動いてるし」

最近……ね、舞がウチに泣きながら電話かけてきたのは一ヶ月前
なんですけど？

「舞とケンカもしたん？」

「別に何もねーよ。

それに幼馴染つてだけで全部把握してるわけじゃないし

それは神谷が分かるうとしないからやん。

舞は、諦めるつて言つてたけど結局村上と付き合つたんかな？
一緒に居るのはよく見かけるけど、噂は何も耳にしないひんな。

「飛鳥？ ビッグしたか？」

「なあ、神谷つて舞のことビッグしてたの？」

「これなりなんだよ?」

「いじから、答えて」

「どうして、言われてもなあ。

ただの幼馴染だろ?」

向こうだつてそう思つてゐつて」

なるほど、舞が諦めるつて言つてた意味が分かつたわ。

「神谷……舞に身の回りの世話を断つた?」

「んー、まあな」

やつぱりな、それで舞は自分なんて必要ないつて言つてたんか。

「もし、舞が他の男と付き合つても、お前は何も思わんの?」

「俺が口出す」とじやないだろ」

やつなあ。

「ただ……いい気はしないのは確かだ」

……それを舞に言つたれよ。

S i d e o u t

「つーか、邪魔すんな。

俺は今写すのに必死なんだよ

たく、ホント飛鳥は邪魔ばっかしやがる。
舞が他の男と付き合つたらか……そんなのいくらでもあり得るだ
ろ。

でも、深く考えてたこと無かつたな。

隣に居るがいつの間に当然になつてしまつたのかもしれない。
俺にみたいなどうしようもない奴には、勿体無いのに。

「今の発言、舞に言つたれよ」

「はあ！？」

嫌だね、舞が好きなやつと付き合つんだから、俺が邪魔してビうす
んだよ」

「へタレ」

ほつとけ。

「座れ、授業始めるぞー」

先生来ちまつたじやねえか！
まだ、半分も写してねえのにー

ちくしょつ、飛鳥のやつ……覚えてるよ。

第37話 再会は波乱と共に

「シコーネー」

「ぐつー」

センターに抜けようかと言つ痛烈な当たりを関本がダイビングキヤツチ。

セカンドにトスでボールを渡し、試合終了。
ツーアウト満塁のピンチを脱し、3対0で逃げ切りベスト16入りを決めた。

「ひやひやせんなんや」

「勝つたんだからいいだろ」

まったく、山中は心配性なんだから。
中学時代はあんまし、あれこれ言われなかつたのになあ。
俺がド素人つて言うのもあつたんだが。

「なあ、中学の時はどんなキャッチャーと組んでたん?」

山中が帰りのバスで聞いて来た。

「そーだな、山中と違つて細かい」とは氣にしない奴とだな。
ただし……

「ただし?」

「俺はどいつもこの野球観が好きになれなかつた」

俺に細かいことを言つてこなかつたのは、俺を嫌つてからかな？でも、俺があいつのことあんまり好きじやないからな。

「仲悪かつたんか？」

「さあ？ 学校も違うつかたし、面と向かつて話したことはあんまり無かつたな」

「そいつの娘前は？」

「一ノ瀬 春斗」

「藤井さん、彼は一体何者ですか？」

県予選の4回戦、シード校である、神戸西が敗れた。春の県大会でもベスト8に入るほど強豪だ。それを破つたのは1人の2年生投手。

「津佐高校の2年生、一ノ瀬か……あんな投手どこにも居なかつたはず……今年の夏から投手に転向か？」

「調べとります」

相変わらず飯村が仕事が早いなあ。
俺も少しば見習わないと。

しかし……神戸西のHースの負傷退場はアクシデントか、それとも……

Side out

Side 中 淳

「神戸西が負けたあ！？」

「うん、スコアは2対1で津佐高校の2番手の投手が好投したって練習の休憩中に北川はそう言つて、再抽選が終わったトーナメント表を渡してくれた。

どいやねん、津佐高校つて……
しかも、神戸西のエースはプロ注目の投手のはず。
春の県大会で唯一、神谷と互角の投手戦を演じた好投手やったの
に。

「エースの人は打たれたんか？」

「ううん、3回に負傷退場で試合にはほとんど投げたてない」

「運が無かつたんか……といひで津佐の2番手投手の名前は？」

「一ノ瀬つて2年生。

試合のスタートはキャッチャーで、接戦になつた試合は全部リリー
フで投げてるみたい」

「北川……それつてホントか？」

近くで黙つて話を聞いていた神谷が声をあげた。

S i d e o u t

「うん、間違いないよ。

知り合い？」

「まあ、少しな

エースを負傷退場させたのか。

相変わらず勝つためには手段を選ばない奴だな。

「神谷あ、昔の仲間との再会に浸るのはええけど。
津佐と当たるのは準々決勝やぞ、次の試合に集中せえよ」

「わーつてるよ。
ちょっと、聞いただけ」

「なら、投球練習再開すんで。
水分は補給したか？」

「バツチリ」

「にしても、ホント暑いなあ。
いや、明後日の試合も猛暑日だな。」

「ボール！ フアボール！」

「この試合5個目の四球。」

タイムをとりて、山中がマウンドまで来た。

「一昨日まで晴れてたのに、なんで今日に限って雨が降るんだ?」

「一時的な雨や、それよりも次が4番やで、しつかり低めに集めんと火傷するで」

ベスト8入りを目指す試合は、現在2対1で開成が勝ってる。相手の8回の攻撃時に天気が崩れた。

連続フォアボールでシーアウト・一塁。

長打が出れば逆転とこつ場面で、先ほどの打席で長打を打たれた4番を迎えた。

「スライダーはまだ打たれて無いだろ?」

「暴投だけは勘弁せえよ」

「任じとカ」

審判の合図で山中のサインに頷く。

ストレート2球で相手の4番を追い込んだ。

山中の出したスライダーのサインに少やく頷いた。

これで決めると言わんばかりに山中は軽く一回ミットを叩いてから、ミットを構えた。

一塁ランナーに目で牽制を送り、セーフティポジションから足をあげた。

「はあー、疲れた」

勝った後の取材は、疲れる。
柄じゃないだけに余計にだ。

「神谷君！ お疲れ様」

北川か、待つてくれたのか。

「神谷あー、トイレ行こうや」

山中よ待つててくれたのはありがたいが、先に何か飲ませてくれ
……

「待つて、先に何か飲み物……北川、ちょっと取つて来てくれな
い？」

「え？」

「そこに自販機あるよ？」

「頼む」

「分かった、待つてね」

神谷の奴は何考えてんねん。

北川をパシリに使つて……

「よひ、久しぶりだな」

つ？

神谷は誰に向かつて言つてるんや？

「春斗」

「やあ、会えて死ぬほど嬉しいよ

春斗って、まさか」「いつが一ノ瀬か！？
身長は、一七〇くらいでそんな高くない……けどなんや、この何
とも言えない圧迫感は。

「僕が偵察に来てたのは予想したのかい？」

「ああ、お前は昔から偵察は手を抜かないからな。
それに、前の試合エースの人何しやがつた？」

険悪なムードやな。

ホンマに元チームメートか？

「ハハハ！」

相変わらず、まじめ過ぎて困るよ、功は

「いいつ……まさか。

「中3の時だつて、僕の言つとおりに」とナゴ神鳥

哲也は、壊れ

たままだつたのに

「……ダメだ。

どいつも、お前とは考え方が合わないみたいだな

「まあいい。

今の功は、僕の敵じゃないよ。

そこに居るキャッチャーでは、功の力は3割減つてとこだからね

言つてくれるやんけ。

黙つて聞くほどワイは、大人しくないで。

「待てや。

考え方が合わないキャッチャーよりも、ワイが神谷と相性が悪いと
でも言う気か？

一ノ瀬、お前よりも少なくともワイは「そうだね、全然ダメだ」っ
！」

「山中だったな、君は功の本質を理解していなのを」

「本質やと？」

「やうだ。

まあ、昔と雰囲気も違つし分からなくて仕方ないと思つけどね。
じゃあ……僕はこれで……功、準々決勝で会おう

右腕あげ、一ノ瀬 春斗は去つて行つた。

「神谷あ、あいつの言つてた本質つて何のことや？」

「……さあな。

俺に聞くなよ」

本質を理解していないのか……それに、神鳥が壊れたままやつたつて。

まさか、あの事故は……

「神谷君、頼まれてた物……あれ?
2人してどうしたの?」

北川が、場を外してたのは幸いやつたな。

S i d e o u t

「なんでもないよ。
飲み物ありがとう」

「え? うん」

あの夏の事故は、本当に春斗が仕組んだらうか?
そう、信じたくない。
でも、確かめる勇気もない。
ただ、俺に出来るのは、今度こそ春斗を止めるだけだ。

第38話 神谷 功です

Side 山中 淳

「山中君、話つてなあに?」

補習が終わり練習までの時間にワイは、齊藤を呼び出した。

「一ノ瀬 春斗って、知つとる?」

そいつが次の相手なんや

「一ノ瀬君か……知つてるよ。

あたしが、彼に功を野球始めるように頼んだし」

「あの一人の間には、何があつたんや?」

「何も無いよ。

むしろ問題あつたのは、功の方

どうゆうことや?

さつぱり意味が分からん。

神谷に問題があるやと?」

Side out

Side 齊藤 舞

山中君はさつぱりつて感じの顔をしてる。
仕方ないよね、誰も分からなくて。

功が中学で野球を始めるまで、内向的だったことなんて。

「功の過去知りたい?」

あたしは、何を言つてゐるんだろう?……あたしだけが知つてゐる功で置いておくつもりだつたのに。

……違うかな、誰かに聞いて欲しいんだ、あたしが功のことをどうだけ知つてるか。

血腫したいだけなんだ……

「ああ、教えてくれ」

少しだけあたしの血腫に付き合つてね。

「あたしと功が出会つたのは……」

「まいーー！」

「ちょっと、来なさい」

小3の5月。
部屋で宿題をしていたあたしは、母の声を聞いて玄関へと向かつた。

「なあーー!」?

「新しく隣に引っ越してきた、神谷さんよ」

「どうも、神谷です」

キレイな人だ、それが功の母に対する最初の印象だった。

「ほら、功。
あこせつしなさい、あなたと同い年だって」

「……どうも」

そのキレイな女性の息子は、下を向いてそう叫んだ。
暗い奴だ、あたしとは絶対に合わないタイプ、それがその男の子の最初の印象だ。

「あたし、舞。
よろしくねー！」

同じ年の男の子と言ひっこりで、期待を込めて手をだした。
もちろん、握手するつもりで。

「……」

相手の男の子は、無言で去つて行つた。

……何なのあいつ！

「（）めんなさい、あの子、少し人付き合いが苦手で」

神谷君の家は、親の転勤が多いせいで転校も多く友達が出来にく
いらしい。

仲良くしてやつてと、おばさんに頼まれたけど正直あたしつて暗
い奴嫌いなんだよね。

やつぱり、男の子つて頼りがいがあつて逞しくないと！

「神谷 功です……」

次の日の学校。

転校生の神谷君は、あたしと同じクラスになつた。
名前を名乗つただけの自己紹介に周りは少し騒がしい。

「じゃあ、神谷君は斎藤さんの隣の席使つて」

あたしの隣！？

なんでも、こんな暗い奴……

「……」

また、無言……昨日会ったんだから何かしゃべりなさいよね！
イライラする、教科書も出さずに窓際の席だからって、外ばつか
り見て。

「神谷君、教科書は？」

思い切って聞いてみた。

「……」

一瞬こいつを向いたけど、すぐにまた外を眺め始めた。
何こいつ？ ケンカ売つてんの？

イライラを押さえて一時間目の授業を受けた。

休み時間、転校生恒例の質問攻めが始まった。

皆色々、質問しているけど神谷君は何も答えず教室を出て行つた。
皆驚いている、一部の女の子はかつこいつとか言つてゐるけど、何
考えてんだが……

次の日から神谷君は、ウォークマンで音楽を聞く毎日。校則違反だけどあまりに堂々としていて皆何も言わない。いつも一人で居る彼を周りは自然と避けて行つた。

学年が上がるにつれて、学校に来る回数が減少していった。
6年にもなれば来てる方が少ないかもしない。

あたしの部屋から見える、彼の部屋にはいつもカーテンがしてあつた。

暗いところが嫌いだけど、何も知らないことも事実だった。

だから、先生にたまっていたプリントを渡すように頼まれた時、いつもはポストに入れておくだけなのに興味本位でインター ホンを押してみた。

「……無反応かい」

ドアにも鍵がかかってんだろうな……開いてるし。

「おじゃましまーす……神谷君いるー？」

誰も居ないリビングは、不気味な雰囲気を醸し出している。

「ちょっと……不気味すぎ「なに?」うわあー」

行き成り出てこないでよー

2階に居るなら返事しなさいよー

「そんなに驚く?」

「もつと、存在感を出しなさいー。」

あれ？ 神谷君普通に話してるじゃん。

「これ、頼まれたプリント。

学校来いって先生怒つてたよ」

「どうも……」

相変わらずの無表情で彼は、プリントを受け取る。

「ねえ、いつも家で1人なの？」

「まあね……昔から、だから慣れてる」

妙な親近感がわいた。

あたしの家もパパがすでに他界していて、ママが仕事で遅いから
愛と2人きりつてことが多い。

神谷君も親が居ないことが多いんだ。

「今度、遊びに來てもいい？」

「勝手にしなよ」

「これって、OKつてことだよね？」

今日ドッキリやらされた仕返しに、今度隣接してゐる窓から入つてみ
ようかな。

「さじとー、今度皆で野球するんだけど来ない？」

クラスの男の子に誘われた。

あたしは、割と運動神経が良い方だし身体を動かすのは、好きだからよく参加してる

昔からやつてゐる相手のお陰つてこともあるけど。

「いいよ、今回も参加で」

「これで8人だな……齊藤あと一人誰か連れて来てくれない？妹でもいいからさ」

「……いいよ。

男の子連れてく」

「は？ クラスの男子はほとんど当たったはずだぞ？」

「任しことー」

・・・・・

・・・・・
「神谷君～」

「ひーーー。」

面白いなあ、窓から入った時の驚くリアクションがたまらない。

「斎藤、毎度驚かさないでくれ」

そう言いながら、窓の鍵はいつも開けてくれるね。

「明日暇でしょ？」

「ちょっと、付き合つて」

「……却下だ」

何言つても、断るのは織り込み済み。

力づくで連れていくのが神谷君を連れだす唯一の方法。

「黙つてついて来てー！」

「めひやへひやな……」

君は、内向的で人と関わらないけどホントは優しくて、良い人。
あたしと話してるときぐらいの感じで話せばいいのに。

あたしはこの時、この誘いが彼の人生を大きく左右するなんて知るよしもなかつた。

第39話 甲子園（前書き）

前回に続き、舞視点でスタートです。

第39話 甲子園

「神谷君、端っこに居ないでこいつち来なよ」

ベンチの隅の方に一人座る、彼に話しかけた。

「なんで、俺がピッチャーしなきゃいけないんだ？」

「投げるだけだから、気楽でしょ？」

キヤツチャーは、あたしだから楽に投げなつて

どんなボール投げるんだろう？

スポーツしてるとこ見たことないし、楽しみだな。

「ねえ、あいつ何者なの？」

打席に入った、相手バッターがそう聞いて来た。
名前は、確か一ノ瀬君。

このあたりじゃ有名な野球少年。

「ただの同級生だよ」

「小学生の投げるボールじゃないっしょ」

一ノ瀬君が驚くのも無理はない。

神谷君の投げるボールが、ここまで速いなんてだれも予想してなかつたはずだし。

ヒツドリ二郎か、ボールが前に飛ばない。

試合は、結局神谷君の活躍で、圧勝に終わった。

「ねえ、中学行つたら野球しなよ」

帰り道、2人乗りした自転車の後ろで、彼の身体につかりながら言つてみた。

「めんどくさい。

あと、重心ずれるから動くな

「こんな感じ?」

「つーーー。」

〔冗談半分に身体を揺らしたら、急ブレーキをかけられた。

「……歩いて帰るや」

神谷君は、相変わらずの無表情でそう言った。

途中で「疲れた」とわがままを言つて、河川敷で休憩した。

神谷君は、何も言わず川を見ている。

あたしは、座りながら彼の後姿を見ていた。

「野球やりなよ」

「しつけえな。

第一、お前は俺に野球をやりして何が目的だ？」

「甲子園」

それは、今は亡き父が高校時代目指していた場所。

女の子では、立つこと出来ない場所。

そして、限られた一握りの球児だけがたどり着ける場所。

神谷君ならもしかしたら……今日のピッチングを見てそう思った。

「甲子園で投げる神谷君、見てみたい」

「……どうして、俺にそこまで関わるんだ？」

振り向いて、彼はそう問う。

「なんでだろうね？」

「物好きなやつだ……」

その時、あたしは、初めて彼の笑みを見た。

中学に進級してからは、彼とはクラスも違うし忙しさで話す機会も減つていった。

学校には、一応来ていた。

でも、たまに彼の姿を見かけてもいつも1人だった。

「齊藤さん！ 僕と付き合つて下わこ」

「じゃあ、あたし誰とも付き合つ氣ないんだ」

中学になつて、告白されたことが多くなつた。

何これ？ モテ期つてやつ？

付き合つながら、あたしが甘えることのできる男の子がいいなあ。

空手をしてるせいか、男子相手でもケンカは負けない。

この前も学年で偉そつとしてる、男がしつこく絡んできたので実

力を行使したばかり。

パパが居なくなつて、愛を守りたくて始めた空手……今では、強くなりすぎたと思つ。

実は、誰かに守つてもらう状況なんか憧れてたり……まあ、あり得ないんだけどね。

「あれ？ 神谷君今帰り？」

生徒が誰も居なくなつた、下駄箱で彼に会つた。

「…………ん？」

なんだ、お前か

入学して、10か月振りの会話だった。

「なんだとは何よ。

せつかくだし一緒に帰ろ」

「勝手にじる……」

彼は、下靴に履き替えて出て行つた。
急いで上靴を履き替えて彼の後を追つた。

「こつもの時間に帰つてゐるの？」

「……まあな」

「やう言へば、2組の上原さん」「皆田それたんだつて？」

同級生の中でも異彩を放つ、神谷君に惹かれる女子は多い。
顔は、結構カッコいいしね。

「情報のお早いことで」

「なんで、断つたの？」

「別になんだつて「お前が、齊藤 舞か？」ん？」

変な男2人に絡まれた。

こんな明らかに悪そうな男の子との知り合いは、居ないんだな
な。

「あたしがそうだけど何か？」

「うちの狩野を可愛がってくれたら嬉しいじゃねえか」

狩野……？

ああ、あたしが実力行使を使ったあの男か。

「女の分際で生意氣なんだよ。」

女だからって、なめないでくれる?

「おー、斎藤。
どうする気だ?」

「神谷君は、見とくだけにこよ

あたしが負けるわけないし。

・・・・・

「尊は、本当だったのか……」

驚く神谷君の前に、あたしが倒した不良×2。

「ザーモリ付いたしかえろ

「おお、おつかれ

神谷君が少し引いてるのは、気のせいかな？

第39話 甲子園（後書き）

8月中に完結させます。

第40話 やるよ

「舞ちゃん、狩野君の仲間殴り飛ばしたってホント?」

昼休み、同じ班の子に聞かれた。

「うん、ホントだよ」

「なんでも、仲間を集めてるって噂だよ。
気をつけてね」

「大丈夫、大丈夫。
余裕だつて」

数を集めなきゃ、何も出来ない男に負けるわけなんて無いし。

「ん?
あれは……」

廊下から神谷君の様子を覗いた時だった。

彼は、珍しく誰かとしゃべっていた。

……狩野君じゃん。

「なに話してんだろ?」

何やら、険悪なムードって言つか、狩野君が一方的に熱くなつて
る気がする。
あたしがしばらく眺めててると、狩野君が何やら吐き捨てて去つ
ていった。

「狩野君と何話してたの?」

1人になつて、再びウォークマンを聞いたとした神谷君に聞いた。

「別にたいしたことじゃねーよ」

「あ!

「これ売り切れてたカレーパン!」

食べたかったんだよね。

「やる気よ」

「ホント!?

食べたかった、カレーパンを貰い機嫌よく自分の教室へと帰つた。
あ……何話してたか聞くの忘れてた、まあ、いつか。

さて、どうしたもんか。

狩野の奴が、齊藤への反撃を仲間を集めて田論んでいることを伝えるべきか、どうか……

「俺には、関係ないつか……」

本来なら伝えるべきことを自分は、関係無いと言い聞かせ逃げ込む自分が嫌になる。

親の転勤が多いから、昔から転校を繰り返してきた。

いつからだろ？……他人と関わることを避けて一人で居るよくなつたのは。

他人との距離感が分からぬいけどそれでいいと思ってた。

齊藤に誘われて、皆で野球をするまでは……あんな風に皆で何かするなんて今までの俺の人生では、無かつたことだ。

残念ながら、楽しいと思つてしまつた、また野球がしたいと思つてしまつた。

そんなことを放課後になるまで、外を眺めながら考えていた。

「帰るか」

いつもより、少し早い帰途についた。

Side out

「ん……？」

あたしが、目を覚ますとそこはうす暗い倉庫のよつな場所。後頭部が痛い、ずいぶんと手荒な方法で連れてこられたもんだ。

「目が覚めたか？」

倉庫に響く、低い男の声。

顔をあげるとそこには、数十人の男と1人だけ体格が大きい男。その体格の大きい男がリーダーかな？

「あたし1人つぶすのに人数多くない？」

「クック、中学生の小娘のくせに肝が据わっているじゃないか」

「どーでもいいんだけどさ、あたしの手足縛らなくてもいいの？ 後悔するよ」

「大丈夫だよ、お前は今から俺と一対サシ一で勝負してもらひからな」

そう言って、リーダーの男は、前に出てきた。

体格差は明らかだつたけど、スピードならあたしの方が上だと思うし問題ない。

「最初は、小娘から来な。
一応、女なんだしな」

「じゃ、遠慮なく」

後悔してもしらないからね！

Side 神谷 功

部屋から見える、齊藤の部屋の電気は以前暗いままでやかとは、思つんだけどな。

「齊藤なら、大丈夫だと思つだが……ん？」

耳に響くインター ホンの音。

誰だろ？

「お前は……」

ドアを開けてそこに居たのは、齊藤の妹の愛。

「どうかした？」

「……」

無言ひて、しかもこの子泣いてね？

「まいねえが……」

「齊藤の奴がどうかしたのか？」

「知らない男子に連れて行かれちゃつた……」

つ！

マジか、不意打ちとかせこくないか？
いや、ケンカならなんでもありか。

「愛ちゃん、場所分かる？」

「うん……」

「…………あそこか、俺が連れて帰るから、俺の家で良い子にして待つてて」

一言俺が言つておけば、こんなことにはならなかつたかも知れな
いのに。

責任と後悔を胸に家を飛び出した。

Side out

「はあ……はあ……」

「どうした、もう終わりか？」

この男、こんなに強いなんて……足を痛めてからもなんとか避け
ていたけど、もう限界……
どうしよ、助けなんて来ない、この圧倒的不利な状況をどう切り

抜ければ……

「動きが鈍いぜー。」

「うつー。」

男の拳が腹にめり込んだ。

一瞬宙に浮くほど衝撃、その場にうずくまり肺に酸素を送った。

「所詮は女か、ここの程度とはな」

「はあ……はあ……なめないでよ……」

絞り出した精一杯の言葉。

「クック、この状況でよくそんなことが言えるな。
それに、よく見るとお前可愛いじゃねえか」

男は、あたしを起き上がらせると腕を片手で押さえて壁に押し付けた。

「いたつ、ちよつと、離し、んー。」

空いていた、もう一方の手で口を押さえられた。

「この人数で、まわしたら何時間かかるかな?」

言葉の意味は、分からなかつたけど男の眼は興奮していることだけは分かつた。

今、あたしが直面している危機もなんとなく想像できた。

「んー！」

「動くんじゃねえー！」

怖い……逃げ出したいのに身体が動かないよ……いや、誰か……
誰か助けて。

心の中で誰かの助けを求める。

誰も来ないって、分かっているけど……でも、そうでもしないと
あたしの心は恐怖に飲み込まれそうだった。

「その子を離せよー！」

「ぐつー！」

鈍い音と共に男が吹き飛んだ。

誰なんだろ？

拘束から解放された、あたしは、涙がたまっていた眼をこすり目
を開けた。

「神谷……君？」

「ギリギリ、間に合つたみたいだな」

どうして？

彼がここにいるの？
でも、そんなことより。

「なんで来たのー？」

この人数だよ！

早く逃げて！」

「分かってらあ！

だから、お前が立つの待つてんだろ！

早く立て！」

「足痛めてるから立てないの！

だから、神谷君だけでも「マジかあ」え？」

あたしが今この状況で逃げれなことを知つても、彼の反応は軽いものだった。

「だったら、しうづがねえな

「なにしてゐのーー？

逃げてー！」

おたしのせいでこいつなったの。

だから、君は巻き込まれないで。

「そんなボロボロのお前を置いて行けるわけねえだろ」「

やっぱ、こんな時なのに心臓の鼓動が速い。
神谷君ってこんな、頼れるやつだっけ？

だつて、いつもは……

「なんとかすつから、任じとけ」

そこから数十分、あたしの眼には彼しか映らなかつた。

「重くない……？」

「多分、大丈夫」

「そこは、嘘でも軽いって言いなさい」

あたしをおぶってくれてる彼の頬を突いた。

「つー

降ろすぞ」

青紫に内出血してる場所だつたみたい。

「うめん、うめん。

でもさ、なんで助けに来てくれたの？」

「さあ？」

勢いつてやつかな?「

「それでも、ありがと」

彼につかまつてゐる腕に少し力を込めた。
その背中は、温かくて安心できる場所だ。

あたしの心臓の音伝わってるかな?
すうい、ドキドキしてると結構恥ずかしいんだけど……

「ねえ、幼馴染なんだし下の名前で呼んでいい?」

「なんでだよ。

今まで通りでいいじゃねーか」

「いいでしょ、これから功つて呼ぶから、あたしのことも舞でいい
よ」

「気が向いたらな

「いいから呼びなさい

「ぐ……首を絞めるな

少し苦しそうにもがく、姿も可愛い。
功の背に乗つたまま家へと帰つた。

Side 神谷 功

「じゃな所に何しに来たんだよ?」

「いいから早く」

舞に連れられ隣町まで来た。

「のあたりは、近隣の市の中でも野球が盛んな地域だけど……

「一ノ瀬君、連れて來たよ」

「御苦労さま」

「一ノ瀬……？」

確かに一回野球した時いたな。

「君があの時のピッチャーか」

「そーだけど、なんだよ?」

「僕の友達の知り合いである、斎藤さんから君に野球を教えて欲しいと頼まれてね」

水面下でそんな話が進んでいたのか。

「功は、運動神経いんだから何か運動しなって。友達も出来るかもしれないし」

「断つても無意味っぽいな……」

「商談成立だね、よろしく神谷」

そう言われて、差し出された手を握り返した。

これが一ノ瀬との出会いであり、神鳥とも出会いキッカケとなつた。

団体スポーツを本格的にするのも初めてで、仲間と呼べる存在が出来るのも初めてだった。

この時の俺は、ただ楽しみだった。

4年後、一ノ瀬と同じグラウンドで敵同士で会つことになるなんて思いもせずに。

第41話 決戦前夜（前書き）

功視点に戻ります。

第41話 決戦前夜

Side 斎藤 舞

「あたしが知つてるのはここまで。

功がチームに入った後に一ノ瀬君と何があつたかは、知らない」

洗いざらい話して気持ちが楽になった。

別にやましいことを隠してわけじゃないんだけど。

「纖細だけど何処か猛々しい、そして、傷つきやすくて脆い……それが、功なの」

「けど、あいつはそんな態度は一度も見せへんかったぞ?」

「決して、周りに自分の心の内を見せようとはしないもん。いつもバカみたいにため込んで、いつか壊れる……」

神鳥君の事故の時も口には出さず、再び自分の殻に閉じこもつてしまつた。

出会つた時の功のように暗く、無反応になつた。

立ち直らせるのには、苦労したなあ。

「斎藤は、そこまで神谷のことを見つめ……」

「いいの、あたしの気持ちは功には届かなかつたみたいだし。陰ながら、甲子園に行けるよつ、応援をして頂きます」

それが今あたしに出来る精一杯だと想つかひ。

Side out

Side 山中 淳

陰ながら応援するやと？

なら、なんでもこんな悲しいに笑うんや？

「神谷をホンマに諦めるんか？」

「……出来るよ」

「嘘やな、知つてると全部話したのも神谷を諦められないとや
らへ」

「じゃあ……やがれりのー」

彼女は、泣いていた。

「今の功の居場所に、あたしの場所は無いのー
ひとりよがりの気持ちを押しつけて、やがれりのー？」

「打席にも立つてないのに、そんなこと言つなや。
しつかり勝負に出しかば、諦めりや」

「ワイの近くには、無理と分かっていても頑張つてゐる奴もいるんだ
で。」

「じゃあ、ワイは練習あるから。」

神谷と一回ゆくつ語じりよ、世な

Side out

「ねえ……ねえつてば！」

「ん？ なに？」

「何じゃなくて、さつきから呼んでるんですけど?..」

北川は、『立腹のようだ。

昔の感傷に浸っていた俺は、現実に引き戻された。

「わりい、聞いてなかつた

一度、俺の目を睨むように見つめ彼女は口を開いた。

「今日、山中君なんか様子おかしくなかつた?」

「少し静かだつたけど、大丈夫だ。明日はちゃんとやつてくれるだろ」

部活が終わつたらすぐ「帰るし、今日は機嫌が悪いかどうかは知らんがな。

関本たちもすぐに帰つちまうから、北川と二人きりなんだよなあ。

「そうだね。

でもさあ、明日勝つたらベスト4だもんね。
といひ、甲子園も射程圏内だね!」

「そーだな」

「どうした、少年?

嬉しくないのか、ん?」

挑発的な視線かつ、嬉しそうな顔で彼女は聞いて來た。

「逆に聞くけど、北川は嬉しいか?」

「当たり前じやん。

でもね、それ以上に神谷君がマウンドで投げる姿が好きなの

これは、思わぬカミングアウトになつたな。

「だから、先輩たちのためにも少しでも長く夏にしておうな

「そーだな」

「反応鈍いなあ。
勝つ気あるの！？」

「あるよ、満々だ」

Side 北川 沙希

その声は、ハツキリとした意思を示していた。

瞳は、目の前に居る私じゃなくて、別の何かを捉えている。
君の瞳にいつも私が映らないことは、知ってるんだけどね。

暇な時ですら私のことは頭の片隅に無いことは知ってるんだよ。
君がホントは、誰のことを想っているのかも分かってる。
きっと、私がどれだけ頑張っても君の想う人には追い付かない。
私なんかに優しくしないで、その人に気持ちを打ち明ければいい
のに……でも、ごめんね。

君の隣は、居心地がいいから……その優しさに甘えてしまう。
するいよね、だから……私は……

「じゃあ、明日も快勝だね」

「まーな」

彼は、そう言つて笑つた。

Side out

「じゃあ、私二つ切だから

「おう、じゃあまた明日」

「うん、あ、そうだ」

何かを思いだした彼女は、俺の首をつかみ身長差をなくすと、耳元でそつと囁いた。

「自分の気持ちに正直になりなよ……」

Side 一ノ瀬 春斗

「いじやつて、見れば見るほど悲しいな」

家で明日の対戦相手、開成のエース神谷功のピッチングを見ながら呟いた。

まるで、別人だ、僕の知ってる功とは……

勝つためには、手段を選ぶなど教えたのにまだ、神鳥に当たたこ

と引きずつてこらるのか？

確かにあれは、僕が誘導したことを差し引いても、想像以上の事故だった。

しかし、神鳥は復活したんだ、気にすることなど何一つないと言うのに……

「退場してもう少しも早く試合が終わるな」

今の功は、僕の敵じゃない。

彼の中に眠る、獣を起こす前に試合を終わらせよう。

本来の功が目覚めると厄介だからね。

ただ……なんだろ？

功の今のピッティングを見るたびに感じる、このイカつきね……何も関係ないか。

邪魔するなら、全てを潰すまでだ。

Side out

第42話 僕たちの明日

津佐高校との試合前、いつも通り山中とブルペンで試合前の投球練習をしていた。

向こうの先発は、春斗ではないみたいだ。

背番号1の3年生。

「おー、サインはいつも通りでええな？」

「もううん」

舞は……まだ、来てないか……

「さつきから、応援席ばつか気にしどるけど、どうかしたんか？」

「なんでもない、大丈夫だ」

あんな酷い」と言つて、突き放しといて、行き成り試合見に来て欲しいなんて言つても来るわけないか。

北川に怒られるなあ。

「なあ、山中」

「なんや?」

「怪我で退場とかだけは、やめてくれよ」

「行き成りなんやねん、気持ち悪いぞ」

「お前が終われば、俺も終わつてことだ」

言葉では、言い表せないくらいお前には感謝してる。

「潰れるときは、一緒にだぜ」

昨日、北川に言われた言葉は、俺を突き動かした。
北川には、もう俺の気持ちをその時に伝えた。
まあ……ほとんど、流れに言わされただけなんだが。

「自分の気持ちに正直になりなよ……」

「どうゆいつ意味だ？」

北川は、拗ねたように背を向けた。

「正直に……正直に答えてくれる？」

「……答える」

彼女は、一度大きく息を吸って、空に向かつてゅうくつと吐いた。

そして、

「舞ちゃんのこと好きでしょ」

「だから、あいつとはただの幼馴染で、いつも、舞ちゃんのこと考
えてるくせに」つー

その笑顔は、妖しくて、どこか悲しい。

「神谷君と舞ちゃんに距離が出来るようになつて、チャンスだと思
つたのになあ」

北川は、俺が舞を突き放したこと知っていたみたいだ。

「でもね、神谷君のことを知れば知るほどそのままは、私に向いてい
ないと知っちゃうの。
だから……」

俺は、この子を泣かしたのか……

「優しく…………しないでよ…………」

下を向き、震えた声でそう言った。

北川に言われる前から、答えは出てかも知れない。
でも、きっと自分の身が愛しくて、罪悪感から北川に優しくして
たんだ。

最低だな、俺は……

一ノ瀬と再会してから昔のことを振り返る時間が増えた。

そのたびに思う、いつも舞が居て、俺に小言を色々言ってくる。

当たり前のよつに思つていたけど、無くなつた今では少し寂しい。

自分の気持ちと向き合へば、答えは簡単に出了た。

俺が今、北川になんて言つべきかも。

「じめん……俺は……北川の気持ちに答えることは出来ない」

「そりだよね、知つてたよ。
だから私は「でも!」え?」

正直な気持ちを言つんだ。

「北川と話してると本当に楽しかつた。

隣に居てくれるのが、嬉しくつて。

でも、俺は、北川の気持ちに応えることは、出来ない

自分からの返事は、君の名前ではない別人の名前を言つていた
から。

それでも

「北川が俺にとつて、特別な存在であることに変わりはない。
それに、夏の大会でここまで勝ち上がれたのも北川のお陰だ」

「じゃあ……もう、好きななんて言わないからあ……神谷君のこと忘
れるように……努力するからあ……今までみたいに、接してくれ
ますか……?」

情けない、泣いてる北川を見ると逃げ出したくなる。
ホント、俺は情けない奴だ。

言葉が詰まる、言つしかないんだ、進むことしか道が残されてい

ないのに心は、まだ後退を求めてる。

「ヘンツウナガシマジナ」、『スニーカー』

ありがとう、そう言って彼女は、瞳を拭つた。

「だから、舞ちゃんと仲直りしなよ!」

「ハサヒツリ」

今更なたれ
村上と付喪神にてるほいし

「うだうだ言つてないで、とりあえず明田の試合見に来てもらえな
よ」

俺から携帯を取り上げ、何やら色々とこじりっこるそして、

「送信完了」

めでか

「舞ちゃんにメール送ったから。」

文部省

先ほどまでとは打って変わって、晴れやかな笑顔で去っていった。

「神谷君、ロージン持つた？」

試合開始前直前、ベンチで座る俺に北川が聞いて来た。

「持つてない、ビニにある？」

「はい、新しいのだから紛失させないよ」と

相変わらず、準備がよろしく」と。

「へいへい、分かりました。

じゃあ、そろそろ整列だから」

「うん、頼みまっせ」

「任しどけ」

ベスト4進出をかけた試合だけど、今までになく感じ興奮して

る。
久しぶりだなこの感覚。
何か色々吹っ切れた感がある。

中学の時の試合開始前は、早く始まつて欲しくてウズウズしたもんだ。

久しぶりに思い切つて投げてみたいけど、試合をぶち壊しにしたらなんにもならない。

とりあえず、落ち着いてこいつ。

Side 斎藤 舞

昨日、功から送られてきたメールを見ながら、血圧室のベッドで寝転がっていた。

恐らく、試合はもう始まっている。

試合会場は、一番近いところだからすぐに行けるけど……

あたしが見に行かなかつたら功はどう思うかな？

今更、見に行くのも気まずい。

それに

「最後の文みたいなの書かれたら余計にだよ……」

試合後に話したいことがある

メールの最後の一文にそう書かれていた。

何を話す気だろ？

今になつて、あたしと話す」となんて何も無いはずなのに……

不安が胸を押しつぶそつとする、この話は、きっとあたしこいつ嫌なことだとなんとなくそんな気がしていた。

それ以前に、試合への招待も……

「直接言つてこいよなあ、バカ……」

携帯を閉じて、頭の中を空にする為に再び瞳を閉じた。
一度寝するなんて、久しぶり、なんてことを思いながら。

Side out

第43話 眠れる獣が目覚めると

Side 神鳥 哲也

「神鳥君ー、これで3季連続の甲子園だけど意気込みは？」

「春は、準優勝でくやしい思いをしたので今度こそ優勝を狙います」

「今や全国屈指の打者になつたわけだけど、対戦したい投手とかはいる?」

「こまかよ。

今は、無名の公立校のHースで僕が唯一全く歯が立たなかつた投手です」

神谷、君と対戦出来る日を楽しみにしてるよ。

「今日もナイスバッティングだつたな」

「久木監督！ まだ、待つてたんですか？」

取材陣から解放された僕を待つていたのは、我が聖王高校監督、
久木 忠俊。

現役の頃は、館鳳高校のキャッチャーでキャプテン。
彼が居るから、今の僕は居る。

「俺の旧友が監督してる、高校が今試合、やつてんだよ。
それの経過をちょっとな」

監督の旧友であり、僕が対戦を熱望する神谷を有する開成高校の
監督、加持 幸一。

現役の頃は、当時高校生？！と言われるほどの投手だつたとか。

「どうちが勝つてるんですか？」

「それが電波が悪くて初回の攻防で更新が止まってるんだ」

携帯を空にかざし色々しているが、反応がないらしい。
このままでは、ラチがあかないでの監督の車にとりあえず乗った。

「加持監督つて、指導者としてどうなんですか？」

さつき、そのコンビニで買ったイチゴオレを飲みながら聞いて
みた。

「高校を卒業してからは、一度も会っていないからな。
監督としては、どうなのが知らん」

「加持監督が行方をくらました……でしたっけ？」

「そうだ」

春の近畿大会で神谷の名前を見つけたときだつた。その記事を読んでいる僕に加持監督のことを色々教えてくれた。高校を卒業してから加持監督とは、誰とも連絡はとれなくなつたらしい。

かつてのチームメート、藤井と言う名の人から生きていると連絡を受けるまで監督は、加持監督の生存を疑っていたほどだ。

「お、データが更新されたぞ」

「経過は、どうですか？」

神谷が先取点を取られるとま、考えにいく。
同点か、リードしてゐるか……

「3-0で開成が負けてる

Side out

結局、気になつて来ちゃつたけど功が3点も取られてるなんて…
：一体何が？

「まいねえ！　じつち、じつち

応援席に居る愛に見つかった、隣には飛鳥も居た。

「神谷の奴、調子悪いみたいやね」

「どうやつて3点も取られたの？」

「四球フォアーボールで、出たランナーをヒットで返された」

「それに、こうの様子がなんかおかしいの」

愛に言われて、マウンドで投げる功を見た。
高校に入つて功の投げる姿は、何度か見たけど今の姿は何処か懐かしい。

「そーかな？　

中学の時は、あんな感じのめちゃくちゃなフォームだつたじゃない」

「フォームは、キレイな方がいいに」「そつかなあ？」「飛鳥先輩？」

「ウチには、今の神谷の方が違和感無いように感じられるけど、
ただ、本人がどう思つてるかは、知らんけどな」

「どうゆうじ」と？

「公立校で主力投手が自分しか居ないつて状況、加えて神谷元来の精神的甘さ……多分それが邪魔して、あいつ本来の力は、出し切れてへんと思つ」

じゃあ、高校に入つてフォームがキレイになつたと云ひより、大人しくなつたつてこと？

それなら、今の功は、昔の自分を取り戻そうとしてるつてこと？
……分からない、功が何を考えているか。

いつの間にか、功の心の中は見えなくなつてしまつた。
彼があたしに見せないよ^ううに、していただけと思つていたけど、ホントは違う。

あたし自身が功から田をそむけていた……だから、今は彼の一動見逃さず見つめよう。

「ツーアウト、満塁やな」

横の飛鳥が呟いた。

Side out

Side 山中 淳

「スマセン、タイムお願いします」

今日、6個田の四球にたまらず、タイムをとつてマウンドの神谷フォアボールの元へと向かつた。

「ど」か痛めとんか？」

ボールに威力はあるのに、今日の神谷はどつもボールが荒れ過ぎてる。

試合前から集中力に欠けてる感があるしな。

「ど」も痛くない」

「なら、いい加減ワイのミットに集中せえ。
次は、先制タイムリー打つとる一ノ瀬や。
中途半端なボールは、打たれるで」

「了解」

笑顔で言われてもなあ……

Side out

ミットを見ろか……確かにいつもに比べると集中できていない自分が居る。

ローディングを捨て手で遊ぶ、目線を応援席に目を向けた時だった。

「來てたのか……」

眼に入ったのは、見慣れた幼馴染の顔。

不安そうに見つめる顔は、見たことが無かつた。

まあ、こんな不安定のピッチングじゃそもそもなるか……

「3点ビハインド……サーフアウト満塁……よつしゃー！」

ローディンを地面に捨て、山中を見る。

今、追加点を取られたら試合が決まるかもしない。

追い込まれた状況でも、焦りは無い、どうやら俺は高校に入つてから寝ていたようだ。

窮地に追いつめられて、背筋にゾクゾクした感覚が走る、俺の中で何かが眼を覚ました……

第44話 繰り返される悲劇

Side 山中 淳

「これが今の功の限界だよ」

打席に入った、一ノ瀬がそう言った。

「なめんなや」

「眠つたままの功は、敵じやないよ」

今の中谷は、本来の姿じゃないって、言いたいんか？
ワイスは、今が一番やと思つてる。

過去どうであれワイスは、ワイのやり方で中谷を引っ張つて見せる。

初球のサインは、スライダー。

しかし、バッテリーを組んで初めて中谷が首を横に振つた。
残りの球種は、直球のみ。

慎重に変化球から入るつと思ったが……中谷がストレートを投げ
たいなら投げさせるか。

右打ちの一ノ瀬から一番遠い、アウトコースミニットを構えた。
それを見た中谷は、一瞬笑つたように見えた。

Side out

Side 一ノ瀬 春斗

「つ！」

「うむ」とだ……初球に身体スレスレのインコースだと?
それに今のボールを投げた功の顔は、笑っていた。

セットポジションに入った、功から発せられる獣のような野生の
ようなオーラ。

それを感じ取った時僕は、ある確信を得た。

眠れる獣を起こしてしまった

「ファール！！」

高めのボール球に手を出してしまった……そつだ、ボール発せら
れる圧倒的圧力……

生き物ように、唸るこのボールこそ功の本来のストレート。

……出来ればここで試合を決めたかったが、仕方ないか。

Side out

頭の中を空にして、山中のミシト田がけて腕を思い切って振る。
今までは、無意識のうちに力をセーブしていたようだ。
指先に残るボールの感触、腕を振り切った後の解放感……

「フー……」それで終わりだ……！

3球目もストレートを投げ込んだ、乾いたミシトの音を立てながら
ボールは、吸い込まれていった。

・

・

「さつきのピッティングがお前の全力か？」

ベンチに戻り喉を水でうるおしている時、山中がそう話しかけてきた。

「ん？ 別に昔のように思い切って投げただけだよ。どうやら、春斗が言うように俺は、寝ていたらしい」

「眼が覚めたんか？」

「まあな、この先は、1人もランナーを出さないつもりだよ」

「頼もしいなあ」

山中は、肩をくぬぐった。

さて、ボチボチ、反撃開始と行きますか。

Side 藤井 高志

5回の満塁のピンチを免れてから、開成に流れが傾いたか。ついに7回の開成の攻撃で同点、打席には3番を打つての神谷君。

「藤井さん、津佐高校が一ノ瀬君をついて投入しましたね」

飯村が暑そうに額の汗を拭いながら言った。

「ツーアウト2、3塁だからな、満塁策をとつても次は、4番の中君だから勝負しかない」

同点の場面でクリーンナップ……しかも、打席の神谷君は、5回のピンチを切り抜けてからのピッチングのリズムがいいから、気分も乗っているはず。

「ここで決めるか……？」

打席の足場を均し、神谷君が静かに打席に入った。

「さてと……」

春斗は、右のサイドスローだったな。
左打ちの俺からは、見やすいから欲張らずセンターから左方向を狙うか。

決め球は、スライダーだろうな……

俺に変化球を教えてくれたのは、春斗だ。
野球の師であり、初めて出来た親友……だからこそ俺の手でケリをつけてやるよ。

初球は、アウトコース低めギリギリのストレート、手を出してみたが打球は、バックネットへ。

タイミングは、大丈夫そうだな。

次は、打たせてもらおうか。

Side 一ノ瀬 春斗

功の奴は、相変わらずテラメな打撃センスだ。

あんなストライクギリギリなんて、普通は初球でアジャストするなんて出来ないのに。

やっぱり、功にはここで舞台から降りてもらおうか……

君のように才能があるやつを見るとイラつかんだよ。

僕がどれだけ努力しても君は、どんどん先へと進んでしまう。
どんな秀才や天才も壊れたら、ただのガラクタつてことを教えて
やるよ!!!

「なつ……」

抜けたボールを装つて頭部を狙つた……しかし、その顔面スレス
レのボールを大根切りで打ち返された。
打球は、幸いフェールだつたが……

「化け物め……！」

歯ぎしりしながらそう呟いた。

Side out

ついに頭部を狙つてきたか……
俺たちのしてる球技は、人を殺せるつてことを分かつてやつてん
のか？

一步間違えば、大事故につながるんだ。

お前が何を考えて、こんなことを始めたか知らねーが、ふざけた
ことをするのもここまでにしてもうつか。

捕手とのサイン交換を済ませ春斗は、再びセットポジションへ。
カウントは、ツーナンシング……俺が圧倒的不利な状況だ。
おそらく、外角低めの真っ直ぐか……それとも……

今の一ノ瀬の投球は、意図的にか？

高校野球では危険球による退場は、無いにせよあからさま過ぎやろ。

「神谷！ 危ないと思つたら避ける！」

ネクストから声を送つたが、聞こえてないのか神谷は、反応しない。

少し間をおいて一ノ瀬が投球動作に入った。
ネクストから見てた、ワイにはその投げたボールの軌道がハッキリ見えた。

頭部へと向かうボールの軌道が……

「避ける！！」

しかし、神谷は打撃動作に入っていた。
打ち返す気が……！

Side out

2球続けて同じコースだと？

なめんなよ！

フェアゾーン打ち返すために、前方の足をオープン気味に開きバットを叩きつけるようにボールへ。

いただき！

そう思つた、しかし、ボールは右にスライドし俺の顔面へ。
ス、スライダー……

声が出なかつた、それは2年前に見た光景と同じだつた。
ただ、違うのは、当てられたのは2年前に当たる人。

「神谷！」

声を張り上げて、加持先生がベンチを飛び出した。
割れたヘルメットの横で倒れた神谷君は、動かない。
う、うそでしょ……そんな……神谷君が……

加持先生と山名君に肩を貸してもらい、重い足取りで神谷君が治療のためにベンチへ戻ってきた。
そのまま医務室へと向かつた神谷君は、数十分後に頭に包帯をしたまま帰つてきた。

「神谷君大丈夫？」

「まーな、当たつた直後はフラフラしたけど大丈夫……と思つ」

「神谷、医師にはなんて言われた？」

「…………問題はないと一言だけ」

嘘だ、今だつて足元は定まつていない感じだ。
止めたい……もう一回当てられたらどうなるか……
加持先生が止めてくれることを願うしかない。

「止めても無駄そうだな……」

「だから、大丈夫ですって」

「わかった、そうゆうことで采配をしよう。
ただし、少しでも俺が違和感を感じたら、そく交代だ」

「了解です。

北川、そこのバットとつてくれ」

そんな危険な状態で本気でいくの?
君の帰りを待ってる人は、居るんだよ?
たかがスポーツでもう会えなくなることだつてあるんだよ?

「北川?」

今、私が持っているバットを渡せば君は、また出て行くんだね。
なんでそこまでして、必死に甲子園を目指すの?

「大丈夫……打つてくるから」

耳元でそう言って、立ちすくむ私からバットを優しく奪い去り、
背番号1は出て行った。

Side out

第45話 終局

S·i·d·e 神鳥 哲也

寮に帰ったあとも部屋のパソコンで開成高校の試合経過を見ていた。

試合は最終回、津佐高校の最後の攻撃へと入っていた。

7回に神谷のヒットで1点を勝ち越した開成は、その1点のリードを保つまま逃げきりうとしていた。

「今年の夏は、神谷に会えそうだ」

そう思つと嬉しさがこみあげてくる。

彼は、僕を熱くさせる数少ない投手だ。

中3の時の試合だって、楽しくてしようがなかつた。

僕の不注意で最後まで出来ずに残念だったが……

避けようと思えば避けれたが僕の身体は、石のように固まって動けなかつた。

神谷の投げるボールに見惚れていた。

だから、もう一度打席で見たかった、彼の投げるボールを。

「最後の山場か……」

開成高校は、最終回ツーアウト満塁のピンチを迎えていた。点差は、1点……どうやって抑える気かな？

打席には、春斗が入った。

1点差の最終回、今ここを乗り切るには、最後のカードを切るしかなさそうだな。

前の打席は、ストレートで押しすぎたが春斗のことだ、俺の細かい仕草から球種を判断するだろう。

アウトに仕留めるには、あいつの知らない切り札を使つしかない。

初球のストレートを見逃し、ストライク。

難しいのは、ここからだけど……山中のサインは、スライダー。

キーン！

痛烈な音を残して打球は、一塁線へ。

墨審の判定は、ファール。

危なかつた、あと数センチで逆転タイムリーになるところだった。

「タイムお願いします」

山中がタイムをとつて、マウンドに寄つて来た。

「ナイスタイミング」

「ストレートもスライダーも打たれるような気がすんねやけど?」

山中の勘は、よく当たる。

この辺の感覚も凄いといつも思つ。

「多分、考へてる」と一緒に

「使うタイミングは、ワイに任せてくれへんか?」

「当然任せるよ。

頼むぜ相棒

今さら、確認するまでもない。

信用し過ぎと言われても仕方ないほど、心中にコードは、まかせつきり。

まあ、今日は初めて首を横に振つたが。

「今日もキレイな夏空だな……」

帽子を取り、マウンドから見上げた空は、今日も広く高い。
照りつける日差しは熱く、帽子を取った頭に当たる風は、心地いい。

正直、野球を始めたのも再開したのも周りの人に後押しされた部分が大きかった。

でも、やつていてよかつたと思つてる。

野球をしている時は、他人との繋がりをより強く感じられる。
マウンドに居る時にかけられる、スタンドからの声援、背中越し
から聞こえる仲間の声。

色々な人に対えられて今の俺は、居るんだと強く思う。

でも、一番近くで支えてくれていた彼女を傷つけてしまった。

今さら謝つても許しては、もうえいかもしけないけど……それ
でも俺は……

「セヒト……」

帽子をかぶりなおし、ホームの方へ視線を移した。先には、仏頂面をしている山中。

そんな、怖い顔すんなよなあ。

「楽しんでニーザ……」

自分にも言い聞かせるように呟いた。

Side 一ノ瀬 春斗

僕を追い込んでからは、2球続けてストレートか。釣り球のつもりだつたんだろうが、もうボール球には、手を出さないよ。

どのみち、功は、もう限界に近いはず、延長になつてもかならずウチが勝つ。

ミートに徹して、来たボールを叩く！

山中のサインを確認した功がセットポジションの体勢で、グローブの中のボールを握りかえる。

スライダーじゃない……3球続けてストレートか。

僕が当てた死球のせいでもう限界だろ？と、今楽にしてやる。

功が足をあげた、少し捻りのきいたフォーム、しなつた腕からボールが放たれる。

投げた瞬間に分かつた、甘いコースに来ていると。もらつた！

タイミングは、身体が覚えた、覚醒後の功のストレートのタイミングも完璧。

捉えたはずだった、ボールが予想を遙かに上回り遅いことを頭に入れておけば……

チエ、チェンジアップだと……！？

Side out

この夏に向けて練習した、新しい変化球、『チェンジアップ』。実は、最初に春斗に教えてもらつた変化球だ、当時は、ボールを抜くつて感覚が分からなくて習得をあきらめた。

タイミングを外された春斗は、空振り三振。割れんばかりの歓声が響く中、気がつくと俺は、ガツツポーズをとつていた。

「まさか、チェンジアップとはね」

試合後のチーム同士のあいさつの後に春斗が話しかけていた。

「ちょっとは、成長したろ？」

「そーだね、完敗だよ。

頭、大丈夫かい？」

「多分な」

「相変わらず規格外れな奴だな」

「どーも。

ただ、ナイスボールだったぜ」

「ハツハ！

本当に君は、面白いやつだよ…」

笑いながら春斗は、涙を流していた。
やり方は、間違っていたかもしねいけど甲子園を本気で目指して
いたことに疑いは、無い。

「ありがとな、春斗」

俺に野球を教えてくれて、試合を通して色々なことを思い出させて
てくれて。

「気持ち悪い奴だ」

……山中にも似たようなこと言われたな。

Side 一ノ瀬 春斗

ありがとうか……随分と大人になつたもんだ。
昔は、僕の後ろに付いて来るだけだったのにな。

「これで高2の夏が終わつたのか」

誰も居なくなつたベンチで呟いた。

ベンチの外では、先輩たちが泣いている。

申し訳ないと呟つ、気持ちと同時に喜びが心の中に存在した。

「やうか……そゆつことか」

気づいてしまつた。

僕は、功のファンになつてしまつていたんだ。
彼の見せる才能に惚れてしまつっていたんだ。

才能のある選手なんて目障りだと思って、今まで潰してきた。
でも、功だけは潰れなかつた、いや出来なかつたの方が正しいか。
甘いな、僕も……

けど、この気持ちに気づいてしまつた以上、もう野球は、出来ないな。

これからは、陰ながら功の応援でもするか。

「行けよ、甲子園」

誰も居ないベンチで願いを込めて、呟いた。

S
i
d
e

o
u
t

第46話 夏空の下で

「せひつと、帰りますか」

ようやく病院から解放された。

試合後、頭部に死球を受けた俺は、念のため病院へと向かわされた。

一応、異常は無し、ただし今夜一日は安静にしてとのことだった。

「頭のほかに、肩や肘は、大丈夫か？」

付き添いで来てくれた加持先生が聞いて来た。

「大丈夫です」

「そりか……迎えも来ているようだから俺は、帰るぞ」

そう言って、加持先生は車へと乗り込んでいった。
迎えつて、一体だれが？

「舞……？」

その姿は、間違ひ無く彼女だった。

「大丈夫だったの？」

「え？ まーな。」

それより、なんでこんなとこに居るんだよ?」

「沙希ちゃんが病院行つたつて、教えてくれた。それに試合後話があるって、功が言つてたから」

北川め……余計な一文を追加しやがつて。
どうする?

この状況で今さら何も無いなんて不自然すぎる。
とりあえず帰りながら考えるか……

舞と並んで帰路につくが、会話が続かない。
と、言つよりも、俺の頭の中はこの危機的状況をどう乗り切るか
に全ての思考が傾いている。

会話をしている、余裕など……無い!

隣に居る、彼女の横顔を見る。

昔と変わらない、いや昔よりキレイなつた顔立ち。
気の強く、世話焼き所も昔より傾向が強くなつたが……

「功?」

「つー?」

なんでもない!」

視線に気がつかれたか、相変わらず勘と言つたが第6感が鋭いと言つ
か……

「ねえ、話つて何?」

Side 斎藤 舞

「あー……その……あれだ……」

恥ずかしそうに頭をかきながら、言葉は、ぎこちない。

なんとなく、察しはついていた、あのメールは功が送つたものじ
やないつてことが。

だから、今からする功の話は、きっとあたしにとつて嫌なことには
違ひない。

「沙希ちゃんと付き合つとか?」

心の内側で思つてることを聞いた。

功のことは、遠くからでもずっと見てた。

だから、沙希ちゃんと一緒に居ることもよく見た。

彼女が功のことを好きなのは、飛鳥から聞いていたから仕方ないと、自分に言い聞かせた。

功が何も言ってこないのは、あたしには、関係無いからだと。

「北川？」

「何言つてんだ？」

まだ、とぼけるつもりなんだ……！

Side out

「だつて、あのメール功が送ったんじやないんじょ？」

「何故、ばれてるんだ？
北川が言ったのか？」

「どうなの？」

無表情だけど、その目には、怒りが含まれてる。

「…………そーだよ、北川が送った」

「付き合つてゐるから？」

「それは、違う」

「じゃあ、なんで沙希ちゃんにあんなメール送らせたの……」

今にも崩れそうな表情で彼女は、叫んだ。

俺の自業自得だな……

「ねえ……何か答えてよ……怒らないし、ぶたないからあ……お願
い……」

泣いてる彼女を見るのが、つらいから、反対の側を見た。
今、俺たちの歩いている河川敷には、夕陽がキレイに差し込んで
いる。

ちよつと今この場所は、俺が舞に野球を始めるように言われた場
所。

そして、俺が甲子園を田指す出発点になつた場所。

「舞、ちよつと寄り道してもいいか?」

戸惑う、舞の腕をつかみ半ば強引に川の近くまで連れて行つた。

「少し、長くなるかもしれないから座りなよ」

「いや、早く本当の」と言つて—

「舞、頼む落ち着いて聞いてくれ」

「何を!?

今になつて、あたしに言つことなんて何も無いはずでしょ!…
功が誰と付き合おうとあたしには「それ以上は、しゃべるな」つー

少し、威圧して言いすぎたかな?

彼女は、少し怯えた表情で俺の顔色をつかがつている。

「俺……お前のことが好きなんだ」

自分の正直な気持ちを口にした。
彼女は、目を丸くして俺を見ている。

「北川は、もう知ってる。

あのメールは、北川が俺とお前の仲を直したくて送ったんだ」

「それって……ほんと?」

「本当だよ。

今さら迷惑だよな、村上と付き合つて、「付き合つてない」は?」

「村上君には、『めんつて書つた』

「一ことは、俺のただの勘違い……

「なんで?

ずっと、一緒に居るからつきり「どつかのバカが好きだからだよ!」はい?」

涙目でそう叫ぶ彼女を不謹慎ながら、可愛いく思つたのは、俺と君だけの秘密だ。

「何?

その不思議そうな眼は?」

拗ねたよつて口元をとがらせながら、涙をぬぐつ幼馴染。

「えーっと、舞も俺のこと好きだったの?」

「当たり前だ!」

でなきや、功の身の回り世話なんてするわけないでしょ!…
この変態、鈍感バカ!…」

何故俺は、こんなに責められてるんでしょうつか?

「へー、わうだつたのか

「もつと驚け!」

ぐつ、公共の場で殴らなくてもいいだろ。

「ねえ…… もつ一回、好きひて言ひて……」

可愛すぎだろ…

思わず抱きしめちまつた。

「ひゃ!

ちよ、先に言ひて「。」「…」

面と向かつて言つのは、恥ずかしいから耳元で囁くよつて言つて
みたんだが…… 舞が固まつた。

「何か、反応してくれないと恥ずかし」

俺の言葉を彼女が遮った、息苦しさと共に確信する。

自分はこの人が好きなんだと

いつも、自分の殻に逃げ込もうとする自分が嫌いだつた。自分が傷つくのが怖いから、他人とは距離を置くくせに誰から求められることを望んでいた。

でも、舞はそんな俺のそばにずっといてくれた、中3の冬に自暴自棄になりそうな俺を立ち直らせてくれた。

彼女の父の夢であり、いつしか彼女自身の夢になり、そして俺の夢になった『甲子園』。

最初は、舞が喜ぶ姿が見たくて必死だつた。

中学に時には、一度は諦めた、1人の幸せを奪つた痛みに俺の心は、耐えることは出来なかつた。

けど、俺は今、その夢の途中に居る、新しく出会つた仲間と共に

さつと、『どれだけ』の道を進み、迷つたとしても、俺の歩みの出发地点は彼女なんだ。

「えつと……そろそろ離してくれない?..」

「え?.

『じ、『めん』

「ううん、嬉しかったよ。
ちよつと、恥ずかしかつたけど……」

当たり前だ、俺としては恥ずかしかったので2度と口はほしたくない。

「ねえ、どうするの？」

「何が？」

「……流れでわかりなさい」

「待て、そんなに殺氣を振りまくな。

……俺は、けじめがつづくまで付き合つ氣はない」

「神鳥君？」

「そーだ。

あいつとの再開を果たすまでは……他のことをする余裕はない」

甲子園に行くことすら、狭く険しい道であり、全てをかけるつもりで行かなれば到底たどり着けるものではない。

それに、このけじめを付けないと、俺は君の隣に胸を張つて並べないから。

「だから、もし舞が村上と付き合つても俺は「なら、待つしかない

……か」は？」「

「あたしの方を向かせるのにどれだけ待つたと思つてゐるの？

1年と少しくらい、なんともないよ。

ただ……」

最後の一言が発せられるとき同時に感じた悪寒……聞くなと俺の本

能が叫んでいる・

「他の女に田をくれたら……楽しみね」

「いつの笑顔ほど、破壊力のあるものは無いな……色々な意味で。

「解しました」

「よろしくー

あ、待つ代わりに一つ約束してほしいなあ

「めんなさい、上田遣いで申し込まれたら断れません。

「なんだ?」

「甲子園優勝のウイニングボール頂戴
あ、もちろん夏の甲子園ね」

「俺の道に」ゴールはあるのか?

「ふざけんな。

甲子園に行くだけで、どれだけ大変か「ダメえ?」ぐつー

ダメだ!

「の上田遣いと書いた兵器の前に俺の闘争心はすでに折られている

……

「分かつた、全力で頑張ります」

なんて、無茶な約束をしたんだ。

「よし！

楽しみにしてるね。

じゃあ、帰ろつか！」

……この笑顔が見られただけで約束をした甲斐があつたかもしない。

第47話 終末へのプロローグ

「功！ そろそろ起きないと時間遅れるわよー。」

「うへん……もひちょつと……」

「早く、起きろおー！」

「バカ！ 布団をめくるな今、何月だと思つてんだーー！」

夏が終わって、秋も終り寒さが増した12月、俺は幼馴染と掛け布団の取りあいをしていた。

今年の夏は、予選決勝で報明に負けて甲子園出場は、叶わなかつた。

しかし、新チームで臨んだ秋の県大会で優勝しその後の近畿大会も制覇した、開成は、春の甲子園出場がほぼ内定していた。

一方で神鳥のいる、聖王高校は、夏の甲子園を全国制覇を達成し、全国から狙われる立場になつた。

そのせいか、秋の大会は、関東大会一回戦で負けて、春の甲子園の出場は、絶望的。

神宮にも出てこれないから、俺が神鳥と再開するには、最後の夏しかチャンスが無くなつた。

「うだうだ、言わないで起きなさい。

それとも身ぐるみの無いその身体に、もみじでも残して欲しいのかしら？」

「いえ……起きます

なんて、殺氣だ……マジで、殺される。

「早く起きてよ。

過刻したうなんで
言ふ詫する一モジなのたか……」

「そりや、お前のせいだろ？」

お前がもーと、もーと、へるもーしから昨日の夜は、大変なことになつたんだろ。

卷之二

この後、数分間の記憶が俺の中から抹消された。
起きたら頭に痛みが走ったことしか覚えていなかつた……

「神谷あ！ 10分遅刻や」

我らのキャプテン、山中が怒っている。

「えー、セーフだろ?」

「いや、アウトや。

まったく、夕方の6時から祝勝会やのに遅刻するハビリもハビリと
や?」

「いやー、舞の奴が昨日の夜、色々といひながら黙つたやつだよ。」
「ぐー。」

「夜?」

「な、なんでもないの!」

功の奴なに言つてんだうねえ?」

とりあえず、殴り続けるのをやめてくれないだろ?か?
結構、痛んだが。

「まあ、なんでもええわ。

加地先生とみんな先入ってるで!」

「へいへい

確か、しゃぶしゃぶだったよな?

しかも、加地先生のおじりで、一回や暴食するしかないな。

「ねえ、山中君、あたし部外者なのに来てよかつたの?」

確かに、何故舞も連れてくる必要があつたんだろうか?

俺としては、嬉しいけど。

「大丈夫やで、練習試合帰りの飛鳥と斎藤の妹も来てるから」

それって、大丈夫な理由にならねえだろ……

・・・・・・・・・・・・・・・

「丸川！ 貴様、人の肉に手を出したな！」

「うるせえ、この分析眼鏡！」

「2人とも落ち着いて下さい！」

丸川と関本は、相変わらず些細なことでケンカをしている。
止めに入つた、桜井が一番びびつている。

「北川、お茶いる？」

「うん、ありがと」

そーいや、新チームになつてから、山中と北川がよく一緒に居るのを見かけるんだが、もしや？

……俺には、関係ないことだな。

壁際の席に座り、みんなの様子を見てた。

みんなで居る時もたまに無性に1人になりたい時がある。病気だな、ここまで来たら。

「ねえ、功。

いつもこんな賑やかなの？」

「ああ、そうだよ。

面白いだろ」

「面白いかどうかは、知らないけど、功が楽しそうに野球をする理由は、分かったかな」

「あつそう」

つれないやつめ。そう言って、舞は、少し拗ねてしまった。

今、俺の隣には舞が居て、仲間に囲まれて日々が進んでいく。

いつまで、この温かい場所は、続くのだろう？

始めて出来た、強い繋がりの消失への恐怖。

でも、心中には、再び1人になりたいと思う自分もいる。真反対の自分が存在する心の中。

矛盾が俺の本質なら、いつか俺は自分で今の関係を壊すかもしない。

……今は、心配する必要はないな。

俺は、少なくとも今は、他者とのつながりを求めているのだから。

フツ、と口元を緩めた少年は、近くの窓から外を見た。

冬の始まりを思わせる空は、雲がかかり光は差し込んでいない。
木からその命を終えて、地に落ちた葉が風に吹かれ道行く人の足
を転がつていく。

「そろそろ、冬だな」

そう呟いた少年が世間を賑わす、『甲子園の怪物』と世間に認知
され騒がことになるのは、この時は、まだ誰も知らない。

第48話 春の甲子園（前書き）

冬が過ぎ春が来た。

全国から選びぬかれた高校が聖地に集つた。

それは後に語られる夏の始まり。

そして終わりの始まり。

第48話 春の甲子園

「緊張しとるか？」

試合開始前にベンチ前で選手みんなで並んで開始の合図を待つて
いる時、我が開成高校、不動の4番、山中 淳がそう聞いてきた。
俺よりも、淳の方が今にも朝に食ったものを吐きそうな顔をして
いる。

「お前が大丈夫か？」

「ほっとけ、これでも必死に緊張かくしとんねん」

肩を軽く叩かれて突っ込まれる。

大会初戦なのに淳とこうして、やりとりするあたり自分で思つて
いたよりも余裕があるらしい。

ベンチからスタンドの方をじっと見ていると、審判の人が出てき
て集合をかけた。

「行くぞ！！」

山中の掛け声と同時に選手全員で飛び出す。

挨拶をすませ後攻の開成高校は、それぞれの守備位置へと散つて
いく。

俺は、ゆっくり自分の場所へ歩いて行つた。
始めて投げる、真っ黒なマウンド。
歩数を計り、足場軽く均す。

夢舞台のマウンドの土は、抵抗なく足を流れて行く。

よつやく、辿り着いたんだな。

ふと、そんなことを思い、スコアボードを見た。

甲子園独特の浜風は、スコアボードの上にある旗を、激しく振らしていた。

「功！」

振り向くと、淳から試合で使うボールを投げられた。

試合開始前の投球練習をしろと言つ、意味なんだろつ。

軽く6球を投げ、最後の1球を受けた淳がセカンドへ矢のような鋭い送球を投げる。

そのボールを内野陣が回し、最後に俺の元へと帰ってくる。

「しまつてこづりーー！」

淳がいつもと同じ声を張り上げた。

俺の後ろを守る全員が腹の底から返事をする。

スタンドから吹奏楽部が吹く音楽に背中を押され、先頭打者がボックスに入り、審判が試合開始の合図をする。

淳とサインを交換し、甲子園のサイレンが鳴り響く中俺は、振りかぶった。

俺にとって初めての甲子園、春の甲子園が始まった瞬間だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0461t/>

夏空

2011年11月27日16時58分発行